（様式１）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【総括】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 推進地区名 | 協力校名 | 児童生徒数 |
|---|---|---|
| 五條市 | 五條市立北宇智小学校 | １２７ |
| 五條市 | 五條市立野原小学校 | １４６ |
| 五條市 | 五條市立五條中学校 | １１０ |
| 御所市 | 御所市立御所小学校 | ２７６ |
| 御所市 | 御所市立御所中学校 | ２５０ |
| 宇陀市 | 宇陀市立榛原小学校 | ３２７ |
| 宇陀市 | 宇陀市立菟田野小学校 | １６０ |
| 宇陀市 | 宇陀市立菟田野中学校 | ９６ |
| 平群町 | 平群町立平群小学校 | ３２４ |
| 平群町 | 平群町立平群中学校 | ４５０ |

○　実践研究の内容

１．推進地域における取組

(1) 児童生徒の学習意欲や学力の向上

①　学力向上実践研究推進協議会の設置

本県では学力向上に資する施策として、これまでから学力の定着に課題を抱える小・中学校をもつ市町村を指定し、学力向上に係る取組を支援してきた。平成 30 年度からの２年間、希望のあった３市１町の６小学校と４中学校を指定した。本協議会における指導体制の充実を図るため、今年度は、奈良教育大学から３名の学識経験者を招聘し、これまでの学識経験者１名体制から３名体制としたことによる指導体制の一層の充実を図った。１回目の協議会では、昨年度までの実践を踏まえた今年度の取組を、推進地域、推進地区並びに協力校それぞれの立場から報告した。また、これまでの成果と課題を検証し共有するとともに、今後の研究成果の周知の在り方について協議した。２回目の協議会では、２年間の取組の成果と課題を報告し合い、県内に広く周知するための手立てと位置付けている学力向上フォーラムについて協議した。

②　異校種間の円滑な接続を図るための研修の充実

全国学力・学習状況調査等において明らかになった本県の課題「児童生徒の学習意欲や学力の向上」「教員の指導力の向上」「基本的な生活習慣、学習習慣の定着」について、その改善を図るために各推進地区や協力校の実態に応じた取組を推進すると同時に、各推進地区や協力校の要請に応じて指導主事を延べ 21 回派遣し、支援を行った。

### (2) 教員の指導力の向上

#### ① 全国学力・学習状況調査の調査結果の活用による指導改善に向けた説明会の開催

本年度の全国及び奈良県学力・学習状況調査の調査結果から明らかになった本県の児童生徒の課題の改善に向けて、８月には市町村教育委員会に対して、10 月には教員に対して、指導改善のポイント等についての説明会を開催した。説明会では、各学校における取組の参考となるよう「読書活動の推進」「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」についてもエビデンスを基にしてその重要性について指導した。

#### ② 学力向上フォーラムの開催

本年度の学力向上フォーラムを令和２年２月 28 日に開催を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から一堂に会しての開催に替わり、学力向上支援サイト「まなび一奈良」に当日の全体会における講義資料や分科会における報告資料を掲載し、教員の授業力向上等の手立てとした。

### (3) 基本的な生活習慣、学習習慣の定着

自ら学ぶ力を育むための学習習慣の形成には、より早い段階からの啓発が必要であることから、平成 28 年度から「家庭学習の手引」を作成し、小学生とその保護者に配布している。今年度は、読書活動を推進する観点を一層充実した紙面となるよう再構成し、活用を呼びかける予定である。

また、県教育委員会では、児童生徒の読書環境の充実に向けた取組として、読書活動推進フォーラムを開催した。本フォーラムでは、小・中学校の学校図書館の利活用の一層の促進を図るための情報提供や、学校・図書館・地域ボランティアの実践を通して学校図書館の充実・活用について考察するとともに、児童生徒の読書活動や学習活動の推進のために学校司書を効果的に活用している事例を紹介した。

## ２．推進地区における取組

### (1) 五條市の取組

① 授業力の向上

日々の授業において、児童生徒が学習の見通しを立てたり、当該授業で学習した内容を振り返ったりすることができるよう、市が作成した「授業プランシート」の活用を促した。

② 家庭学習の推進

家庭学習を全くしない児童生徒に対する手立てとして、学校全体の学力状況や課題を全職員の間で共有し、学校として組織的に宿題と自主学習をそれぞれどのように位置付けるかを検討するよう各学校に対する働きかけを行った。

### (2) 御所市の取組

① 市全体で学力向上に取り組む意識を高めるフォーラムを開催し、優れた取組を共有した中でも今年度は、「目標振り返りシートによる自己分析等のデータ」を共有し、各校の取組につなげるよう促した。

② 児童生徒の読書時間が少ないという課題の解決に向け、今年度、市内の 11 小・中学校校に学校司書を配置した。残りの１校も次年度の配置を予定している。

### (3) 宇陀市の取組

① 学習指導上必ず実践するポイントをまとめたリーフレット「UDA スタンダード」を作成し、市内全小・中学校職員に配布したり、Web ページ掲載したりして学力向上に向けた取組の周知・徹底を図った。

② 小学校４年生から中学３年生までの児童生徒を対象として、宇陀市生活行動・学習活動調査を４月と 12 月に実施した。各学校において、複数の調査項目から１項目について数値目標を設定し、学校改善の一助として活用できるよう、「プランニングシート」を作成し取り組むよ

う促した。

### (4) 平群町の取組

① 基礎・基本の定着に課題を抱える児童に対する支援として、学習ボランティアを募集し、協力校のニーズに応じて配置した。今年度は、授業者との連携の上、国語や算数の学習における基礎的・基本的な学習の支援を行い、学力・学習意欲の向上を図った。

② 協力校の５年生算数科において、単元ごとに確認テストを実施しその結果をクラウドに送信すると、その結果がデータベースで分析され、個別に最適化されたプリントが返送され、個に応じた課題の解決に取り組むことができる「個別最適化学習」を導入し、学力中位層の児童の学力・学習意欲の向上を図った。

## ３．協力校における取組

### (1) 五條市立北宇智小学校の取組

読解力を身に付けるための手立てとして、「読書活動」「家庭学習」「授業改善」の三点を取組の中心に据えた取組を展開した。中でも読書活動では、「Book Cafe Kitta（学校図書館・学習センター）」との連携を図り、児童がより多くの言葉と出会ったり、様々な文章に触れたりする機会を設け、学力の向上をつなげる取組とした。

### (2) 五條市立野原小学校の取組

課題の一つである「授業力の向上」を解決するために、全国学力・学習状況調査における算数科の問題を全教員で解くことにより育成を目指す資質・能力を共有したり、校内授業研究の中で、１時間の授業の中で児童に身に付けさせたい力を明確にして児童の学びの質が深まるよう「授業デザインシート」を作成したりして、学力の向上を図った。

### (3) 五條市立五條中学校の取組

学力の二極化の傾向がある実態を踏まえ、学力下位層の底上げを図る手立ての一つとして、日々の授業内容におけるポイントの再確認や基礎的・基本的な内容を反復するなどの学力補充の取組や、家庭学習の定着を目指した「自主学習ノート」の中での教員がサポートする取組を通じて学力向上のみならず自尊感情の高揚を図った。

### (4) 御所市立御所小学校の取組

「探究的で協同的な学習指導の工夫」を研究主題として掲げ、算数科における指導力向上の取組を展開した。公開授業前には目標、展開、教材の適正さを学年集団で確認するとともに、公開授業後には事前に共通理解して定めた授業づくりの三つの視点から全教員で検証することを通して、児童の学力の向上を図った。

### (5) 御所市立御所中学校の取組

「主体的な学びを引き出す授業づくりの工夫」を研究主題として掲げ、授業改善の基盤となる授業規律を全教職員で共通理解を図った。また、全教職員が学びを引き出す仲間づくりを踏まえ、授業の「めあて」や「見通し」「振り返り」を意識した「御所中授業モデル」の構築に向けて研究授業を実施した。

### (6) 宇陀市立榛原小学校の取組

ユニバーサルデザインの視点に基づき、算数科における授業改善に取り組んだ。具体的には、単元ごとに児童個々が抱える課題を三つに分類し、「授業デザインプラン」を通じて教員間で共有し、授業実践における検証につなげた。また、児童の読書に対する意欲を高めるため、児童個々に目標冊数を設定するなど学校全体で読書活動の推進に向けて取り組んだ。

### (7) 宇陀市立菟田野小学校の取組

「自分の考えを明確に表現する児童の育成」を研究主題に掲げ、「書く力」を育てる学習活動を創造するための研究を行った。具体的には、児童が見通しをもって学習できるよう学習目標を提示したり、「何を」「どのように」書いていくのかを全体で可視化して示した後に児童が個々

に活動したりするような指導を心がけた。

### (8) 宇陀市立菟田野中学校の取組

低学力傾向の生徒の解消を目的として、「UDA スタンダード」を基本としつつ、「学び合い」を中心に据えた授業研究を実施した。授業研究を実施するに当たり、「学び合い」の意義や「学び合い」を行っていく上でのルールを、全校生徒だけでなく全教員で共有し、全生徒が参加でき互いを高め合う授業を目指した。

### (9) 平群町立平群小学校の取組

「児童一人一人の確かな学力の向上を目指す」を研究主題として、基礎基本の定着を図り、主体的に学ぼうとする児童の育成を目指す取組を行った。具体的には、児童相互の「学び合い」を授業の柱としつつ「誰もが分かる喜びを感じる授業」「主体的に学ぶ授業」「学び合う姿を組み入れる時期や目的」に留意した授業づくりを行うよう、全教員で取組を進めた

### (10) 平群町立平群中学校の取組

生徒の学力や学習意欲を高めるために、生徒同士が学び合う活動を積極的に取り入れた。具体的には、生徒相互での話合い活動や教え合う活動を授業のベースに据え、生徒が気軽に相談できる雰囲気を醸成するとともに、自分の考えを他者に伝えたり聞いたりする習慣形成を図った。また、校内の掲示物を増やすなどの学習環境の整備にも力を注いだ。

## ○ 実践研究の成果

## １．協力校における取組の成果

### (1) 「読む力」「書く力」の育成を通じた学力向上

ある協力校では、これまでの全国学力・学習状況調査の結果から明らかになっている二つの課題（「読むこと」「書くこと」）の解決に向け児童の学力向上を図った。これらの課題の解決は、国語や算数のみならず、他教科等の学力向上に繋がるという仮説のもと、「読書活動」「家庭学習」「授業改善」を課題解決の手立てとして取組を進めた。その結果、今年度６年生児童の各種調査（国語）における全国平均との差を経年変化から、「読む能力」「書く能力」「話す・聞く能力」「言語についての知識・理解・技能」の４つの評価の観点のうち、「読む能力」「書く能力」「話す・聞く能力」の３観点で改善の傾向が見られた。また、今年度の全国学力・学習状況調査（国語）において、全国平均と比較においても同様の傾向が見られ、特に「読む能力」を見取る３つ設問のうち、２つの設問の平均正答率はいずれも 90.9 ポイントであった。

### (2) 授業力の向上

① 校内研修の充実

多くの協力校において、授業の中で身に付けさせたい力を明確にし、児童生徒が見通しをもって学習に取り組めるよう、めあての提示から振り返りを教員全体で共有し実践することができた。中でも、１時間の授業の流れを整理した「デザインシート」を作成し、事前に教員全体での取組の共有を図ったり、公開授業の前日に事前研修を実施し、本時のねらい、展開、教材の適正さ、中心発問等を確認しつつ、公開授業で全教員が意識する視点の共有を図ったりするなど、校内授業研究を活性化させるための取組が定着しつつある。

② 生徒相互の「学び合い」活動の充実

学習規律の定着に課題のある生徒の背景には、基礎・基本が未定着であったり、学習方法が分からなかったりすることがあるとの仮説を立て、生徒相互の「学び合い」を基本とする学習スタイルを教員全体で確立している。その際、「学び合い」の意義や「学び合い」を行っていく上でのルールを、全校生徒だけでなく全教員で共有した。「学び合い」では、習得した知識の再構成を図ったり、自分で考え、発言する、なかまの意見に耳を傾けるといった活動を通じて学びを深め主体性を育てたりすることなどをねらいとしている。継続した取組の結果、主体的に取り組む生徒が増えただけでなく、授業が楽しく、授業の内容がより分かるようになったとす

る生徒の声が増えたとの報告を受けている。「学ぶ楽しさ」「分かる喜び」を味わうことにより、学力向上の土台となる自己肯定感が高まることが期待できる。

### (3) 学習習慣の定着等

① 「家庭学習の手引」の活用

県や市、または学校独自の「家庭学習の手引」の活用を図るとともに、各協力校独自の自主学習モデルを児童生徒と保護者に提示して、家庭における学習内容や学習方法を啓発した。また、県で作成した「家庭学習の手引」の活用状況を把握するとともに、家庭学習の充実を図るために実施したアンケート調査を各推進地区の保護者を対象に実施したところ、92.0%の保護者から「本手引が家庭学習を進める上で参考になった」との回答を得た。保護者に対して家庭学習の意義を改めて示すことで、家庭や学校外における学習習慣の形成が重要であることを理解してもらうことができたと考えている。

② 補充学習の充実

放課後や土曜日、長期休業中における学習の場を設定することにより、児童生徒の基礎的・基本的な知識や技能の定着とともに学習習慣の定着を図ることが今後も期待できる。

③ 読書活動の推進

ある協力校は、全国学力・学習状況調査等の長い問題文を読みこなすことに課題があったため、「読書を習慣化し、児童一人一人の読書量を増やすこと」を本年度の課題とし、具体には、１日に 30 分以上読書する児童を 10～15%増やすことに加え、全く読書をしない児童を 10%減らすことのそれぞれを目標とした。児童各自が読書冊数の目標を「読書カード」に記録したり、隔週の金曜日に「読書タイム」を設定し、読書の時間を確保したりした。また、図書室の環境整備に力を注いだことにより、図書室に足を運ぶ児童が増えた。４年生から６年生の児童を対象としたアンケート調査（４月、12 月）の結果から、「１日に 30 分以上読書する」と回答した児童は、４年生で 11%、６年生で６％それぞれ増加した。また、「全く読書をしない」と回答した児童は、４年生で７％、５年生で５％それぞれ減少した。今後、全国学力・学習状況調査の結果から、初期の課題が改善することを期待できる。

## ２．実践研究全体の成果

本年度、各推進地区や協力校において、それぞれの実態に応じた実践を積み重ねてきた。各推進地区内の協力校１０校のうち３校において、研究発表会を開催し、各協力校の授業や研究発表をはじめ大学教授による講演等、研究の成果と学力向上に関する情報を直接学ぶ機会とした。それにより、各協力校の教員だけでなく、参加した教員にとっても、今後の自校における取組の充実につながるものと考えている。

また、県教育委員会では、児童生徒の読書環境の充実に向けた取組として、読書活動推進フォーラムを開催した。読書活動推進フォーラムでは、104 名の参加があり、事後アンケートからは、本フォーラムが「とても有意義であった」又は「まあまあ有意義であった」と回答した割合が 92.9 ポイントであった。小・中学校の学校図書館の利活用の一層の促進を図るための情報提供や、学校・図書館・地域ボランティアの実践を通して学校図書館の充実・活用について考察するとともに、児童生徒の読書活動や学習活動の推進のために学校司書を効果的に活用している事例を紹介した。

## ３．取組の成果の普及

### (1) 学力向上実践研究推進事業研究発表会の開催

① 五條市立北宇智小学校　令和２年１月 17 日（金）

国語科（２年生、４年生）及び算数科（６年生）の公開授業の後、「論理的に内容を理解し、

本を楽しめる子どもの育成～読解力向上のための『読書』の研究」を主題とした２年間の研究の成果を報告することにより県内に広く普及した。

②　五條市立五條中学校　令和２年１月 22 日（水）

数学科（２年生）の公開授業の後、「基礎・基本を大切にした『確かな学力』の育成～自分自身の良さを活かし、生徒一人一人が向き合う課題を解決していくため、主体的・対話的に深く学ぶことのできる学習活動をめざして～」を主題とした２年間の研究の成果を報告することにより県内に広く普及した。

③　御所市立御所小学校、御所市立御所中学校　令和２年１月 31 日（金）

算数科（５年生）、英語科（１年生）、社会科（２年生）、道徳科（２年生）の公開授業の後、両校合同の全体会において「探究的で協同的な学習指導の工夫（御所小学校）」「主体的な学びを引き出す授業づくりの工夫（御所中学校）」を主題とした２年間の研究の成果を報告することにより県内に広く普及した。また、大阪大学教授の志水宏吉氏から「すべての子どもの学力を育む～効果のある学校とは～」を演題として、教育的に不利な環境のもとにある子どもたちの基礎学力の水準を下支えする手立てについて講演いただいた。

### ⑵ 学力向上支援サイト「まなび一奈良」の活用

これまでの学力向上事業の知見を生かした授業モデル動画や、学力フォーラムでの配布資料、また上記リーフレット等、学力向上に関する情報を掲載し、指導主事要請訪問等様々な場で紹介又は視聴し、教員の授業力向上等の手立てとした。

## ○　今後の課題

### ⑴ カリキュラム・マネジメントの充実

各学校においては、学校・家庭・地域が「目指す子ども像」を共有し、その実現に向けた新しい教育課程を編成しているところであり、子どもの実態を把握するために、全国学力･学習状況調査等の調査結果を活用している。調査結果から見いだされた課題を踏まえ、身に付けさせるべき資質・能力を三つの柱に沿って設定している。その際、資質・能力を効果的に育成するためには、学年間のみならず義務教育９年間の縦のつながりと、教科等間の横のつながりを踏まえたカリキュラム・マネジメントの充実が求められる。

さらに、実施した取組を定量的に評価、検証して改善を図るＰＤＣＡサイクルの充実を図る必要がある。カリキュラム・マネジメント及びＰＤＣＡサイクルの充実には、学校のみならず家庭や地域全体で課題を共有し、相互に連携を図りながら取り組むことが重要である。このような研究体制を構築する意義と方法についての取組が引き続き求められる。

### ⑵ 教員の指導力の向上

県教育委員会では、国語科で育成を目指す資質・能力が児童生徒に身に付くような指導の在り方を県国語教育研究会や大学等と連携して開発し、指導力のある教員による公開授業を通して、参加した教員に授業改善のポイントを伝える取組を進めている。同様の取組を、他の教科においても展開し、県内の教員の指導力向上を目指していくことが求められる。また、今年度は、学力向上フォーラムの開催を見送った。次年度は、教員の指導力の向上につなげるためにも、各校の取組のうち効果のあった取組を出し合うなどインプットだけでなくアウトプットし合う研修として、本フォーラムを開催したいと考えている。

### ⑶ 読書活動の一層の推進

全国学力・学習状況調査の質問紙調査では、学校の授業時間以外における一日当たりの読書時間に関する質問に対し、小学校では約２割の児童が、中学校では約４割の生徒が読書を「全くしない」と回答している。今後、児童生徒の読書習慣を改善するために、児童生徒を取り巻く読書環境の充実や読書活動の推進が求められる。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 推進地区名 | 五條市 |
|---|---|

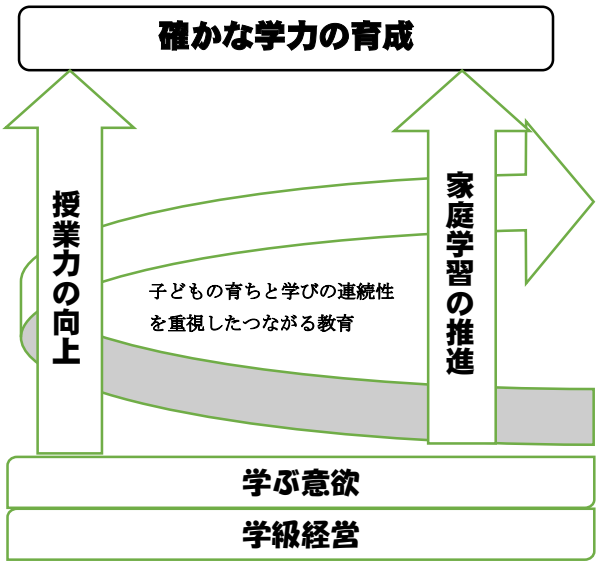
## ○　推進地区として実施した取組内容

### １．研究課題

本市では、学力・学習状況調査の過去数年の結果分析によれば、国語と算数・数学の両方に、言語能力における読解力の弱さが見られた。また、家庭での学習習慣については家庭で学習を「する子」「しない子」の二極化の傾向が見られる。よって、確かな学力の育成のため、子どもの育ちと学びの連続性を重視した「つながる教育」を推進することにより、学力向上を目指している。

#### (1) 授業力の向上

日々の授業においては、確かな読解力で学習課題を把握し、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。そのため、言語活動の充実を図ると共に、問題解決能力を育成し、市が作成した授業プランシートの活用等を行い、「めあて」「ふりかえり」を子どもに浸透する授業づくりを行う。また、小中一貫教育の具体的な実践として、小中合同の授業研究と研究協議を全ての中学校区で実施することで授業力の向上を目指す。そのため、小中共通の取組の視点を決めた公開授業と研究協議を行い、その内容を学力向上推進委員会を通して市内の各学校に発信する。




#### (2) 家庭学習の推進

校区や学校でターゲットを絞った取組を行う必要がある。特に、家庭学習を全くしない子を０％に近づけるよう、二極化における低位層の児童生徒に対して手立てを考え実行する。家庭学習は、宿題と自主学習をどのように位置付けるかを吟味し、発達段階に応じた働きかけを行う。

これらを二本柱として今年度の研究課題とする。そして柱の基盤には、学級経営が整っていることと児童生徒の学ぶ意欲が支えとなることが確かな学力の育成には重要である。

## ２．研究課題への取組状況

過去数年の取組を定着させるために、取組の焦点化と全ての教員へ取組の共有を目指した。

### (1) 市学力向上推進委員会の開催

今年度、９年間の学びのつながりを意識して、委員長に有識者を置き、構成メンバーを学力向上推進モデル校以外に、中学校区代表管理職、及び代表研究主任を含めて再編成することで、推進委員会で議論、提案、取組報告されたことを各中学校区内で周知、徹底されるよう進めた。研究課題を学力向上実践研究とリンクさせるとともに、研究授業・協議を各中学校区で必ず行い、取組の成果や今後の課題について委員会内で共有を図った。また、正確に読める子どもを育てるために各教科でできることを考え実践すること、校区の実情に合わせた家庭学習の取組を行う中で、家庭学習を全くしない児童生徒を０％に近づけるといった、これら 3 項目について取組を進めた。

### (2) 研究推進委員会の開催

学力向上推進委員会で話し合った内容をより具体的に進めていくために、各校の研究主任による研究推進委員会を開催し、取組内容の共有や中学校区別に行った具体的な内容についての協議を行った。

### (3) 学力向上ヒアリングの実施

全国学力・学習状況調査の結果を基に各校及び校区の取組について、管理職と研究主任による取組報告・結果分析・後半に向けての取組等について、ヒアリングを行った。ヒアリングにあたって自校及び自校区の取組を点検することで、学力向上について高い関心をもって、取組を進めるねらいがある。

### (4) 研究授業及び研究協議の実施

年間数回実施する研究授業及び研究協議には、市の指導主事・参与等も参加し、指導助言を行う機会をとらえて、教科を超えて研修する内容や市の現状及び推進委員会で協議されている内容等について周知を図り、助言を行った。

### (5) 学力向上に関する研究内容等の交流

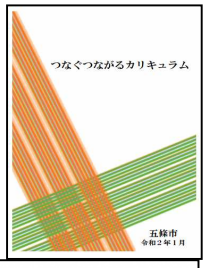
〇学力実践研究大会や県の学力向上フォーラムでの発表

実践事業モデル校による学力実践研究大会や、県の学力向上フォーラムにて取組内容の発表をし、市内、県内に研究成果を広げた。

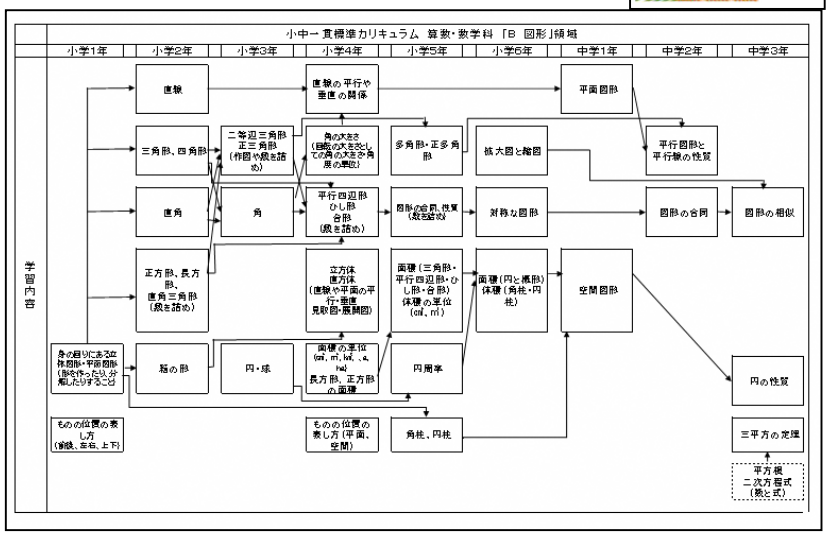
〇先進地視察の実施

今年度、学力向上先進地視察として石川県金沢市を訪れ、指導主事と現場の教員が、学力向上に関する共通の視点をもって視察を行った。その内容は、推進委員会で伝えるとともに、先進地視察報告書を作成し、冊子にして各校へ配布する予定である。

○９年間のカリキュラム「つなぐ　つながる　カリキュラム」の改訂

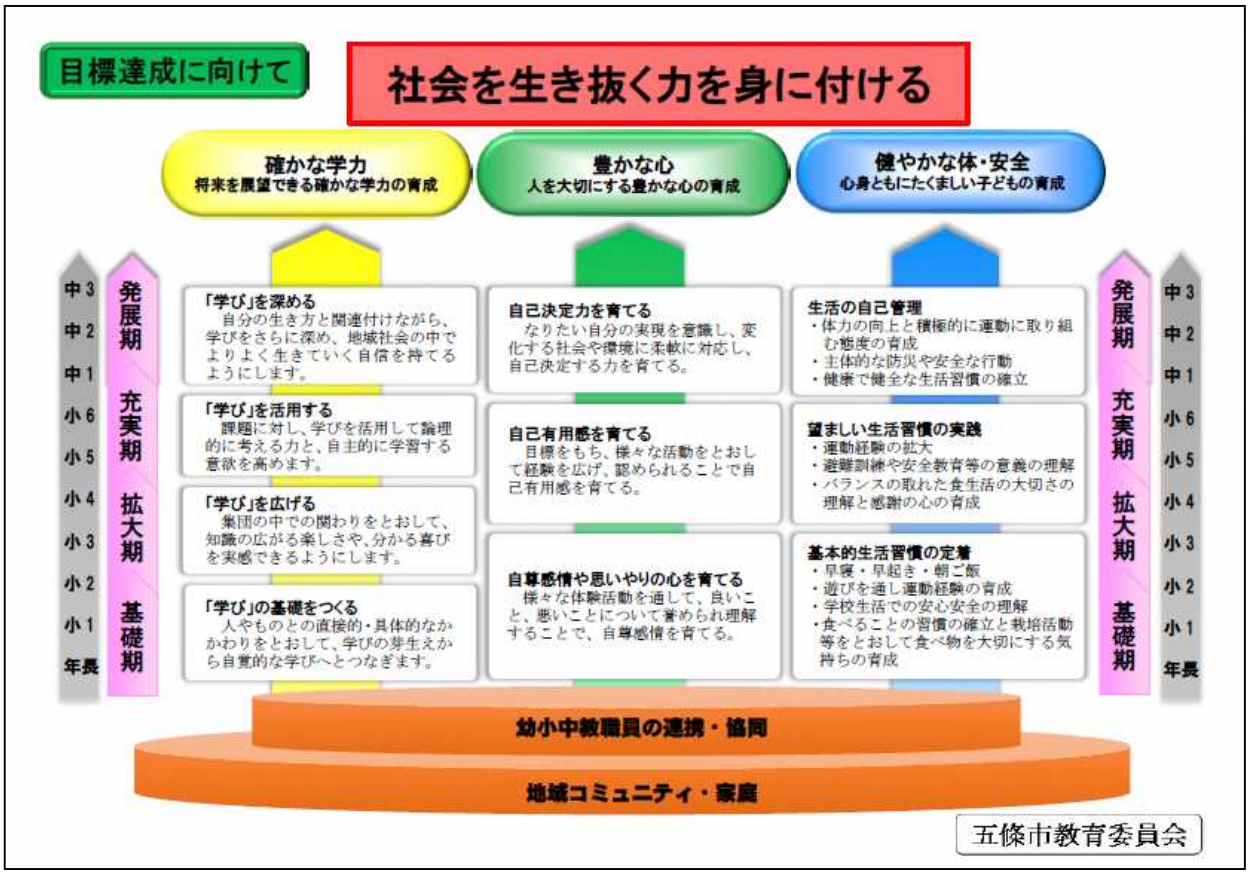



来年度より小学校から順次新学習指導要領が実施されるにあたり、以前作成していた９年間の各教科の学びのつながりを示した「つなぐ　つながる　カリキュラム」を見直し、各教科等研究会で検討を重ね、冊子にして各教員に配布した。



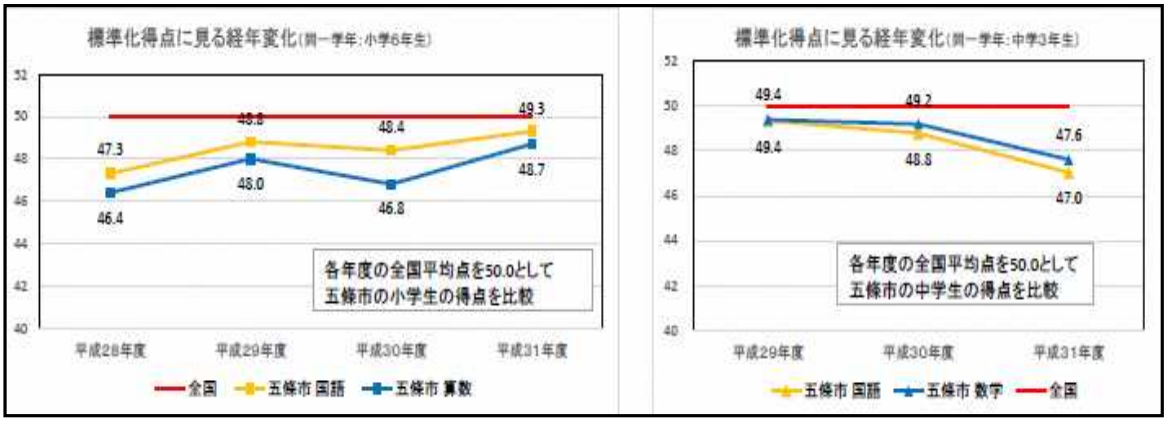

○教員啓発シートの配布

年度末には次年度に向けて、市の学校教育の方向性を示した「五條市の学校教育」を全教職員に配布している。今年度は、学力・人権・体力について全て９年間のつながりを示すものとし、小中の一貫性を提示した。




教員啓発シート（五條市の学校教育の裏面）

## ３．実践研究の成果の把握・検証




（全国学力・学習状況調査の標準化得点に見る経年変化）

| 全国学力・学習状況調査質問紙項目 | 小学校 | | | | 中学校 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | H30 | | H31 | | H30 | | H31 | |
| | 市 | 全国 | 市 | 全国 | 市 | 全国 | 市 | 全国 |
| 国語の勉強は好きですか | 66.3 | | 65.7 | 64.2 | 58.0 | | 52.1 | 61.7 |
| 算数(数学)の勉強は好きですか | 64.1 | 64.0 | 66.2 | 68.6 | 46.0 | 53.9 | 48.9 | 57.9 |
| 算数（数学）の勉強は大切ですか。 | 94.3 | 92.1 | 92.2 | 93.7 | 87.7 | 83.6 | 83.9 | 84.2 |
| 算数（数学）の勉強はよく分かる | 82.0 | 83.4 | 80.3 | 83.5 | 74.4 | 71.0 | 79.6 | 73.9 |
| 算数（数学）の勉強は役に立つ | 91.3 | 90.3 | 94.8 | 92.5 | 79.6 | 72.9 | 80.6 | 76.2 |
| 一日の学習時間（1 時間以上） | 56.4 | 66.2 | 67.1 | 66.1 | 64.7 | 70.6 | 67.8 | 69.8 |
| 一日の学習時間（全くしない） | 6.2 | 2.5 | 5.2 | 2.3 | 8.5 | 4.9 | 9.1 | 4.4 |
| 一日の学習時間（全くしない）１２月独自アンケート | | | 1.0 | | | | 6.0 | |

（学習意欲に関する項目で肯定的に回答する児童生徒の割合）

| 市独自アンケート項目 | 小学校 | | 中学校 | |
|---|---|---|---|---|
| （児童・生徒） | ６月 | １２月 | ６月 | １２月 |
| 授業のはじめに、めあてやねらいが示されている。 | 92.0 | 93.0 | 71.0 | 78.0 |
| 授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている。 | 71.0 | 80.0 | 47.0 | 52.0 |
| （教　員） | 小学校 | | 中学校 | |
| 授業の中で目標（めあて・ねらい）を示す活動を計画的に取り入れた。 | 100.0 | 98.4 | 92.0 | 93.0 |
| 学習の最後に学んだことを振り返る活動を計画的にした。 | 87.0 | 91.2 | 85.0 | 85.0 |
| 各教科で教科書の文章が読み取れる力を子どもたちにつけるため意識して授業をした。 | 86.6 | 91.0 | 65.1 | 77.3 |
| 校種間（小⇔中）を超えた授業参観をした。 | 60.4 | 76.7 | 61.9 | 81.5 |
| 家庭学習について、中学校区でつながった与え方をした。 | 44.0 | 66.7 | 34.4 | 54.5 |
| 学校全体の学力状況や課題を全職員の間で共有し、学校として組織的に取組を行った。 | 88.5 | 97.0 | 76.2 | 91.3 |

（市独自で 6 月と 12 月に実施しているアンケート結果の一部）

本ページのグラフや表に示すとおり、今年度の全国学力・学習状況調査においては、小学校は平成 28 年度から見ると変動はあるものの、全体として全国平均に近づいている。一方中学校は、全国平均より下がっているが、同一集団で見た場合、数学は 1.2 ポイント上がっている。

また、教員が課題に対して意識し、教員や子どもの変容を捉えるために行っている市独自アンケートを 6 月と 12 月に実施しており、結果の一部も前ページに示しているいる。以下に成果の把握・検証を示す。

### (1) 授業力の向上

学習意欲に関するアンケート項目では、小学校は国語が全国よりも高い。中学校は数学に対する意欲が高い。また、教員アンケートでは、「授業の中で目標（めあて・ねらい）を示す活動や学習の最後に学んだことを振り返る活動を計画的にした。」や、「各教科で教科書の文章が読み取れる力を子どもたちに付けるため意識して授業をした。」「校種間（小⇔中）を超えた授業参観をした。」など、授業力を高めることに関する意識が向上している。しかし、児童生徒が授業の中で目標（めあて・ねらい）や振り返りを行っているという意識は、教師が思っているほど高くはない。これは、中学校においては、小学校のように黒板に授業のめあてや振り返りのマグネットシートを貼ると言った進め方ではない場合が多く、小中共に児童生徒が学習の流れを意識せずにただなんとなく授業を受けている、つまり主体性をもって学習できていないためではないかと考えられる。

### (2) 家庭学習の推進

教員のアンケートでは、「学校全体の学力状況や課題を全職員の間で共有し学校として組織的に取組を行っていた」という設問において飛躍的にポイントが上がっている。しかし、「家庭学習について、中学校区でつながった与え方をしたか。」という点については上がってきてはいるがまだ高くない。自分で学習する習慣を中学生で付けていくためには、小学校からの家庭学習への取組が途切れずにつながることが必要と思われる。家庭学習ができない状況にある児童生徒の家庭的な環境を理解しつつ、保護者にも働きかけるとともに、児童生徒が主体的に学習できる部分を育てていくことが今後の課題であると考える。

## ４．今後の課題

### (1) 小中学校でつながって子どもたちを育てていくための取組の継続

小中学校の教員が互いに授業を参観し合う。また、言語活動や子どもの学習活動などに視点をあてた共有できるテーマを設定し、共通のテーマ設定のもとで話し合い、子どもへの指導力・授業力の向上を図るなど、小中合同の授業研究と研究協議を全ての中学校区で実施する。

### (2) 読解力の向上のため及び授業力向上のための取組

① 児童生徒に確かな力を付けるために言語活動の充実を図り、主体的・対話的で深い学びにつながる授業を展開するなど、確かな読解力の基礎の上に立った、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を目指す。

② ９年間で育てたい目指す子ども像は「自分で学ぶべきことを決め、自主的に学ぶ力の育

成」とするなど、子どもが主体的に学習する力を育てる（授業以外でも主体的に学習する力を育てる）ための取組を推進する。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 推進地区名 | 御所市 |
|---|---|

## ○　推進地区として実施した取組内容

### １．研究課題

「御所市　夢・誇り・学びプランに基づいて、学習指導の改善を図り、児童生徒の学習意欲を高め、わかる授業、考えを深める授業の創造」

「御所市　夢・誇り・学びプラン」に基づき、「学ぶ力」「切り拓く力」「関わる力」「自律する力」の児童生徒に育みたい四つの力の総合的な向上を図る。また、学力の全体的な向上と低学力層の減少を図るために、市教委が実施する学力向上に関する総合的な事業を通して、本市及び各校の学力向上に係る課題を明らかにし、その課題の共有を図り、学習指導の改善を行うことにより、児童生徒の学習意欲を高め、分かる授業、考えを深める授業を創造するための実践研究を推進し、その成果を図ることにより本市児童生徒の学力向上、自尊感情等の課題解決の醸成に資する取組を展開する。

### ２．研究課題への取組状況

#### (1)　「夢・誇り・学びプラン推進校」の設置

御所市内全ての小・中学校を夢・誇り・学びプランの推進校とし、学力向上に係る取組を推進すると共に、本研究の円滑な実施のために必要な指導・助言を行った。また、各学校の研究授業や研修に参加し、指導・助言を行った。

#### (2)　推進担当者会議、学力向上フォーラム

御所市学力向上担当者会議で、全国学力・学習状況調査の結果分析を行い、各校の取組を報告し、情報を共有する中で、学力向上フォーラムで、その取組を発表してもらうこととした。

#### (3)　中学生キャリア教育推進事業

今年度、ＰＴＡと共催し、対象を市内の全中学２年生とし、約 30 人の事業者に来てもらい、ブース形式で、中学生が話を聞き、身近に質問できるように変更した。

#### (4)　授業力サポーター事業

市教育委員会が、本市教員より４名の授業力サポーター（外国語、道徳、数学、プログラミング教育）を委嘱し、市内教員の希望や当該サポーターの希望に応じて、授業提供を行ったり、指導助言を行ったりすることにより、市内教員の授業力の向上を図り、教員間のネット

ワークを構築するとともに、児童生徒の学力向上に資することを目的にその活用を図った。

### (5) 基礎学力推進事業

「日本漢字能力検定」について、市教育委員会や各校が準会場を準備し、団体受検を行う。また、「役の小角杯（本市主催の計算力大会）」を北部（奈良学園登美ヶ丘高校）、南部（青翔高校）で実施した。これらの受検者に対して、受検料の補助を行った。

### (6) 家庭学習の定着促進事業

規範意識の向上や、家庭生活の基本的な習慣の定着を図るため、「御所市家庭教育の手引き」をパンフレットで示し、小学１年生の全保護者に配布した。

### (7) ＩＣＴ授業の推進事業

デジタル教科書やタブレット、ｅ－ライブラリー等のＩＣＴ機器を活用した授業を推進するため、先進地視察として、ｅ－ライブラリーを活用した放課後学習や家庭学習の在り方について研修した。

### (8) 宝物ファイル（ＴＰＦ）推進事業

児童生徒の自尊感情の醸成のため、宝物ファイルによるポートフォリオを活用した取組を推進した。

### (9) 放課後子ども教室・地域未来塾事業

学校・地域パートナーシップ事業を活用し、市内小・中学校において、大学生や地域の方と協働して学習支援を行った。

### (10) 学校司書派遣事業

児童生徒の読書時間が少ないという課題から、学校司書の配置を進め、今年度市内 10 小・中学校に配置をし、残りの１校も次年度配置予定となっている。

### (11) スクールカウンセラー派遣事業・スクールソーシャルワーカー派遣事業・適応指導教室開設事業・特別支援教育支援員派遣事業・特別支援教育コーディネーター連絡会開催事業

様々な課題をもつ児童生徒や家庭に対して、学校や市教育委員会がそれぞれの機関と連携し、助言・支援できる体制を整えている。

### (12) その他の取組

上記以外の取組として、次年度、小学校で外国語科が導入されることから、外国語科に関する研修を行い、スキルアップと実践をテーマに開催した。また、プログラミング教育については、本市教育振興会のメディア部会と連携し、プログラミングに関する研修を開催した。

## ３．実践研究の成果の把握・検証

### (1) 「夢・誇り・学びプラン推進校」の設置

各学校の研究授業や研修会に参加し、指導・助言を行った。また、今後も引き続き参加し、指導・助言を行っていく予定である。

### (2) 推進担当者会議、学力向上フォーラム

推進担当者会議では、各校の取組を交流し、その中で独自の取組で顕著なものを学力向上フォーラムで発表してもらうこととした。学力向上フォーラムで発表した学校の取組の中で出た「目標振り返りシートによる自己分析等のデータ」を共有することとした。また、講演

では、「学級づくり=人権教育＝授業づくり」という理念にたった内容を教育サポーターの仲島正教さんに説明していただき、参加者のほぼ全員が満足感をもつことができた。

また、先進地視察では、「ｅ－ライブラリー」を放課後学習や家庭学習に活用している岸和田市の学校を視察した。

### (3) 中学生キャリア教育推進事業

市内４中学校の中学２年生全員を対象に２月４日（火）に実施した。直接、職業人から話を聞くことによって、職業が身近な物に感じられ、そこに至るプロセスも聞けることから、今後の進路決定に大変役立つものになると考えている。

### (4) 授業力サポーター事業

様々な機会で、活用を呼びかけ、また各校も活用を検討したが、事業内容や授業力サポーターの予定が合わないことが多く、プログラミング教育の研修で一回実施した。

### (5) 基礎学力推進事業

「日本漢字能力検定」では、146 名（11 月 12 日現在）が団体受検し、「役の小角杯（本市主催の計算力大会）」では、全 119 名（市内 12 名）が受検した。

### (6) 家庭学習の定着促進事業

全国学力・学習状況調査の「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間も含む）」の項目で、県平均との差が 11.1 ポイント縮まった。

また、１月末には、保護者対象に活用に関するアンケートを実施し、２月中に集計した。

### (7) ＩＣＴ授業の推進事業

市内の少人数の小学校を中心に、スカイプやインタラクティブプロジェクターを活用した双方向の遠隔合同授業を実施している。また、デジタル教科書や書画カメラを活用して、大型提示装置に提示しての授業の展開がなされている。全国学力・学習状況調査の「５年生までに受けた授業で、コンピュータなどのＩＣＴをどの程度使用しましたか」の項目で、市全体を見ると、県平均より 8.4 ポイント高かった。

### (8) 宝物ファイル（ＴＰＦ）推進事業

活用している４小学校において、全国学力・学習状況調査の「自分には、よいところがあると思いますか」の質問で、１校で「当てはまる」の割合が、県平均より 20 ポイント近く高かった。また、もう１校では、「当てはまる、どちらかというと当てはまる」の合計が、県平均より 12 ポイント近く高かった。

### (9) 放課後子ども教室・地域未来塾事業

放課後子ども教室は３小学校、地域未来塾は１中学校で実施している。その結果、昨年に比べて、全国学力・学習状況調査の結果を県平均と比較すると、国語で２校が 14 ポイントと 4.5 ポイント縮まった。算数も２校で 17 ポイントと 2.6 ポイント縮まった。また、中学校でも、国語で 7.4 ポイント、数学で７ポイント県平均と比べて縮まった。

### (10) 学校司書派遣事業

学校司書の配置により、各校の図書館の蔵書整備及び館内環境の充実が図られた。また、学校司書による読み聞かせや読書活動の推進の取組等、読書に親しむ取組が数多くなされている。次年度は、市内全校に学校司書を配置する予定である。

### (11) スクールカウンセラー派遣事業・スクールソーシャルワーカー派遣事業・適応指導教室開設事業・特別支援教育支援員派遣事業・特別支援教育コーディネーター連絡会開催事業

様々な課題をもつ児童生徒や家庭に対して、学校や市教育委員会がそれぞれの機関と連携し、助言・支援を行った。また、通級指導教室が設置されている学校では、全児童の個別の教育支援計画を作成し、個々の状況に応じた対応を行うことにより、全国学力・学習状況調査の結果を県平均と比較すると、国語は 4.5 ポイント、算数は 17 ポイントの伸びが見られた。

### (12) その他の取組

上記以外の取組として、外国語科に関する研修を２度行い、スキルアップと実践をテーマに開催した。また、プログラミング教育については、教育振興会のメディア部会と連携し、プログラミングに関する研修を開催した。

全国学力・学習状況調査をもとに、児童生徒に育みたい四つの力に関する推移を見ると、小・中学校ともに四つの力は伸びてきている。

特に、小学校では、「学ぶ力」の伸びが顕著である。これは、「算数の勉強は好きですか」の項目が、16.5 ポイントの伸びを示したことによる影響が大きいと思われる。今年度、市内の小学校では、授業研究に算数科を指定している学校が多く、その成果が子どもたちの算数好きの増加につながっていると考えられる。また、この項目では、市内７校のうち、５つの小学校で県平均を上回っている。

中学校では、「関わる力」が伸びていることが分かる。これは「今住んでいる地域の行事に参加していますか」の項目が 13.9 ポイントの伸びを示したことによる影響が大きいと思われる。今年度、コミュニティスクールとしてスタートした中学校があり、より地域との協働が進んでいることが分かる。

全国学力・学習状況調査において、県の平均正答率を１としたときの本市の平均正答率を換算した数値では、県平均を下回っているが、小学校では国語、算数いずれの教科においても 0.94 以上となり、県の水準に達しつつある。中学校では 0.86 以上となり、県の水準に近づきつつある。

今年度から、Ａ・Ｂ問題の区別はなくなっているが、「知識」に関する問題と「活用」に関する問題を集計したところ、特に、「活用」に関する問題での伸びが顕著であった。

「知識」と「活用」の区別がなくなることにより、無解答率の増加なども懸念されたが、小学校国語では、県全体より５ポイント低くなっている。しかし、小学校算数では、2.3 ポイント高く、中学校国語でも、1.2 ポイント高くなっている。中学校数学では、5.0 ポイント高くなっている。

無解答率について、問題形式別で集計すると、以下のような結果であった。

② 小学校算数では、選択式の５問全てで県平均を上回っていたが、短答式、記述式の問題では９問中６問で県平均より低い結果となっている。各校の取組の中で、「主体的・対話的で深い学び」の授業展開をしている結果が、この短答式、記述式の問題に対しても、粘り強く取り組む姿勢に現れたと考えている。

③　中学校国語では、選択式の問題では６問全てで県平均より低く、うち、５問で無回答率は０％であった。すなわち、全員が、何かしらの解答をしていて、解答をあきらめていないことがうかがえる。しかし、短答式、記述式では４問中３問で県平均を上回っていた。

④　中学校数学でも、16 問中 13 問で県平均を上回っていたが、選択式の問題では、５問中３問が県平均より低い結果となり、あきらめず解答する姿が見られる。

全国学力・学習状況調査において、正答率が 40%以下である児童生徒の割合について、県全体の数値を１として、本市の値は、すべての教科で、県平均より割合が高い。しかし、「知識」「活用」別に集計すると、小学校では算数の「活用」に関する問題を除く全ての問題において、県平均に近づいてきている。また、中学校でも数学の「活用」に関する問題を除いて、県平均に近づいてきており、低学力の児童生徒に対する個別の取組や放課後学習等の効果が表れていると考えられる。

## ４．今後の課題

### (1)　「夢・誇り・学びプラン推進校」の設置

今年度、指導主事が様々な機会（就学指導や定期の学校訪問等）で、学校の様子を伺うことはできたが、指導・助言を行う機会が、大変少なかった。各校で行われる授業研究では、県教育委員会、教育研究所、教科等研究会等から講師として来ていただいただいていることが多いのが現状であるが、次年度は今年度同様、これらの講師先生と共に各校の授業研究に積極的に参加していき、指導助言を行っていく予定である。

### (2)　推進担当者会議、学力向上フォーラム

学力向上においての取組が、これまで市内各校が積み上げてきたことを土台として、活用方法を発信していくと共に、教員の活用能力の向上に関する研修会を次年度も実施していく。さらに、ＩＣＴの活用についても、ＰＣが１人１台の時代に向けて、教員の資質向上につながる研修会への参加を推進していく。また、現在、大型提示装置の活用が定着していることから、活用の方法をさらに向上させ、児童生徒の考えを全体化できる授業の体系化を目指していく。

### (3)　中学生キャリア教育推進事業

キャリア教育については、今年度ＰＴＡとタイアップした取組を行うが、家庭や地域と連携した取組を発展・充実させていく。次年度以降は、今年度の取組を基に組織化を進め、さらに小学校にも広げていきたいと考えている。

### (4)　授業力サポーター事業

授業力サポーター事業については、学校の希望や当該サポーターの希望に応じて、授業提供を行ったり、指導助言を行ったりすることにより、市内教員の授業力の向上を図り、教員間のネットワークを構築するとともに、児童生徒の学力向上に資することを目的として行ってきた。目的や内容については、市内教員にも浸透してきたが、実際に活用の場面となると、活用したい学校と当該サポーターとのスケジュールが合わないことが多く、実現される取組が少ないことから、今年度で終了していく予定である。

### （５）基礎学力推進事業

漢字検定については、児童生徒の漢字力及び学習意欲の向上を目的に実施している。市主催及び各校主催で実施された漢字検定について、受検した児童生徒に対して、一律の補助を行っている。また、資格を取得することにより、将来のキャリア選択の幅を広げるこ

とにつながる。これらの取組においては、広く教員に浸透していることから、児童生徒への意識付け、動機付けにつながり、毎年多くの受検者が漢字検定に挑戦し、資格を取得していることから引き続き行っていく予定である。

**(6) 家庭学習の定着促進事業**

学力の定着について、家庭学習の重要性を広く周知するために行っている。全国学力・学習状況調査の結果からも、家庭学習の重要性について理解が進んでいることが分かることから、アンケート結果を分析し、更なる推進を行っていきたい。

**(7) ＩＣＴ授業の推進事業**

本市では、100 名以下の小学校が７校中４校あり、今後の児童数の減少も含め、少人数校の学習の機会の確保のため、インタラクティブプロジェクターを導入し、遠隔合同授業を推進していく予定である。スカイプとインタラクティブプロジェクターを同時活用した遠隔合同授業では、お互いの様子が音声と映像で見られるとともに、考えをまとめたホワイトボードも共有することができ、固定された児童間の意見交流が多様化され、様々な考えに触れることができることから、今後少人数校における授業の一形態として、活用を推進していく。

**(8) 宝物ファイル（ＴＰＦ）推進事業**

活用している学校においては、自尊感情の醸成に効果が見られる。しかし、その活用や効果について、各校の教員に十分周知されていないことから、活用していない学校や活用しても効果がうまく現れない学校もあり、今後、研修会等も含め教員に対する周知が重要だと考える。

**(9) 放課後子ども教室・地域未来塾事業**

通塾率が低い本市の学校において、放課後子ども教室や地域未来塾を活用して、学習の機会の提供を行ってきた。その内容について、ＩＣＴ教材（ｅ－ライブラリー）の活用や児童生徒個々の分析を行い、効果的な学習の機会の提供を行えているので、引き続き事業を継続していく予定である。

**(10) 学校司書派遣事業**

昨年度、モデル的に学校司書の派遣を始めたが、その効果として、デジタル化の推進等がなされ、劇的に変化した学校図書館の様子や運営について、次第に各校に浸透し、活用する学校が増加した。その結果、次年度で、全校配置が完了することとなった。各校を訪問すると、図書館を一目見ただけで、学校司書が配置されているかどうかが分かるほど、その効果が表れている。今後は、子どもたちの委員会活動や学校司書による読み聞かせ活動等、教員と学校司書との連携を密にし、子どもたちが読書に興味をもち、家庭をも巻き込んだ読書活動が推進されるよう取組を進めていく。

**(11) スクールカウンセラー派遣事業・スクールソーシャルワーカー派遣事業・適応指導教室開設事業・特別支援教育支援員派遣事業・特別支援教育コーディネーター連絡会開催事業**

様々な課題をもつ児童生徒に対して、教員とそれぞれの担当者が連携することにより、適宜、対応している。個々の児童生徒に対して、教員と担当者が、放課後の時間等を利用して連携するとともに、最善の対応を見いだし、活用することができている。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

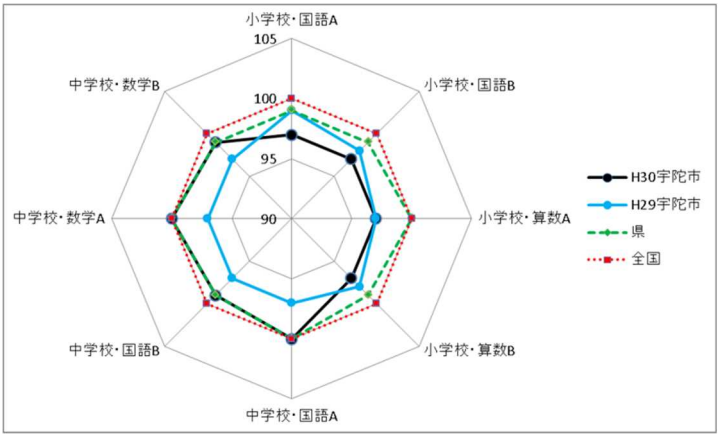
| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

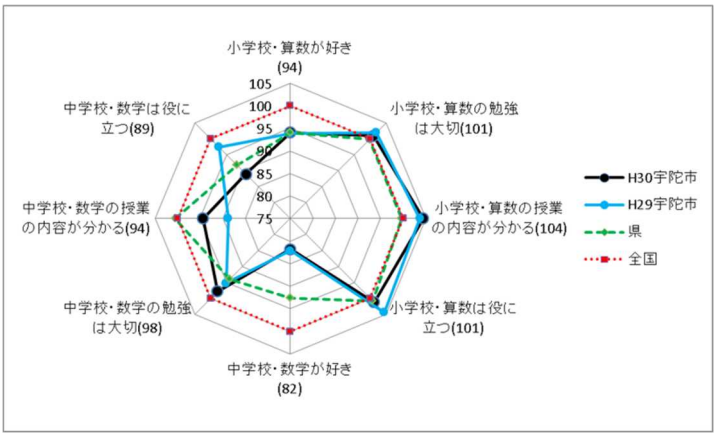
| 推進地区名 | 宇陀市 |
|---|---|

## ○　推進地区として実施した取組内容

### １．研究課題

全国学力・学習状況調査などの結果では、同一集団を年ごとに追うと、小学校段階では全国をやや下回るものの中学校段階において全国平均に迫ってきている。しかし過去数年の状況から、本市全体を通して例年以下のような共通の課題が認められる。




国語、算数・数学　学力調査等の考察から

①　基礎・基本の定着に課題がある。

②　目的や意図に応じて複数の「記述」「グラフ」「表」などから適切に情報を選択する力に課題がある。

③　②に付随して、根拠を明確にして自分の考えを表現することに課題がある。

④　条件作文等書く力に課題がある。

⑤　授業に関するアンケート結果から、中１ギャップがある。

児童生徒質問紙調査の考察から

①　算数・数学の愛好度が低い。

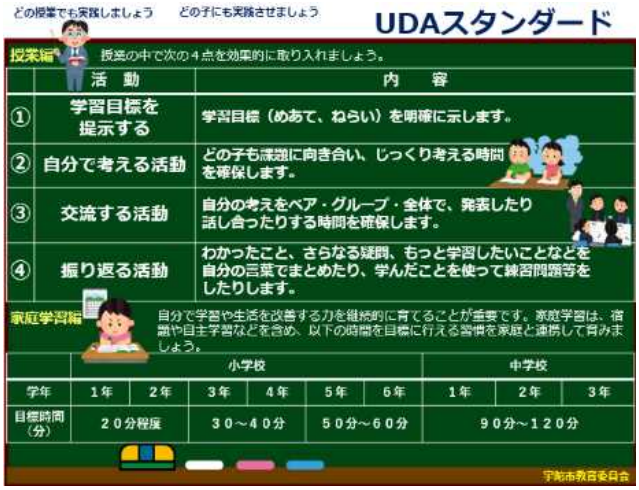
②　家庭学習で宿題はしているが、家庭学習時間が短く、計画的に取り組んでいる児童生徒の割合が低い。

③　「自分にはよいところがある」（自尊感情）が低い。

## ２．研究課題への取組状況

### (1) UDA スタンダード

本市として、学習指導上必ず実践するポイントを絞り、「UDA スタンダード」として整理し、その定着を目指して本年度で２年目となる。決定した UDA スタンダードをカラー両面印刷し、全職員に配布するとともに、市教委ホームページにも掲載し広報しつつ、周知、徹底を進めている。今年度の転入教員にも配布している。その定着に向けて、校長会、UDA スタンダード推進委員会等で周知を繰り返し、学校訪問等で実施状況を確認している。また、宇陀市生活行動・学習活動調査の項目でこれに関わる児童生徒の回答状況を把握し、分析している。



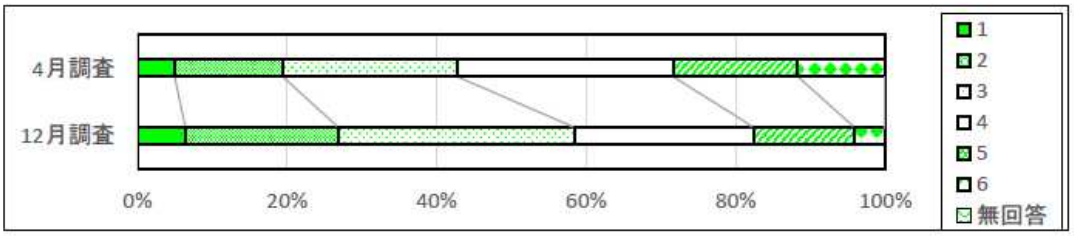
UDA スタンダードリーフレット

### (2) 宇陀市生活行動・学習活動調査の活用

宇陀市生活行動・学習活動調査（21 の調査項目、対象小４～中３、４月と 12 月に実施）の活用を図った。４月と 12 月の比較結果を各学校に返却し、学校改善のための資料としての活用を促している。

学校の授業時間以外に普段1日当たりどれくらいの時間勉強をしますか

| | 1<br>3時間以上 | 2<br>2時間以上<br>3時間未満 | 3<br>1時間以上<br>2時間未満 | 4<br>30分以上<br>1時間未満 | 5<br>30分未満 | 6<br>全くしない | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4月調査 | 5% | 14% | 23% | 29% | 17% | 12% | 0% |
| 12月調査 | 6% | 20% | 32% | 24% | 13% | 4% | 0% |




宇陀市生活行動・学習活動調査結果の一部

## (3) 学校訪問様式（意欲・態度に関する項目）の作成・配布

宇陀市生活行動・学習活動調査の 21 の調査項目から、学校が１項目を選び数値目標を設定し取り組むプラニングシートを作成し学校改善の一助とした。

意欲・態度に関する取組（宇陀市生活行動・学習活動調査項目から課題設定）

| 課題項目 | 「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」肯定的回答率前年度比＋5％ | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成30年末の結果 | | 令和元年4月当初の目標 | | 令和元年4月結果 | 4月結果から目標補正 | 令和元年12月の結果 |
| | | 4年 | 60% | 45% | 55% | |
| 4年 | 54% | 5年 | 59% | 70% | 75% | |
| 5年 | 63% | 6年 | 68% | 70% | 75% | |

**学校訪問様式　数値目標の設定の項目と記入例**

## (4) 宇陀市学校ステップアップ訪問による支援・助言

２学期以降に「宇陀市学校ステップアップ訪問」として管内の全小・中学校を訪問し、学校改善のための支援・助言を行った。主な支援・助言の内容として、①宇陀市生活行動・学習活動調査項目からの目標への取組状況、②学校改善の状況、③全国学力・学習状況調査の分析からの今後の取組、④「UDA スタンダード」の取組状況などが挙げられる。

## (5) UDA スタンダード推進委員会の実施

令和２年２月 10 日（月）に第２回目の UDA スタンダード推進委員会を実施した。ここでは管内全小・中学校の管理職と研究主任の参加のもと、各種学力調査の結果分析及び宇陀市生活行動学習活動調査の結果分析から得られる指導改善について説明を行った。また、本市の協力校３校からの実践発表を行った。さらに、中学校区別に分かれ、学力向上のために小・中学校が連携して何ができるのかについてグループ協議やグループ交流を行った。

## (6) 放課後学習支援事業の全小学校での実施

昨年度、週２回程度、補充学習の必要な児童に対して学習支援員による個別の指導を行うモデル事業を協力校３校で行い、概ね好評で一定の成果があった。学習内容が理解できず、登校をしぶりがちな児童が、明るく登校するようになったという報告も受けている。また、放課後残して指導する教員の働き方改革の一環にもなった。今年度は、それを管内全ての小学校６校に広げ実施した。特に、児童にとっては放課後残って学習するのを嫌がるというよりは、分かって帰ることができる喜びの方が大きいため、積極的に参加している。家庭環境により、家では宿題をするのことが難しい児童のセーフティネットの一つにもなっている。

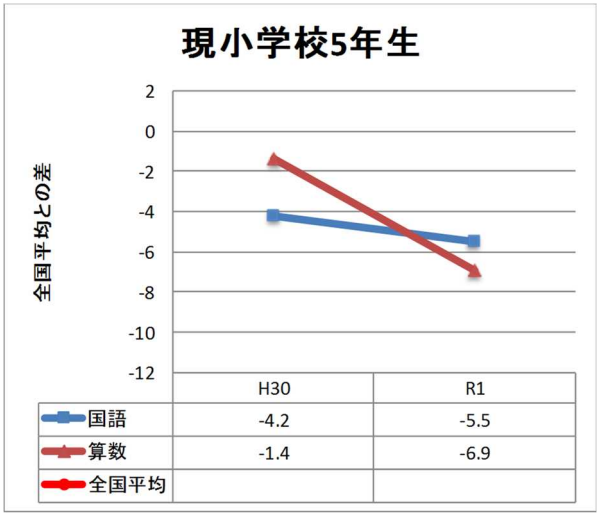
## (7) 宇陀市初任者フォローアップ研修の実施

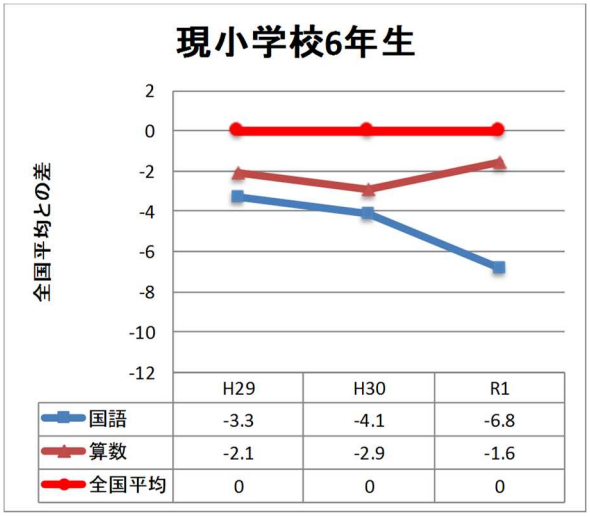
宇陀市初任者フォローアップ研修を実施した。初任から２・３年目の教諭に対して、この期間に１回指導主事が授業参観をして、面接、指導助言を行う研修である。学校ではこれを良い機会と捉え、しっかりと準備をし、高い意識で研修に臨む若手教員の姿があった。話合い活動を実際にどのように授業に取り入れればよいか等率直な質問が聞かれた。

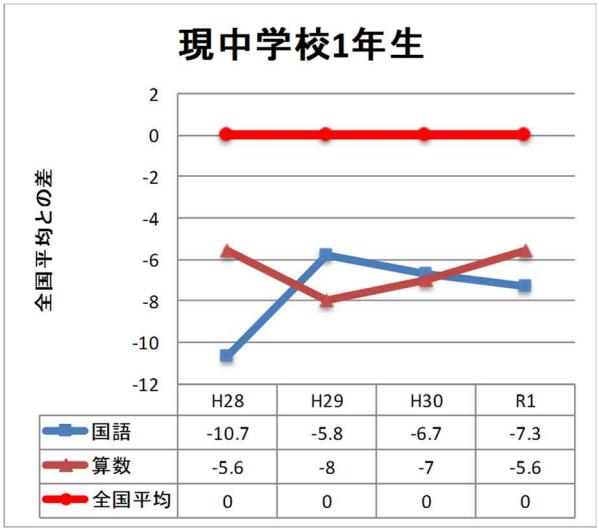
## ３．実践研究の成果の把握・検証

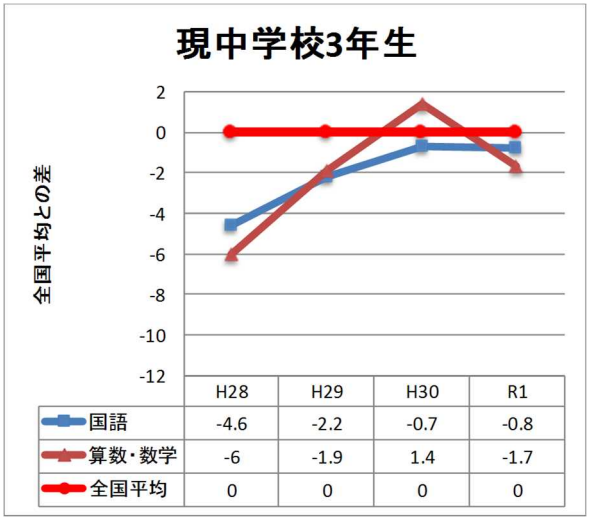
### (1) 全国学力・学習状況調査の結果（６年、中３）及び宇陀市学力調査（東京書籍標準学力調査）の結果より

・本年度、小学校４年生と中学校２年生の学力テストは実施していない。
・従来、小学校６年生の学力は、４月から上昇を始めていたが今年度の６年生４月時点では国語に関して上昇は認められない。
・小学校６年生から上昇を始めていた中学校３年生の学力は、全国平均並みを維持している。これまで、学力調査の結果は中学校１年生の４月段階から上昇を始める傾向がある。つまり、小学校６年生での取組が効果を示している。したがって、小学校では、小学校６年生以前の学力向上の取組を進めていく必要がある。



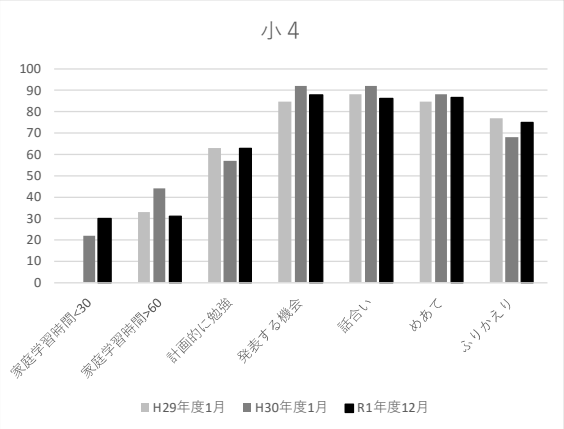



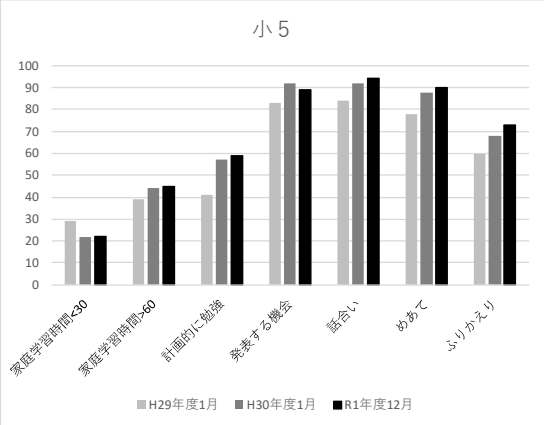



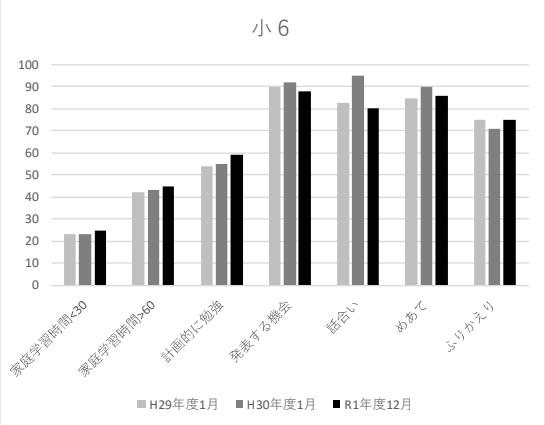



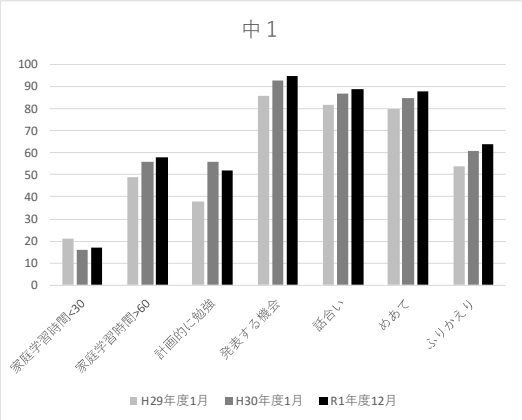
## (2) 宇陀市生活行動・学習活動調査　同一学年経年比較分析より

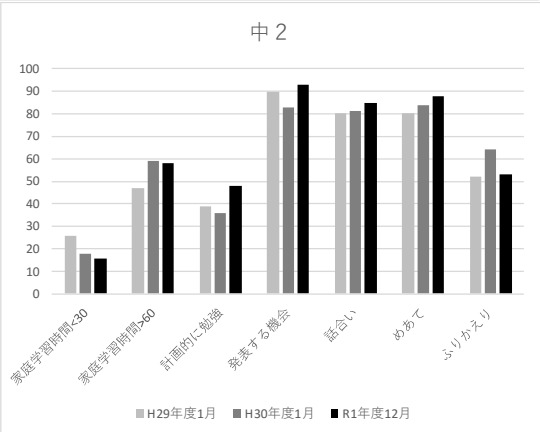
**一昨年度の４年→昨年度の４年→今年度の４年というように、同学年（別集団）を比較**

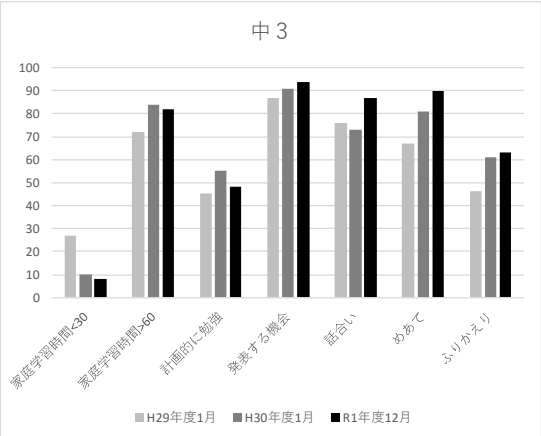



※「家庭学習＜30 分」家庭学習が 30 分より少ない　「家庭学習＞60 分」家庭学習が 60 分より多い

① 家庭学習

小学校では、「家庭学習＜30 分」が減少していない。「家庭学習＞60 分」が５年生、６年生段階では増加している。中学校では「家庭学習＜30 分」が減少し、「家庭学習＞60 分」が増加している。つまり、家庭での学習習慣は中学校でかなり改善されている。中学校に入った段階で、家での主体的な学習習慣が身に付いていないことを中学校の先生から聞くことは多いが、この結果はそういった声と一致する。今後は、小学校での家庭学習習慣の定着を、小中連携を図る中でより一層進めていく必要があると思われる。

② 授業に関する４項目

授業に関する４項目では、４年生、６年生では改善しているとは言えないが、それ以外の学年では、概ね改善傾向を示している。特に中学校における授業スタイルの改善が見られる。このことから、「UDA スタンダード」は徐々にではあるが浸透しつつあるのではないかと考える。しかし、「振り返り」については、低い割合であり、今後の課題と考えている。

## ４．今後の課題

本市の学力に関する課題は複数あるものの、ポイントを絞り、力を集中して一つ一つ取り組んでいかなければならない。現在は「UDA スタンダード」を中心とした「目標提示」「一人で考える」「交流する」「振り返り」という授業スタイルの徹底と家庭学習習慣の定着を目指して取り組んでいる。定量的指標から、授業スタイル、家庭学習習慣ともに一定の成果は出てきているので、この取組は引き続き継続していきたいと考える。

一方、「書く力」「情報を読む力」「小中ギャップ」など、依然課題はある。この課題に関しては、何よりも各学校の教育力の向上が必要と考える。今回、本市の協力校は、本市の課題のうち意欲・態度に関する項目を一つ定め、宇陀市生活行動・学習活動調査の項目からその定量的指標による目標達成を目指して、全職員が一丸となって取り組み結果を出している。協力校の取組は、児童生徒をほめ、励ましつつ、一年を通じてどの学年でも粘り強く取り組むことで身に付いた学習習慣であり、力であると考えている。今後、そのような取組を市内他の学校に広めるとともに、さらにそれが中学校区で連携して進められるように支援をしていきたい。

そして、各学校、中学校区の教育力が高まる仕組みづくりに力を入れていきたい。

（様式２）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【推進地区】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

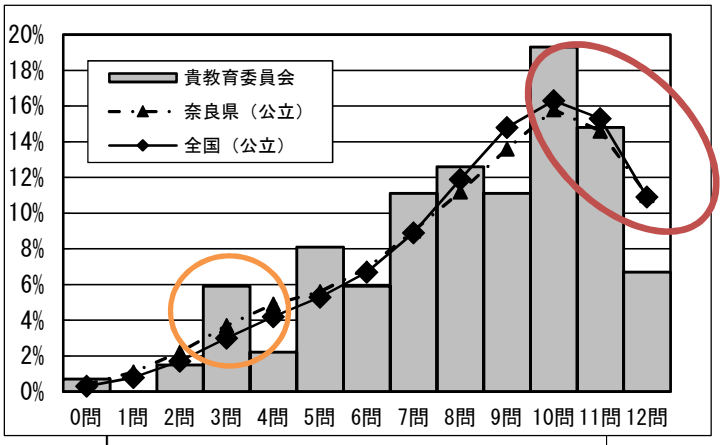
| 推進地区名 | 平群町 |
|---|---|

## ○　推進地区として実施した取組内容

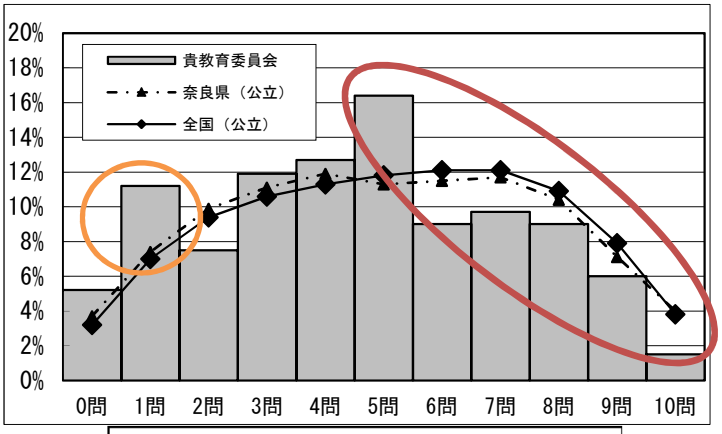
### １．研究課題

今回の研究指定を受け、以前から町で実施している全国学力・学習状況調査の結果報告会を見直した。毎年の児童生徒の学力や学習状況、生活状況の特徴だけにとらわれるのではなく、本町の児童生徒の経年的な特徴に注目して分析した。

その結果、学力においては次の２点を大きな特徴として捉えることができた。１点目は、成績が低位傾向にある児童の集団が、成績分布のカーブに一つの山を作っていることである。２点目は、成績が中位から高位に位置する児童の集団が低位に偏り、本来の正規分布や全国や県の分布カーブからの偏位が見られることである。




H30　小学校　国語Ａ




H30　小学校　算数Ａ

そこで、研究当初にこの２点について課題があることを示し、１年目は、成績低位の集団を形成する児童の状況について、過去にさかのぼって一人一人の検証を各学校において行い、報告会で共有するとともに、各学校での状況を踏まえた対策を考えるよう促した。

研究の２年目に当たる本年度は、昨年度の取組を振り返って精査し、①基礎・基本の定着を目指した授業の組立を中心に据え、②学習意欲・学習規律の向上を図るために授業を工夫し、③各学校間の取組の標準化と学校独自の取組内容の深化を行い、④主体的な学習を推進するため、家庭学習の推進を図る工夫を行った。

２点目の課題である成績の中位から高位に位置し、今一歩実力を発揮できていない児童生徒について、その課題や問題点を検証し、その対応の工夫を各研究校で行ってもらうなど、次の取組を行った。

| |
|---|
| 1　児童生徒の基礎学力の定着状況の確認<br>2　ボランティアや外部の人材による、基礎学力定着の補助<br>3　基礎学力の定着に課題のある児童について、その原因と対応策の検討<br>4　成績の中位程度の児童生徒の学力・学習意欲の向上 |

## ２．研究課題への取組状況

本町では平成 24 年度より順次、学校図書館に司書を配置し、児童生徒の読書に対する興味・関心を高め、学校図書館の機能を充実させてきた。司書の方々には図書館の管理や図書の整理、季節のディスプレイ、読み聞かせの実施や学習に必要な本の準備等様々な活動をお願いしている。

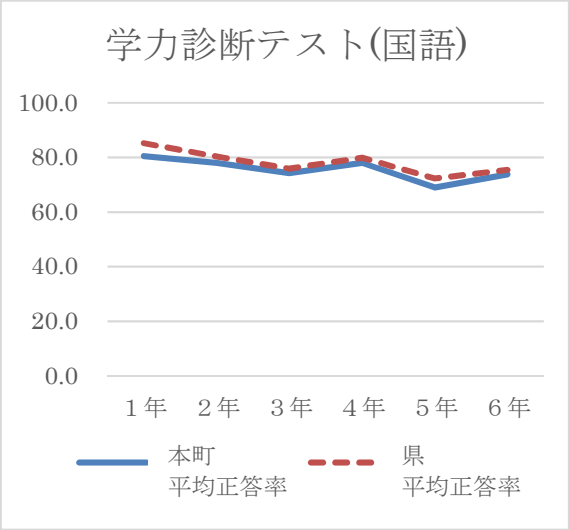
また、最近では学力調査等において課題とされている「読解力」の向上に向けて、読書率を向上させるための展示や、本の福袋などの様々な取組や、調べ学習等における本の選択や準備、調べる学習のアドバイザーとして協力など、学力向上に寄与する取組を推進している。

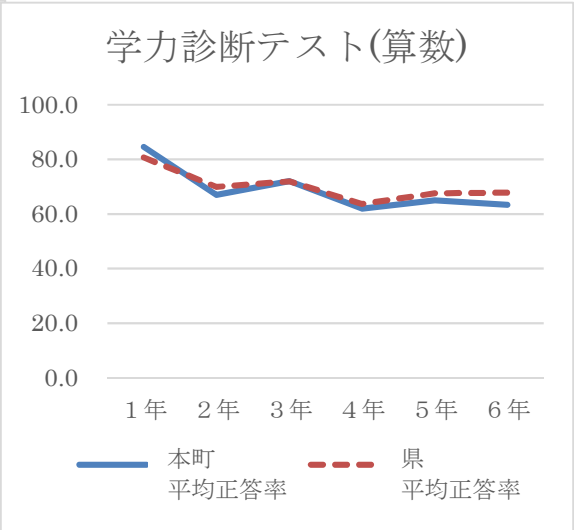
その上で、今回の「学力向上実践研究推進事業」の取組として以下を行った。

### (1) 基礎学力の定着状況の確認について

小学校を中心に各校で実施されている、奈良県教科等研究会の学力診断テストを活用して分析を行った。

その結果、下記のとおり県の各学年平均正答率と比べてみると、全般的に下回っていることが明らかになった。県の教科等研究会が作成する学力診断テストは主に基礎・基本を確認する問題で構成されていることから、全般的に基礎・基本の取得とその定着に課題があることが確認できた。また、低学年での基礎学力の定着状況が高学年まで、そのまま影響を与えている状況にあることが分かった。




しかし、この結果を見るまでもなく、各学校では基礎・基本の取得と定着に課題があると捉え、最大限の努力を続けているが、根本的な解決には至っていないことは明らかである。その原因として考えられることは、各学校での分析にもあるように、家庭状況や生活環境に課題を抱える児童生徒が多いことであり、昨年度の調査からも成績低位層の児童は、家庭や学校での学習規律が身に付いておらず、家庭学習もなかなか定着していない状況にあることが、学習状況調査などの結果などから明らかになっている。

### (2) ボランティアや外部の人材の活用について

昨年度の研究によって、各学校の教員はなかなか学習の基礎・基本が定着しない児童に、手厚く支援を行っていることや、それによって児童の授業に対する満足度や学習を大切だと思っている割合が高くなっていることが明らかになっている。したがって、引き続き今後もその取組に粘り強く対応していくことは大切なことである。しかし、それだけに頼っていても、問題の解決にはなかなか至らない。

そこで教育委員会として、学習ボランティアを募集し、基礎・基本の定着に教員だけではなく、外部の人材に協力を求めることで基礎・基本の定着を後押しできないかと考えた。教育委員会を事務局として、学習ボランティアを募集し、学校のニーズに応じて派遣を行った。今年度は平群小学校において、２年の算数の学習で反復練習を必要とされる九九の学習や、国語の学習など教員の手がまわらず十分な時間が確保できなかったり、手持ち無沙汰の児童が時間を無駄にして遊んでしまったりする時間を中心に協力していただいた。授業の中で、教員には基礎・基本の定着に課題のある児童への指導に集中し、自己解決できる児童には、ボランティアがやる気を引き出させ、教員の時間を有効に使ってもらうようにと考えている。

### (3) 基礎学力の定着に課題のある児童生徒について

昨年度に引き続き、基礎学力の定着に課題のある児童生徒について、その原因と対応について児童生徒個々に分析を進めている。

今年度の課題としては、情緒的な問題を抱え、学習規律が身に付いていない児童や、落ち着いて学習に取り組めない生徒に対する支援の必要性が高くなっていることである。特性をもっていることで、まわりと同じように行動できない、落ち着いて学習に取り組めない児童生徒に対応するため、昨年度から小学校に加えて中学校にも通級指導教室を設置し、ADHD、LD の生徒にも対応している。また、それ以外に通常学級に在籍する生徒のうち、特性をもっている生徒に対して、より望ましい学級経営や授業の工夫などができるよう、通級指導教室担当者や特別支援コーディネーターから、担任や教科担任などに対応や指導方法についてのアドバイスをお願いしている。

### (4) 成績の中位程度の児童生徒の学力・学習意欲の向上の方策について

今年度の課題である、中位層の児童生徒の学力と学習意欲の向上のため、二つの取組を行っている。一つは、先にも触れている、ボランティア等の外部人材による学習支援である。成績下位層については教員の指導に重点が置かれるが、成績中位層は自分たちの力で学習を進めることができると思われる。しかし、実際には子どもたちだけでは、自主的に十分な学習を進めることは難しい。特に、低学年においてはその傾向が顕著である。しかし、担任や教科担任が、特別な支援を要する児童生徒の対応や、学習規律に課題のある児童生徒への対応に多くの時間がとられることで、本来ならばもっと力を発揮できる児童生徒の力を伸ばし切れていない可能性がある。この層についても、ボランティアの声かけとボランティアに褒められるという成功体験は、自己肯定感を高め自ら進んで学習に取り組む姿勢を導き出している。

また、協力校の５年生において、奈良市が実施している「個別最適化学習」（単元ごとに確

認テストを実施しその結果をクラウドに送信すると、その結果がデータベースで分析され、個別に最適化されたプリントが返送されてくるというもの）を試験的に導入している。協力校の担任からは、「学力の低位層の児童には、テスト問題の難易度が高くて集中して取り組むことが難しいが、返送されるプリントは自分の実力に見合ったものなので努力している。成績の中位層以上は楽しみにしていて、自分たちでどんどん進めている。」と聞いている。

教員が全てを指導するのではなく、児童自らがやるという気持ちを引き出し、児童同士が問題の解き方を考え教え合いながら、自らの学ぶ力を高めていく一助になっていると考える。

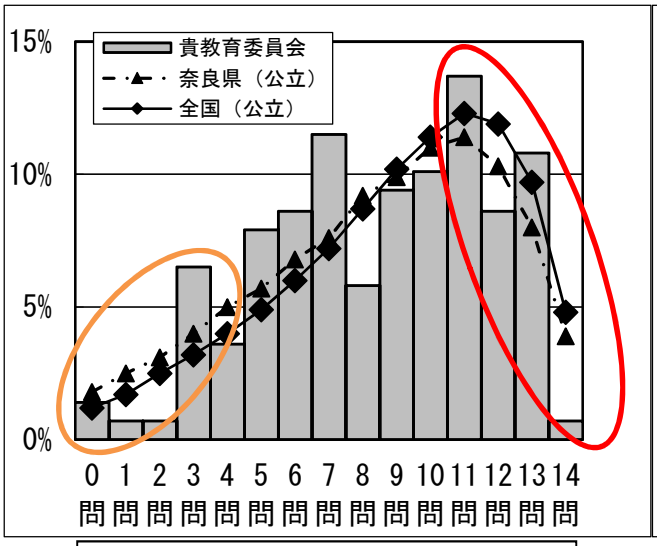
また、本年度も、町で全国学力・学習状況調査の結果報告会を実施し、昨年度に続いて指導助言に講師を招聘し、分析結果に講評をいただいた。また、今年度の本研究のねらいである、成績中位層の分析を中心に、今までの取組と今後の取組について交流を行い、各学校の取組を全体のものとしている。

## ３．実践研究の成果の把握・検証

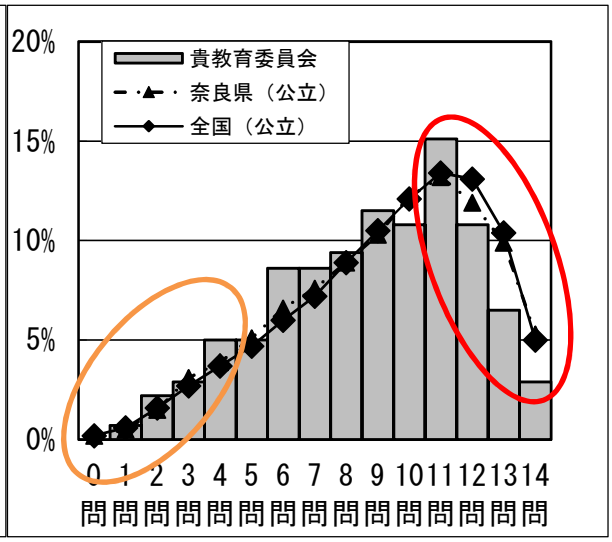
本年度の小学校の全国学力・学習状況調査の結果を以下に示す。今回の結果のみで判断するのは難しいが、昨年度の課題であった、学力低位層の児童については一定の成果があったと考えている。

国語においては一つのピークとして存在しているが、正答数が 2 問以下である児童は有意に減少している。算数においてもほぼ国や県の正答数と同じカーブを描いており、低位層の児童に対する支援は、ある程度効を奏しているのではないかと考えられるが、今後もこの取組を継続、深化させて、効果が定着するようにしなければならない。

しかし、高位層のグループが中位層以下にシフトしている傾向は、今までと同じく残っている。この傾向を解消するために、本年度の取組を検証するとともに、具体的な取組に関して、必要性と重要性を各学校と共有し、教育委員会として支援していく内容について精査する必要がある。




H31　小学校　国語




H31　小学校　算数

## ４．今後の課題

２年間の取組でどの程度効果があったかは、今後の検証を待つ必要があるが、それぞれの学年の児童にそれぞれの課題があることは明らかである。しかし、児童の置かれている現状とその問題点については共有できたのではないかと考えている。

今後は、学校図書館の活用と、司書やボランティアの活躍の場を広げるとともに、本年度の取組が中位層、高位層の児童に効果を及ぼすかの検証と低位層の減少傾向が継続することを追跡調査し、取組の改善を行っていく必要があると考えている。その点では、毎年町全体で実施している、学力・学習状況調査結果報告会において、町全体で課題を認識し、それぞれの取組を交流する意義は大きいと考えている。今後、本報告会の在り方についても検討を加え、より一層、先生方が自らの分析やそれに対する取組、工夫などを交流できる場にしていきたいと考えている。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 奈良県五條市立北宇智小学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

平成 29 年度の全国学力・学習状況調査の結果から、全国平均との差を見てみると、国語Ａでは 4.8 ポイント、国語Ｂでは、10.5 ポイント、算数Ａでは、9.6 ポイント、算数Ｂでは 9.9 ポイント下回った。平成 30 年度では全国平均との差が幾分縮まりはしたものの、「読むこと」「書くこと」に課題がある。国語の「読むこと」「書くこと」では、文章の中から必要な情報を見付けて読み取ることや、設問の読み取りができない。また、算数においても、「数学的な考え方」「図形」「数量関係」等で、読み取りでの説明や立式などができない。これは国語・算数だけではなく、他教科でも言えることであり、文章の意図することをきちんと読み取ることができない児童が多い。また、語彙力や論理力なども十分とは言えず、文章を読解するために必要な基礎的な力も不足している。このように本校の課題としてあげられるのが、「読解力」である。読書活動の活性化、論理国語の実践を進めることで、読解力を高め学力向上につなげていきたい。

### ２．協力校としての取組状況

「読む力」を向上させるための手立てとして設定したのが、「読書活動」「家庭学習」「授業改善」の三点である。

読書活動では、『Book　Cafe　Kitta（学校図書館・学習センター）』との連携を図り、児童がより多くの言葉との出会い、様々な文章に触れていく機会となる活動を設けた。

家庭学習では、予習・復習の習慣化による基礎基本の定着や、図書館の本や新聞などを活用した調べ学習の推進による情報活用能力の育成を図った。

授業改善として、市作成の授業プランシートをもとに基本的な問題解決型学習の確認と、昨年度に作成した『北小スタンダード（読書活動の年間計画）』を推進していくと共に、「教科書をしっかり読み、その内容を理解する」ことを第一とした授業、「正確な理解」に基づく読み取り、つまり論理的な読みができる児童を育てるための授業(リーディングチェックリスト等の活用）を研究実践していくことを進めた。

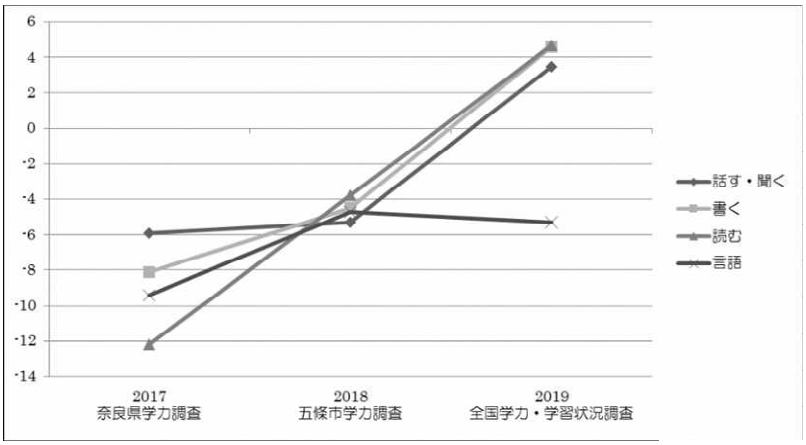
子どもたちは、数多くの言葉や文章の中で生活している。それは身の回りにあふれている目に見えるものだけではない。子どもたちが五感によって得た情報も全て言語化されて知識とな

っている。また、それらを思考・判断・表現していく過程も言語によって処理されている。つまり学校教育の全てが言語活動と言える。「読解力」は、その言語を論理的に理解するために不可欠なものである。その力をきちんと身に付けることこそが、あらゆる「学力の向上」に繋がると考え、取組を進めた。

## ３．取組の成果の把握・検証

資料１は、令和元年度６年生における学力テストの結果推移である。４・５年生は東京書籍、６年生は全国学力・学習状況度調査の結果を通して比較し、国語科の領域別に本校の正答率と全国平均正答率との差をポイント化した。ただし、異なるテストの結果を基にするので正確さに欠けるところもある。

平成 29 年度に全国平均から-12.2 ポイントと大きく離れていた「読む能力」の正答率だが、令和元年度には＋4.7 ポイント、つまり 16.9 ポイントの上昇が見られた。




（資料１）

また「書く能力」が 12.7 ポイント、「話す・聞く能力」が 9.4 ポイントと、「言語についての知識・理解・技能」以外の３領域が上昇するという結果になった。

資料２は、令和元年度の全国学力・学習状況調査において「読解力」に関わる問題とその正答率を抽出したものである。

| 問題番号 | 評価の観点 | 出題の趣旨 | 正答率（%） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 本校 | 奈良県 | 全国 |
| 国語<br>１三 | 書く | 目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書く | 40.9 | 27.3 | 28.8 |
| 国語<br>１四(2) | 言語<br>（接続語） | 文と文との意味のつながりを考えながら、接続語を使って内容を分けて書く | 50.0 | 43.5 | 47.8 |
| 国語<br>２ー(2) | 読む | 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読む | 90.9 | 72.2 | 75.9 |
| 国語<br>２二 | | 目的に応じて、本や文章全体を概観して効果的に読む | 90.9 | 84.5 | 88.5 |
| 国語<br>３ー | 話す・聞く | 話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って、自分の理解を確認するための質問をする。 | 95.5 | 78.0 | 81.3 |
| 国語<br>３二 | | 目的に応じて、質問を工夫する。 | 72.7 | 62.9 | 67.4 |
| 算数<br>１(3) | 考え方 | 示された図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を記述できる | 54.5 | 43.5 | 43.9 |
| 算数<br>２(3) | | 資料の特徴や傾向を関連付けて、一人当たりの水の使用量の増減を判断し、その理由を記述できる | 63.6 | 51.8 | 52.1 |
| 算数<br>３(2) | | 示された合計算の仕方を解釈し、減法の場合を基に、除法に関して成り立つ性質を記述できる | 31.8 | 29.5 | 31.1 |
| 算数<br>４(3) | | 場面の状況から、単位量当たりの大きさを基に、求め方と答えを記述し、その結果から判断できる | 68.2 | 60.9 | 62.6 |

（資料２）

「読む能力」に関わる問題は合計３問あり、その内２問の正答率が共に 90.9%と高くなっている。

「書く能力」では、出題の趣旨が「目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて書く」という問題が出題されており、全国平均が 28.8%のところ本校は 40.9%の正答率であった。また、「話す・聞く能力」や「言語についての知識・理解・技能」でも同様に、「読解力」が関わるほとんどの問題で全国平均を上回る結果となった。

さらに算数科の「数学的な考え方」に関する問題では、記述式が合計４問出題されており、その全てにおいて全国平均よりも高いポイントを得た。

以上のような結果の理由としては、やはり「論理国語」と「読書活動」の研究と実践を積み重ねてきたことに因るところが大きいと考えられる。

## ４．今後の課題

本校の今後の課題を次のように設定した。

●読解力の向上のための『読書』の継続

結果的に見ると、今回の『読書』の研究は「読解力」を育むための有効な手立ての１つであり、「学力向上」に繋がる良策だと言える。

「読書活動」を進めることで、実際に児童は図書を手に取り、論理的な読みによって内容を楽しめるようになった。また「論理国語」では、教科書の内容を正確に読み取ることができるようになり、学力テストの結果にもその成果を残すことができた。

●自尊感情の向上のための取組の継続

「自尊感情の向上」の取組による児童の自信や学習に対する姿勢の改善が、『読書』をより有意義なものへと押し上げていったと言える。

これらの取組は、今後も継続していくに値するものと捉え、さらに研究を重ね、内容を改善・深化させていきたいと考える。

●基礎・基本の定着

令和元年度の全国学力・学習状況調査によって、「基礎・基本の定着」が課題の１つとして見えてきた。言語や計算などの知識・技能の定着には「反復」が重要である。漢字や計算の小テストを毎日実施し、できるようになるまで何度も繰り返すような地道な学習が成果に繋がると考える。ここでも PDCA サイクルを自ら回すことで、自分の課題を解決すると共に目標達成を味わえる有意義な取組としていきたい。

●家庭や地域との連携

「学力の向上」だけでなく、児童の成長に欠かせないのが「家庭や地域との連携」である。

本校の教育において、家庭学習は何のためにやっているのか、それを通してどんな力を身に付けさせたいのか、その共通認識があって保護者の協力が得られると考える。またその手立ても重要である。メディアや SNS もその有効な手段の１つだろう。それらを戦略的に活用することで本校の教育の周知徹底を図り、本校の魅力を伝えていきたい。そうすることで、学校・家庭・地域が一体となった教育を進めることができると考える。

●教員の授業力の向上

最後に挙げるのは、私たち教員にとっての課題である。若年層の教員が増え続けている今、「人材育成」が課題となっている。私たち教員も、児童の成長のためには絶え間ない「努力」が必要である。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

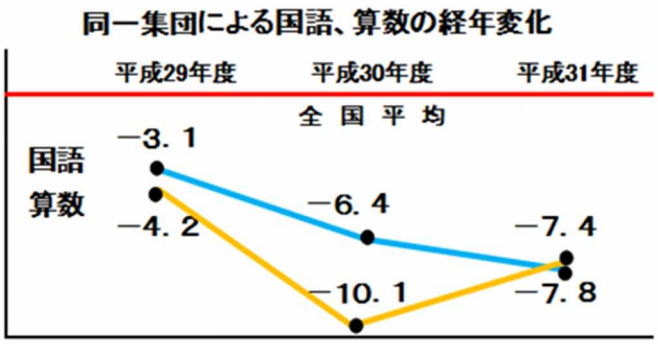
| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 奈良県五條市立野原小学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

同一集団の平成 29 年度より今年度までの算数科の全国平均との差をみると、-4 ～ -10 ポイントで推移している。このような現状を踏まえ、教職員の共通理解のもと、児童の課題を明確にして、学力向上に向けたこれまでの取組をもう一度見直し、系統性のある取組をさらに進めていく必要があると考えた。




| | | H29 年度 | H30 年度 | H31 年度 |
|---|---|---|---|---|
| 算数 | 本校 | 73.2 | 54.7 | 59.0 |
| | 全国 | 77.4 | 64.8 | 66.6 |
| | 差 | -4.2 | -10.1 | -7.6 |

そこで、本校においては、次の 3 点を今年度の取組の課題とした。

①授業力の向上
②学習意欲の向上
③家庭学習習慣の定着

これらの課題と現状を踏まえ、研究主題を今年度より『対話的な活動を通して自らの考えを広げ深めることができる学習集団づくり』とし、算数科の研究を通して授業力の向上を中心に取り組んできた。

## ２．協力校としての取組状況

上記の課題を解決するために、次の４つのことを取り組んだ。

（１）全教員での学力状況調査の分析・考察
（２）授業力向上
（３）学習意欲の向上
（４）家庭学習習慣の定着

### (1) 全教員での学力状況調査の分析・考察について

４月に実施した、6年生の全国学力・学習状況調査の問題を教職員が解き、出題傾向と問題の意図を理解した上で結果の分析を行った。そこから算数科において、児童のつまずきや課題を明確にして、重点的に取り組む事項について共通理解を図る。（８月）

正答率の低い問題

・減法の式が、示された形の面積をどのように求めているのかを、数や演算の表す内容に着目して書く（量と測定・数学的な考え方・活用に関する問題・記述式） 39.1%
・減法の計算の仕方についてまとめたことを基に、除法の計算の仕方についてまとめると、どのようになるのかを書く（数と計算・数学的な考え方・活用に関する問題・記述式） 26.1%
・1800÷6は、何m分の代金を求めている式といえるのかを選ぶ（数と計算・数量関係・数量や図形についての知識理解・知識と活用に関する問題・選択式） 30.4%
・残り７ポール分進むのにかかる時間の求め方と答えを記述し、24 分間以内にレジに着くことができるかどうかを判断する（量と測定・数量関係・数学的な考え方・活用に関する問題・記述式） 34.8%

結果から分かったこと

・「量と測定」「数量関係」の領域、活用に関する問題、記述式問題の正答率が低い。
・単純な式をかいたり計算をしたりすることはできているが、式の意味や式の中で使われている数字が何の数字なのかを説明することに弱さがある。
・問題にかいてある例を参考に（活用して）答えることが苦手。
・記述式問題については、普段のテストにない問題なので書き方（答え方の模範）が分からない。
→無回答につながってしまっている。

今後の取組

・朝の学習や宿題を利用して、記述式問題に取り組む。
→問題の形式や問題文の見方に慣れ、「答え方が分からない」「やったことがないから見通しがもてない」という課題を解消する。
・「単位量あたりの大きさ（５年）」は、整数の時点で量的関係性を明らかにして理解させておく。その後、単位量が小数や分数になったときに考え方の基礎となるため。
・「わる数」「わられる数」「商」などの言葉を普段の授業で使い、その言葉の関係性を問題文の中から見つけ出せるようにしていく。また、「たす数」「ひく数」「かける数」「わる数」と各学年で関連性をもって出てくるような言葉は、その都度関連させて教える。

これらの分析・考察の結果から論理的に考え説明する力や家庭学習習慣の定着といった課題については取組が必要であると考える。ただ、全職員で分析・考察に取り組んだことで、それぞれの学年においてつまずきが見られる単元等、児童の課題を共通理解し、その後の授業や学力向上に向けての実践につなげることができた。

## (2) 授業力向上に向けた取組

### ① 校内研究授業

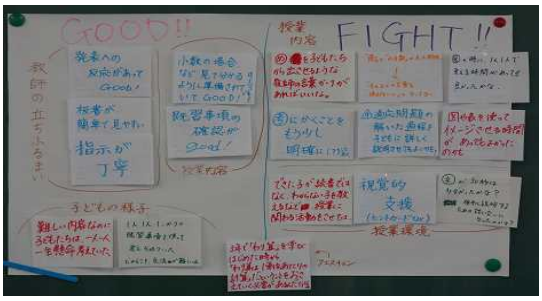
今年度の研究主題を『対話的な活動を通して自らの考えを広げ深めることができる学習集団づくり』と設定して、算数科を中心に研究を進めている。

・交流学習を通して、意見の違いや共通点に気づき自らの考えを深める。

・図書館司書と連携して、学校図書館を効果的に活用した国語科の授業

・ＫＪ法による成果や課題を可視化し、普段の授業実践につなげる研究協議

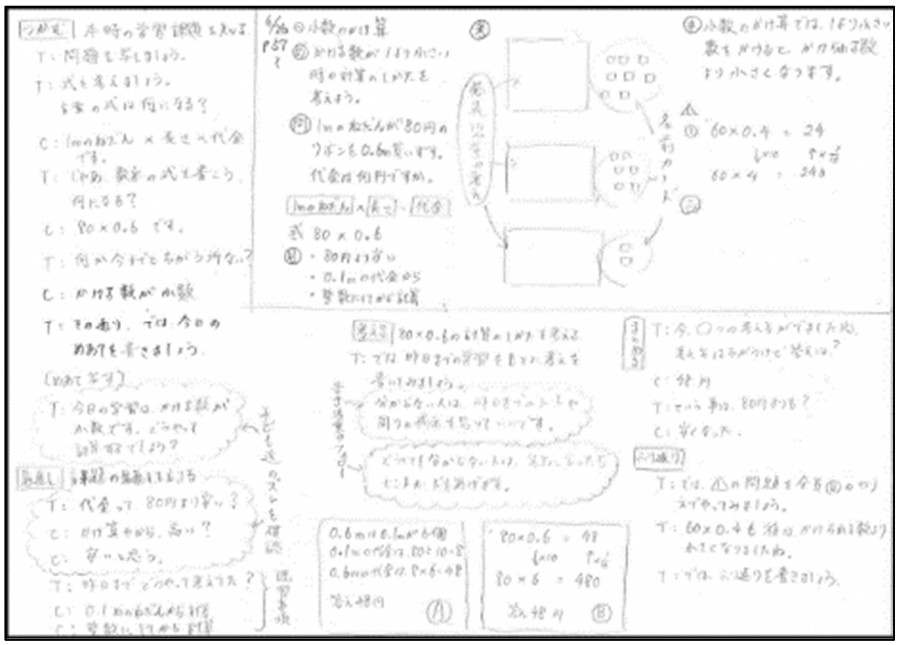
ＫＪ法によるグループ協議




成果や課題の可視化

### ② デザインシートを活用した授業実践

１時間の授業の中で子どもたちに付けたい力を明確にして、子どもたちの学習が深まるよう、指導者の効果的な発問など１時間の授業の流れを整理したデザインシートを作成して、算数科の授業に取り組んでいる。



授業デザインシート

### ③　小中連携

年に２回野原中学校との公開授業交流を行っている。授業の参観、研究協議を通して、違った視点で意見を交流することで、新たな課題や今後の方向性が明確になり、有意義な交流ができた。今後は中学校の教員が小学校で授業を行うなど、中学校教員の専門性を授業実践に生かし、学力向上につながる取組を考えていきたい。

中学校の教員との研究協議

中学校の教員、生徒による走り方教室

### ④　働き方改革による教材研究等の時間の確保

今年度より、児童の下校時刻を変更し、また教育ネットを活用して情報を共有して会議を効率化するなど働き方改革を進めることで、少しではあるが教職員の放課後の時間を確保して教材研究に取り組んでいる。

## (3) 学習意欲の向上に向けた取組

### ①　まなび方教室

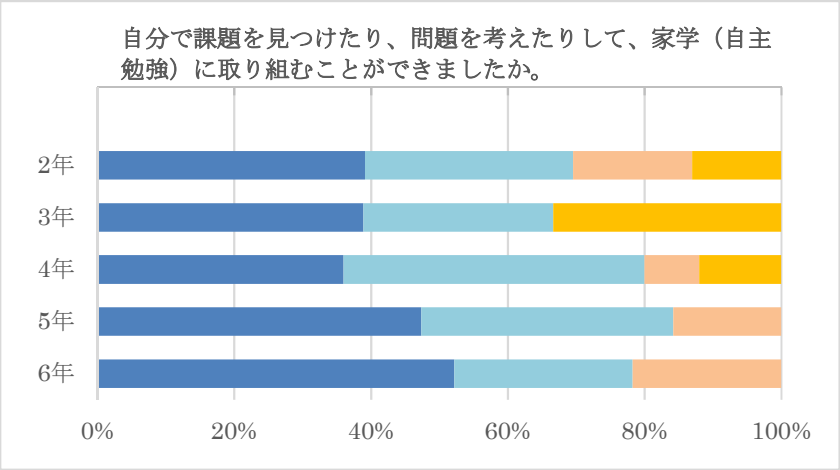
基礎的･基本的な知識･技能の定着だけでなく、どの教科においても学び方を習得することで、子どもたち一人一人の自立した学習習慣の確立させることをねらいとして、学力補充学級「まなび方教室」を行っている。

・算数科を中心とした学習

・３～４人の児童に教師が一人ついて、少人数体制で授業を行っている。

### ②　自主学習の取組

自主学習については、今年度より部会で学年に応じた内容等について検討し、２年生より取組を進めている。しかし、６月の学校評価のアンケートの結果から、子どもたち一人一人が自分の苦手な部分や必要な学習について理解をして取り組む習慣がまだまだ身についていないと考えられる。自主学習の内容の充実と計画的に学習を進める主体性をさらに高めていくことが今後の課題である。




６月の学校評価
児童アンケートより

## (4) 家庭学習習慣の定着に向けた取組

家庭学習習慣の定着、家庭学習の充実に向けて、家庭との連携をさらに進めるために家庭学習の手引きを年度当初に発行した。内容について部会で検討し、基礎・基本の定着に向けての家庭での役割や、自主学習の取り組み方などを伝え、家庭との共通理解を図りながら取り組んでいる。

## ３．　取組の成果の把握・検証

今年度、算数の授業の流れを統一して進めていった結果、めあての提示から振り返りまでの１時間の授業の流れのモデル化については、ある一定の定着が見られる。また、デザインシートの活用により、本時のねらい（付けたい力）に迫る交流のあり方等について各担任が意識して取り組むようになった。

こうした授業への意識の変化によって、少しずつではあるが児童の学力向上にもつながっている。

| | | H30 年度<br>奈良県小学校<br>算数テスト | H31 年度<br>全国学力・学習<br>状況調査 | H31 年度<br>奈良県小学校<br>算数テスト |
|---|---|---|---|---|
| 算数 | 本校 | 70 | 59 | 68 |
| | 県 | 72.7 | 66 | 67.8 |
| | 差 | -2.7 | -7 | +0.2 |

昨年度と今年度に行った奈良県小学校算数テストと、４月に行った全国学力・学習状況調査の結果を並べて見てみると、本校と県の平均正答率の開きは小さくなってきている。

| | 数と計算 | 量と測定 | 図形 | 数量関係 |
|---|---|---|---|---|
| 県平均 | 75.18 | 60.16 | 72.28 | 63.76 |
| 野小平均 | 76.5 | 65.2 | 67.8 | 58.3 |
| 差 | 1.36 | 5.06 | -4.5 | -5.5 |

今年度の奈良県小学校算数テストの結果では、奈良県の平均点と同じまで上がってきている。領域別で見ると、図形（-4.4%）や数量関係（-5.5%）にまだまだ課題が見られた。

## ４．今後の課題

授業スタイルの統一やデザインシートの活用など、授業改善に向けた取組によって、教師の授業に対する意識や授業力の向上が見られた。そのことが、少しずつではあるが、児童の学力向上に現れてきている。しかし、学校評価の児童アンケートの結果から、子どもたちの学習に対する意欲や、家庭学習に取り組む姿勢に課題がみられる。

子どもたちの学習意欲が向上するように自主学習の取組をさらに工夫し、自ら課題を見付け、計画的に学習に取り組む力を高めていく必要がある。また、家庭学習の手引き等を効果的に活用して、家庭との連携を図りながら家庭学習の内容を充実させていきたい。

さらには、中学校卒業時に子どもたちに付けておきたい力を明確にして、系統性のある取組ができるよう、小中の連携を計画的に進めていく必要がある。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 奈良県五條市立五條中学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

令和元年度の全国・学力学習状況調査の結果から、国語、数学、英語における本校と全国平均正答率との差は 11 ポイント、13 ポイント、９ポイントと全国平均を下回った。今年度は特に、本校５年間のデータの中、全国平均を上回った平成 29 年度に比べ、全国平均との差が大きく広がってしまった。

本校は、数年前まで、家庭での学習習慣が定着していない生徒が多くいた。平成 30 年度では平日３％、休日７％と「全くしない」という生徒が減少している。平成 28 年６月より取り組んでいる自主学習ノートの取組を継続して行った結果が現れてきたと考えられる。しかし、家庭学習が定着してきた一方で、取り組んでいることが結果につながっていない傾向にある。

本校研究委員会の課題として、昨年度に引き続き、以下の点があげられる。

(1) 習熟度別学習の形態など学習意欲の向上をさせることや学習環境の在り方について検討する。

(2) 自尊感情の高揚を伴った自主学習ノートの基礎・基本の定着に向けたやり方についての方途を探る。

(3) 学力の二極化の傾向が見られるので、下位層の底上げを行う授業改善をする必要がある。

(4) 授業における「見通し」、「振り返り」をさらに徹底して行っていく必要がある。

### ２．協力校としての取組状況

#### (1) 授業力の向上

「話し合い活動」による言語活動の充実を図るために、平成 28 年度から取り組んでいるホワイトボードを活用した授業を各教科（英、数、国、道等）で引き続き行っている。本校では今年６つの教室にプロジェクターが完備された。ＩＣＴ教育の充実も引き続き取り組んでいる。

また、昨年度から、学力の二極化に対応する授業形態を構築している段階である。主に、ＴＴ体制で行っている英語、数学を中心に取り組んでいる。それぞれの教科で行った事柄を下記に示す。

① 英語科

| 形態 | 支援・手立て | 効果 |
|---|---|---|
| ＴＴ指導の中、主たる教師が一斉授業を行い、もう一人の教師は机間指導しながら、個別指導をしている。また、音読やプレゼンテーションの評価を行うときは、２人の教師で、評価基準を合わせて、実施している。また、ターゲットセンテンスを用いた導入時の英語でのやりとりや表現活動のデモンストレーションも事前に打ち合わせをして、実施している。 | ・学習状況が十分でないときに、適切な声かけを行う。<br>・学習内容につまずきや困り感がある場合に、適切な援助をすることで、自立した学習を促す。<br>・それぞれの力に応じた問題の提示やアドバイスを行う。<br>・学習状況に応じて、個に応じたヒントや導きを行い、自主的に表現方法や既習事項を振り返ることができるようにする。<br>・グループ学習において、めあてに応じた活動がなされているかの確認を行う。 | ～生徒の立場から～<br>・複数の教師がいることで、質問がしやすく､関ってもらえる時間が増える。<br>・英語でのやりとりのデモンストレーションは身近な題材で、ライブ感がある。<br>・英作文の確認をすぐにしてもらえ、英語での表現力が高まり、伝えたい内容で正確な英語が書けるようになる。<br><br>～教師の立場から～<br>・多くの視点から児童生徒の実態が把握でき、生徒理解が深まる。<br>・教師同士の互いの発想・方法が刺激となり、実践が高められ、指導方法の工夫・改善、共有ができ、授業改善がはかれる。それが、生徒の学力向上につながる授業として還元される。 |

② 数学科

| 形態 | 支援・手立て | 効果 |
|---|---|---|
| 各学年ＴＴ指導の中、主たる教師が一斉授業を行い、もう一人の教師は机間指導しながら、個別指導をしている。また、単元の内容によっては、習熟度別にクラスを分け、「標準コース」、「基礎コース」で授業を行う。同一の到達目標を設定し、それぞれのクラスに応じた異なる指導方法で行っている。また、演習の際も２つのコースに分かれ、共通問題を解いた後、「標準コース」は発展的内容、「基礎コース」は共通問題に似た問題を反復する内容に取り組んでいる。 | ・本時の学習内容が十分に理解できていない際、適切な声かけを行う。<br>・問題演習を行う際は、生徒が問題を考える十分な時間を確保し、自ら取り組む意欲、関心、態度につなげている。さらに、個々につまずいている部分を複数の教師が適切な声かけをし、理解をうながす。<br>・「基礎コース」では、具体物を扱い学習内容を把握したり、「標準コース」では、思考力を養ったり、理解度に応じた授業を行う。<br>・生徒同士のできるできないといった固定観念が生まれないよう単元によってコース編成を変化させている。 | ～生徒の立場から～<br>・複数の教師がいることで、質問がしやすく､関ってもらえる時間が増える。<br>・自分自身で自分にあった授業選択を行うことができる。<br>・複数の指導方法から考え方を広げることができる。<br><br>～教師の立場から～<br>・複数の教師が存在することで、個別の能力に合わせた指導を効率よく行うことができる。<br>・複数の教師で見ることで、生徒のつまずきを共有することができる。<br>・ＴＴを通して、教師同士の指導方法の幅が広がる。 |

＜ＴＴを利用した授業の様子＞

### (2) 学習内容の基礎・基本の定着

普段の授業の中では、基礎的・基本的な内容の確認問題を意識的に行っている。低学力傾向の生徒を中心に「できた」という実感や喜びを積み重ねることを目的として、数問の確認問題を出題することでスモールステップを心がけている。

「定着ステップ」では、定期テストにおけるポイントの再確認や、基礎的・基本的内容を反復して学習するなど低学力傾向の生徒に対応した補充学習となっている。現在、各学年ともに半数を超える生徒の参加があり、定期テストに向けた学習をすることができるので、自己肯定感が高まり、非常に有用な学習活動となっている。

＜令和元年度　定着ステップ参加人数＞

| 学　年 | 参　加　人　数 | 割　合 |
|---|---|---|
| 3　年 | 16 名／25 名中 | 64.0 ％ |
| 2　年 | 25 名／44 名中 | 56.8 ％ |
| 1　年 | 21 名／33 名中 | 70.0 ％ |

### (3) 自主学習ノート

全学年で宿題とは別に自主学習ノートに取り組んでいる。２年前までは、入学した１年生が内容の充実した自主学習ノートを書く習慣ができていなかった。継続して取り組んだ結果、家庭学習の習慣が定着した。これは、小中連携の一つとして五條中学校区内の２つの小学校でも取り組んできた成果が中学校につながっていると考えられる。

さらに、自主学習ノートを通じて、個々の課題に迫り、「やればできる。」という達成感を得ることで自尊感情の高揚から、自己効力感の高揚へとつなげている。

## ３．取組の成果の把握・検証

### (1) 授業力の向上、学習内容の基礎・基本の定着

「見通しと振り返り」を各教科において、授業者常に意識し、一人一人の生徒の状況を把握した上で、分かる授業と明日へつながる授業の方途を探求していくことを心がけている。

特に振り返りにおいては、落ち込みがある生徒へのアプローチとして、各放課後学習への参加の呼びかけを担任あるいは、教科指導者が連絡連携をしながら常に呼びかけ、低学力傾向の生徒への支援を行っている。

しかし、学力観は、学校と家庭すなわち教師と保護者との共有観をつなげていきたいところではあるが、現状を振り返ってみると難しいところがある。課題として、小学校との連絡連携（一人一人の子どもたちの心理状態の把握）及び授業方途の共有をより図っていくことが課題である。もう一つの課題として、将来の職業に対する意識化が必要であると考える。いわゆるキャリア教育を通して職業観につなげことにより、各教科を学ぶ重要性を認識し、各自が将来の仕事につながることが自覚できる。以上のことから日々の各教科における授業の意義や小中の連携はもとより、家庭との共有を図らなければならないと、これまでの本校における取組を通して、確認できた。

全国学力・学習状況調査において、３年前は、これまでの積み上げの成果として、全国平均との差が小さくなった。しかし、今年度においては、全国あるいは県と比較をした際、本

校（３年）は著しく低いことが伺える。

その要因として、小中９年間における基礎学力の落ち込みがある。その実状を踏まえ、生徒の心理に迫り、分かる授業を進めてきた。

### (2) 自主学習ノート

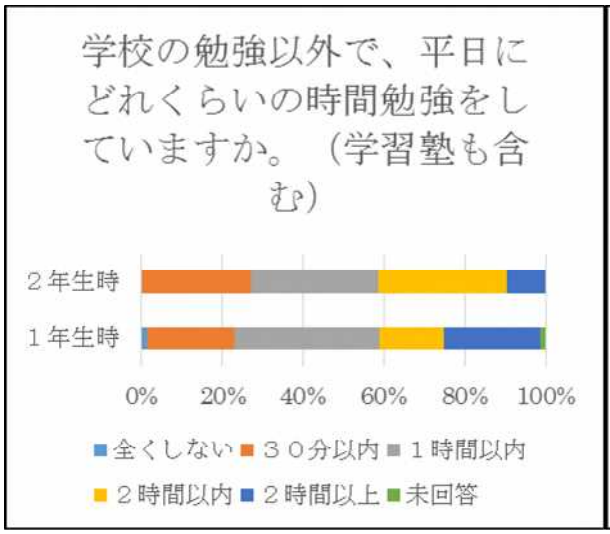
令和元年度の自主学習ノートの各学年提出率は以下の通りである。ほとんどの生徒が自主学習ノートに取り組み、教職員が点検をおこなうというサイクルができあっている。

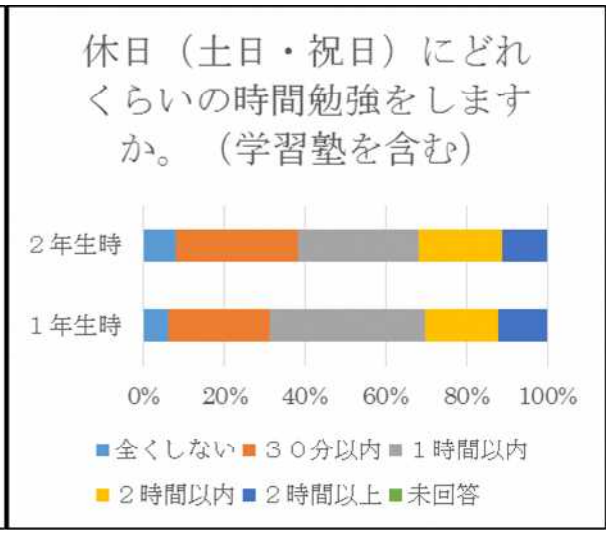
＜自主学習ノート各学年提出率＞

| | |
|---|---|
| 1　年 | 100% |
| 2　年 | 100% |
| 3　年 | 92% |

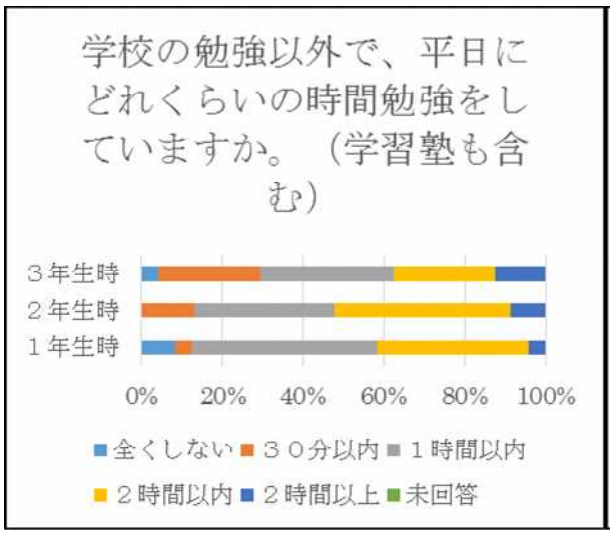
自主学習ノートの取組による、家庭学習習慣の定着の成果の検証をアンケートを基に行った。

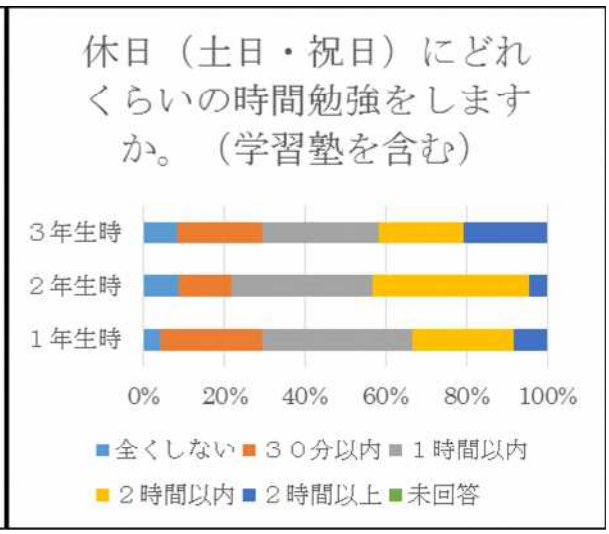
＜現２年生の家庭学習の推移＞




＜現３年生の家庭学習の推移＞




それぞれの年度にばらつきはあるが、家庭学習を平日「全くしない」という回答は減ってきてはいる。しかし、その一方で、休日に「全くしない」という割合が増えてきていることが今後の課題である。学校だけでなく、家庭ともさらに連携しながら学力向上につなげていきたい。

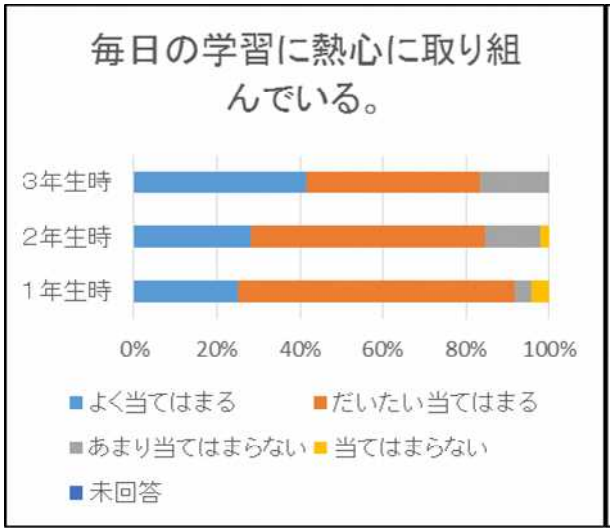
## ４．今後の課題

今後の課題として下記の２項目が挙げられる。

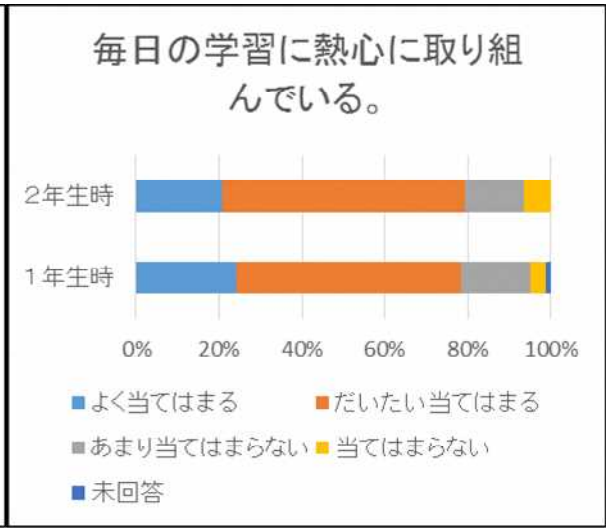
○　各教科での低学力傾向の生徒が「主体的・対話的で深い学び」ができる授業展開やサポートを行っているが、さらなる手法を考えていかなければならない。

○　教科担当を超えた指導体制の中、基礎・基本の定着につながる自主学習ノートの在り方や取り組む意欲を後押しできる手法をさらに検討していく必要がある。

＜現３年生経年比較＞




＜現２年生経年比較＞




本校独自のアンケート（上記）の「毎日の学習に熱心に取り組んでいる」の項目では、現３年生については、「よく当てはまる」の回答が年々増えている。現２年生についても若干ではあるが、肯定的な回答が増えている。しかし、一方で否定的な回答が両学年通して、20 ポイント近くの生徒がいる。この２年間、学力の二極化に対して、取組を行ってきたが、現在でも学習に目が向かない生徒がいることも事実である。繰り返し低学力傾向の生徒への授業内外でのアプローチはもとより、家庭状況及び心理的分析も念頭に入れ、生徒の意識の変化につなげていかなければならない。上記の内容をかんがみながら、生徒一人一人の更なる自己肯定感の向上につなげる必要がある。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 奈良県御所市立御所小学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

本校では、２年前から「みらいを創造するためのトータル人間力の育成」を学校教育目標に、教育内容の創造を研修主題に取り組んできた。

自らの未来を築いていくための思考力、主体性、規範意識の向上を軸にした教育内容をあらゆる教科・領域において創造していくことを掲げてきている。課題解決に向かうとき、既習内容を踏まえて、自分のもつ様々な引き出しから問題解決に向けて自ら考えようとする力が伸びてきている児童は多い。一方、自分に自信がもてず、自らの課題に意欲的に取り組もうとする力をもてない児童も少なくない。今後益々、主体的実践力を向上させ、自分の未来を見つめ、自分の身丈に合った目標をしっかり立てることのできる力の育成に努めなければならないと考える。

さらに、本校では、算数科の基礎学力及び思考力の向上に重点を置いた取組を進めて３年になる。「朝学習」や「算数スペシャル」を継続的に実施することで基礎学力の向上においては一定の成果があったと考える。「算数スペシャル」については、個々の課題設定を明確にし積み上げ学習を行うことで、低位層の底上げができたものと考える。

一方、積み上げてきた学力を応用して、探究的に思考をすることで問題を解決する課題についてはまだまだ積み上げ不足の感は否めない。また、課題解決に向けて、児童自ら主体的に、必要に応じて協同的に思考を巡らせ深く追究していこうとする力は弱い。

昨年度、第５、６学年の算数科の学習指導を少人数指導体制とし、児童の主体的な算数的活動を授業の中心に据えた展開を研究した。その成果を児童のノート作りに大きく反映させることができた。そこで、今年度においては、さらに児童の主体的　実践力の向上をめざして研究を進めたいと考えている。

### ２．協力校としての取組状況

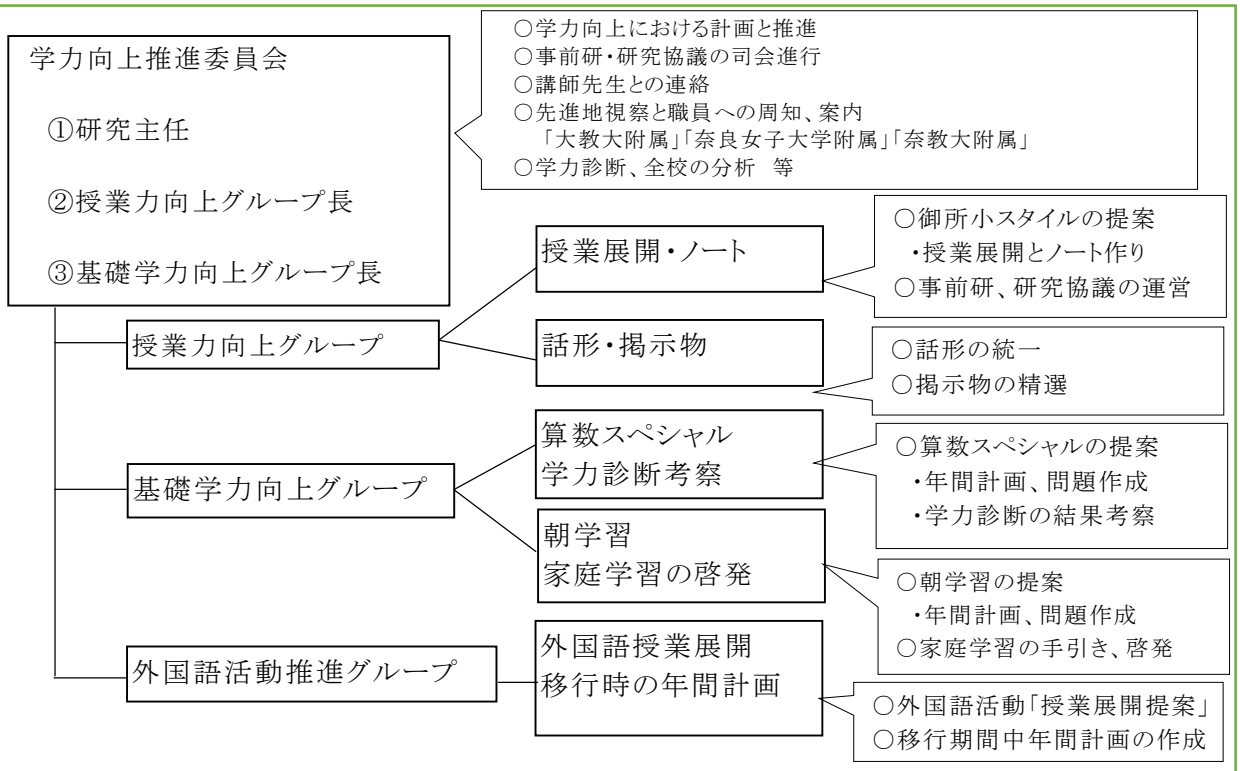
上記の課題を克服するため、昨年度に引き続き、今年度の研究主題とサブタイトルを『探究的で協同的な学習指導の工夫～確かな学力と主体的実践力を身に付けた子どもの育成～』と設定した。そして昨年度同様の研究体制をとり、さらに研究を深化させ前進できるよう意識しつつ研究をスタートさせた。

(1) 学力向上推進委員会の取組

研究主題をさらに深く読み解き、共通理解し授業力向上を含めた資質を向上するために研修を計画・推進した。児童が身に付けるべき『確かな学力』を「基礎基本の定着。学ぶ楽しさを味わい自ら考える力の育成。」と措定した。その達成に向けて教員を３つのグループに分け、学期毎に「PDCA」を意識しながら各グループが研究推進に取り組んだ。下欄はその研究体制図である。

① 授業力向上グループ

若手教員の割合が増える中、授業に対する意識や授業力の向上を図ることを研究するグループである。校内研究授業や授業づくりに関する様々な取組を計画し、推進している。



（御所小学校研究体制図）

② 基礎学力向上グループ

児童が主体的に学習に取り組む基盤となる「基礎・基本」の定着に向けた研究を行うグループである。「算数スペシャル」「朝学習」の取組をコーディネートし、その改善の手立ても提案している。

③ 外国語活動推進グループ

令和２年度完全実施される新学習指導要領移行期間中の外国語活動の在り方についての研修を企画推進するグループである。年間計画の作成、自主授業公開など、精力的に研究を進めている。

### (2) 授業力向上の取組

「授業力」は教員として成長し続けるための重要なスキルの一つである。上述の授業力向上グループが中心となり日々の授業において全クラス共通化を図る必要性の高いものを精選し『御所小スタイル』と名付け、その提案を行っている。それには、教員・教材・子どもと学びの関係性をどう措定するのか。授業展開で大切にする視点はどこなのか。等があり、校内授業研究が活性化する要素の一つとなっている。さらに話形・ノート作り・掲示物等にもこだわり、「御所小スタイル」の一つとして実践している。

今年度の公開授業は算数科で４本実施した。本校では、公開授業研究日の前に「事前研」を実施してきた。それは、授業者が学年団と検討の上、授業公開にあたり目標、展開、教材の適正さ、中心発問等々を確認しつつ、全教員が公開授業で意識化する視点を共通理解する時間である。そこで出された意見や感想を元に公開授業を行う。

そして、公開授業後の事後研究協議では、討議の柱を事前研で確認し合った授業を見る視点に沿って設定した。そして、研究主任のコーディネートの下、グループ討議を中心に研究を進めた。授業づくりの三つの視点として、

○　本時の目標の上に立った探究的な学習内容を設定できているか

○　協同的で算数的な活動ができているか

○　子どもが学びを実感できているか

と指定している。

### (3) 基礎学力向上の取組

奈良県学力診断の分析と活用を積極的に行っている。それは、年度当初に児童の学力の実態を把握するために、前年度の奈良県学力診断を５月中に実施する。そして個人と学年の傾向を分析、考察し展望を紙面で報告する。その結果を元に「朝学習（１校時前の 15 分間）」や「算数スペシャル（放課後学習）」の教材選定に生かし、基礎基本の定着を図っている。

また、児童の実態把握のために算数アンケートを行い、学力との相関関係を考察し授業展開に役立てている。

さらに今年度から読書活動の充実にも注力している。今まで本校の学校図書館は「貸し借り」「調べ学習」としての役割でしか機能してこなかった。しかし、今年度から学校司書が配属されるようになった。教員が行っていた蔵書整理や学校図書館らしい環境整理等を行っていたが、専門知識をもつ司書により見違えるような環境になった。また、児童の読書量も増えたという報告もあり、さらなる活性化を見込んでいる。

これら一つ一つは微々たる取組ではあるが、今後さらなる成果を期待している。

## ３．取組の成果の把握・検証

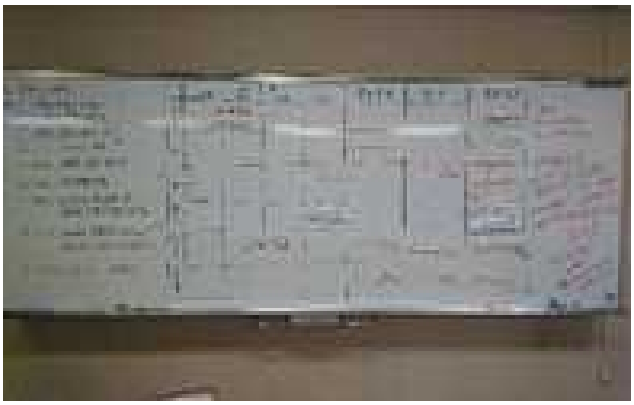
### (1) 教員の授業力向上に関して

若手教員の占める割合が大きくなっている中で、また、中堅教員の数が潤沢でない中で、

教員集団が学び合いながら授業力を向上できる環境や方策を実践していくのは大切であると考える。

また、教員一人一人の授業力の向上は必須であるが、児童の学力向上に連動していなければならない。ただ、今学び続けていることが、この先の教員生活で生かされることは容易に考えられる。見通しをもつこととそれに向けて方策を考えること。教員が教えることと子どもが学ぶことが乖離していないこと。抽象的ではあるが、本校実践の成果として大切にしたい。以下、２年間の取組を振り返り４点を挙げ成果の報告としたい。

① 「事前研」で授業作りを全体化して意見交流することにより、学年は違っても自らの日々の授業を振り返る機会となった。また、批判的思考で意見を述べることで自らの授業力のハードルを上げることになり、問題意識をもって日々の授業に取り組めるようになった。



（事後研グループ討議と討論をまとめたホワイトボード）

② 「事前研」で研修を行うことにより、公開授業への参加の身体性（参加態度、問題意識、授業参観の視点）等々に変化が見えた。そのことにより、公開授業を自分に引き寄

③ 従来の事後研究協議のスタイルを一新することにより、研究協議が一人一人の授業力向上に寄与され、指導講師の助言が自分の中でストンと落ち、次の授業づくりから生きて身に付く内容となった。

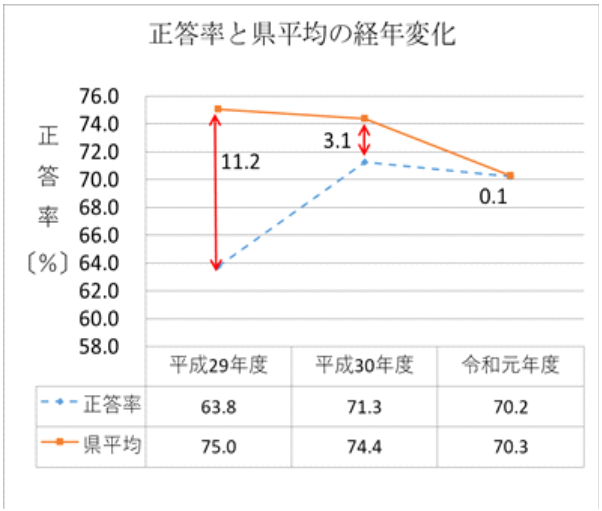
④ ２年間継続的に「授業づくりの三つの視点」を基軸に研究協議を行うことにより、常に意識して授業に臨み、一人一人の児童に寄り添った展開ができるようになった。

## (2) 基礎学力向上の取組

以下の３点をその成果とし報告する。

① 右のグラフは､算数科県学力診断テスト結果の学校全体の経年変化である。直近３年間のデータである。基礎学力向上を主眼に学校全体で取り組んできた成果の一端であると考える。

② 下表は、学力診断テストの県平均点との差を学年別に経年比較した表である。ほぼ全ての学年で少しずつではあるが、改善傾向が見られる。児童が身に付ける



べき基礎・基本を教員がきっちりと措定し、個に応じた指導をしてきた成果と考える。また、算数アンケートの結果も３年間、概ね良好な値を示しており、教員の授業への熱意が児童にも好影響を与えたと考える。

算数科　奈良県学力診断における県平均との差の経年比較（令和元年度）

| | | １年生時 | ２年生時 | ３年生時 | ４年生時 | ５年生時 | ６年生時 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 算数 | 現１年生 | 5.8 | | | | | |
| | 現２年生 | -6.9 | 0.2 | | | | |
| | 現３年生 | -13.3 | 11.1 | 0 | | | |
| | 現４年生 | -6.5 | -8.8 | -0.7 | -2.3 | | |
| | 現５年生 | -6.2 | -7.3 | -11.9 | -12.7 | 1.1 | |
| | 現６年生 | | 4.9 | -9.5 | -7.2 | -6.5 | -4.9 |

## ４．今後の課題

本研究の振り返りと来年度以降に取り組むべき課題を挙げる。

(1) 教員の授業力向上への意識は高まり伸びてはいる。しかしながら、児童の実態に応じた教材を使用しているかは疑問が残る。児童と教材と教員の関係性を研究していかなければならない。

(2) この２年間で教員の授業力は向上したと捉えているが、日々の授業での児童の評価規準を措定し、児童一人一人がどこまで到達しているかを評価できているかについては課題があると言わざるを得ない。次年度以降の取組としたい。

(3) 次の表は、全国学力・学習状況調査の比較である。年度により６年生の集団やその状況に差があるので一概には言えないが、今年度の６年生は、奈良県学力診断テストの結果においては改善があるものの、例年と比べると学力が向上しているとは言い難い。本校でできる持続可能な学力向上策を模索する必要がある。

全国学力・学習状況調査（６年生）の県平均との比較

| | 国語A | 国語B | 算数A | 算数B |
|---|---|---|---|---|
| 平成28年度 | -2.6 | -3.7 | -6.8 | -7.8 |
| 平成29年度 | -2.0 | -3.0 | 0 | -1.0 |
| 平成30年度 | 2.0 | 0 | -3.0 | 1.0 |
| 令和元年度 | 国語　-3.0 | | 算数　-5.0 | |

(4) 教員の授業力の向上に関して、当初にめざしていた『意識改革』という点においては、若手教員の意欲に満ちた取組もあり、概ね達成できてきたと考える。ただし、授業において児童一人一人の到達目標を設定し、個に応じた授業展開、発問、板書が適切であったかには疑問が残る。次年度以降、到達目標を明確にした授業展開の方策といった、教員としての基礎・基本に立ち返る研修も模索しなければならない。

(5) この２年間で授業に対する見方や、その教材を用いるときの意味や価値を児童の実態に即して考えることなど、力量が付いてきている。この成果をさらに向上させ『学び続ける教員』『成長し続ける学校』でありたい。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 奈良県御所市立御所中学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

これまでは「落ち着いて授業を受けさせる」という管理的な学習規律によって学校の安定を図ってきたため、授業は教員から生徒への一方向のものが多く、いわゆる「受け身」の授業に終始してきた。しかし、平成 29 年度から始まった学校改革によって、そのコンセプトである「主体性と多様性」をどう育てていくのか、どのような授業を目指すのかが課題として浮き彫りになってきた。そこで、平成 30 年度から学力向上プロジェクトチームを発足させ、「主体的な学びを引き出す授業づくりの工夫」を研究テーマとして位置付け、まずは教員の意識改革と授業の工夫を軸に実践研究を進めることとなった。

本校の平成 31 年度全国学力・学習状況調査結果では、国語の正答率が８割以上の生徒の割合は、全国平均より「15.1 ポイント」低く、数学では「9.7 ポイント」低くなっている。また、正答率が３割以下の生徒の割合は、全国平均に比べ、数学で「14.0 ポイント」多くなっており、厳しい状況が続いている。しかし、国語では正答率が３割以下の生徒の割合は、全国平均より「2.0 ポイント」少なくなっている。問題別調査結果においても、昨年度、一昨年度に比べると、県平均を超える項目や県平均、全国平均との較差が縮まっている項目も増えてきている。

また、生徒質問紙においても、「規範意識や自尊意識」、「社会に対する関心」で県平均や全国平均より高くなっている項目が多く見られ、「国語の勉強が好き」（76.4%）、「国語の授業の内容はよく分かる」（87.5%）、「数学の勉強は大切」（91.7%）等の項目では、全国平均を上回っている。さらに、「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」の項目では、県・全国平均を上回る結果となっている。

### ２．協力校としての取組状況

#### (1) 授業改善

①　学習規律

メロディチャイム（始業２分前のチャイム）を導入し、授業の準備、着席を意識させ、始業のチャイムと同時にスムーズに授業が開始できるようにする。

②　読書習慣の定着

始業前の時間を利用し、朝読書を始め、読書習慣の定着を図る。

③　授業スタイルの確立

一人一人を大切にし、主体的な学びを引き出す授業を目指す。そのベースとして、「めあて」を提示し、生徒に「見通し」をもたせるとともに、「ふり返り」を意識した授業づくりを進める。

④　教員の「問い力」の向上

教員の「問い力」を向上させ、生徒の学びを引き出すような学習活動につなげる。

⑤　ＩＣＴの活用

学習意欲を高めるＩＣＴの活用を積極的に推進する。

⑥　学習会の充実

定期考査前の放課後の学習会や長期休業中の各学年、各学級の学習会を充実させる。

### (2) 学びを引き出す仲間づくり

生活班を中心に、ちがいを認め合い、自尊感情や自己肯定感等を高める。

### (3) 職員研修、授業研究

学力向上プロジェクトチームを中心とした職員研修や授業研究を行い、授業力のスキルアップを目指す。

### (4) 今年度の取組状況

学力向上プロジェクトチームを中心とした職員研修や校内授業研究等を積極的に行い、授業力の向上を目指して取組を進める。

- ６／３（月）～28（金）校内の授業公開、授業参観シートの活用
- ７／９（火）保健体育科　授業研究
- ７／12（金）舩木先生（社会科）によるモデル授業
- ８／７（水）職員研修「主体的な学びを引き出す授業づくりの工夫」
- 11／21（木）県初任者研修　音楽科公開授業
- １／31（金）研究発表会

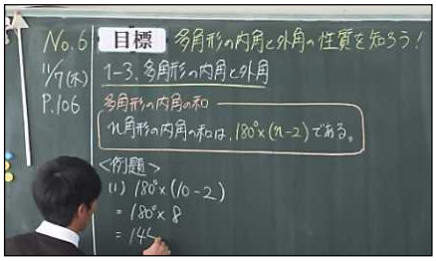
## ３．取組の成果の把握・検証

○　職員研修等を重ねることで教職員の意見交流が活発に行われるようになってきた。

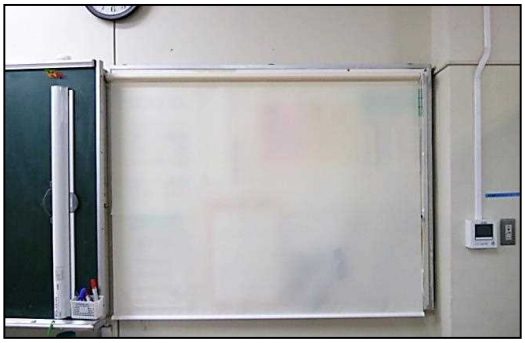
○　職員研修等を通して、授業の「めあて」や「見通し」、「ふり返り」を意識した授業づくりに取り組んでいる。

○　「授業の約束」を教室に掲示している学年がある。

○　黒板等に掲示できる、「めあて」や「目標」、「まとめ」等のユニバーサルデザインカードを作成し、全教室で授業時に使用できるようにしている。



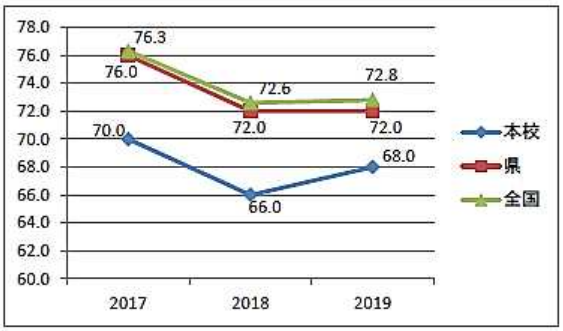
○　視界に入る掲示物をロールスクリーンで隠し、授業に集中しやすくしている。



## (1) 全国学力・学習状況調査の結果から

① 国語の平均正答率において、昨年度に比べると、66.0%から68.0%と2.0%高くなっている。また、平均正答率の較差においても、昨年度と比べると、県では6.0%の差から4.0%の差へと2.0%差が縮まっており、全国では6.6%の差から4.8%の差へと1.8%差が縮まっている。

＜平均正答率（%）（国語）＞




＜県・全国平均との平均正答率の較差（国語）＞

| | 2018年度 | 2019年度 | 較差の比較 |
|---|---|---|---|
| 本校 | 66.0% | 68.0% | |
| 県 | 72.0% | 72.0% | |
| 較差 | 6.0% | 4.0% | 2.0%の伸び |

| | 2018年度 | 2019年度 | 較差の比較 |
|---|---|---|---|
| 本校 | 66.0% | 68.0% | |
| 全国 | 72.6% | 72.8% | |
| 較差 | 6.6% | 4.8% | 1.8%の伸び |

② 問題別調査結果では、「話すこと・聞くこと」の項目で県平均を超えている。

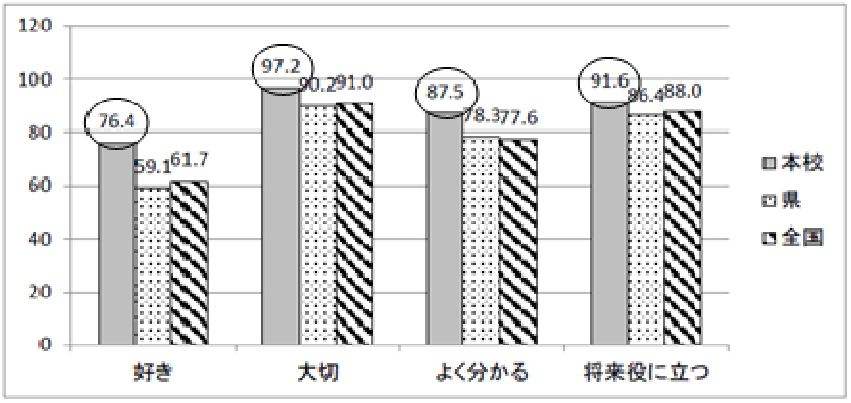
漢字プリントを毎時間、授業の始めに実施しており、プリントを小さくすることや、学習する数を３、４個にする等、生徒全員が取り組みやすいように工夫している。また、定期テストで聞き取りテストを実施し、要点を聞き取る力を養っている。

＜問題別調査結果（国語）＞

| | | 国語 2019 平均正答率(%) 御所中学校 | 奈良県(公立) | 全国(公立) |
|---|---|---|---|---|
| 学習指導要領の領域等 | 話すこと・聞くこと | ◎ 69.0 | 67.8 | 70.2 |
| | 書くこと | 76.4 | 81.4 | 82.6 |
| | 読むこと | 69.4 | 70.9 | 72.2 |
| | 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項 | 57.6 | 68.2 | 67.7 |

③ 学習に対する関心・意欲・時間等の質問紙において、「国語の勉強が好き」「国語の勉強は大切」「国語の授業の内容はよく分かる」「国語の授業で学習したことは、将来、役に立つ」の項目で肯定的に回答した生徒の割合が県平均、全国平均より高くなっている。

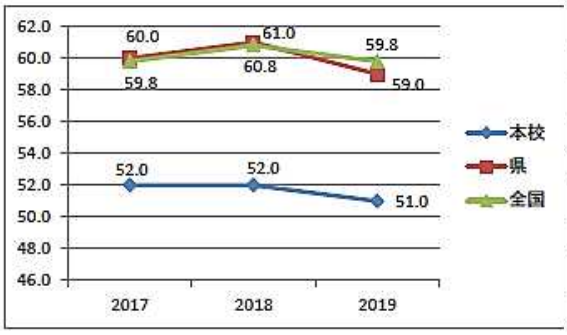
＜2019　学習に対する関心・意欲・時間等（%）（国語）＞



④　数学の平均正答率において、昨年度に比べると、52.0%から 51.0%と 1.0%低くなっているが、平均正答率の較差では、昨年度と比べると、県では 9.0%の差から 8.0%の差へと 1.0%差が縮まっている。

学力に課題をもつ生徒に関しては、抽出の少人数授業を行い、基本的な計算問題から解けるよう学習を進めている。また、授業において、ＩＣＴを活用した学習や、生徒たちが自ら取り組めるような課題を準備し、演習時間を多くとりながら、教え合いや学び合いができるようなグループ学習も取り入れている。

＜平均正答率（%）（数学）＞



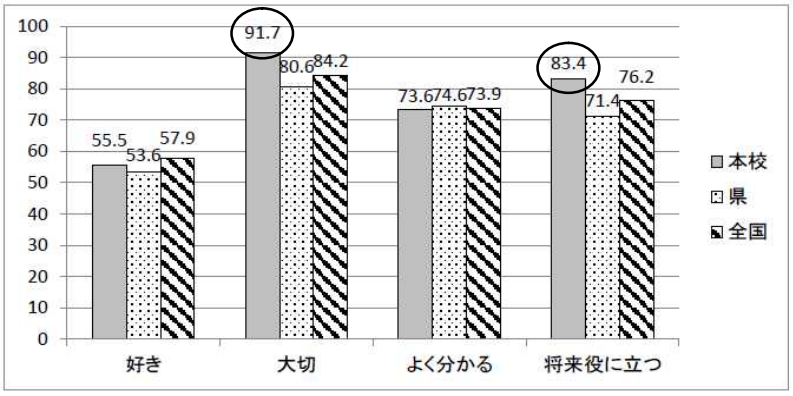

＜県・全国平均との平均正答率の較差（数学）＞

| | 2018年度 | 2019年度 | 較差の比較 |
|---|---|---|---|
| 本校 | 52.0% | 51.0% | |
| 県 | 61.0% | 59.0% | |
| 較差 | 9.0% | 8.0% | 1.0%の伸び |

| | 2018年度 | 2019年度 | 較差の比較 |
|---|---|---|---|
| 本校 | 52.0% | 51.0% | |
| 全国 | 60.8% | 59.8% | |
| 較差 | 8.8% | 8.8% | ― |

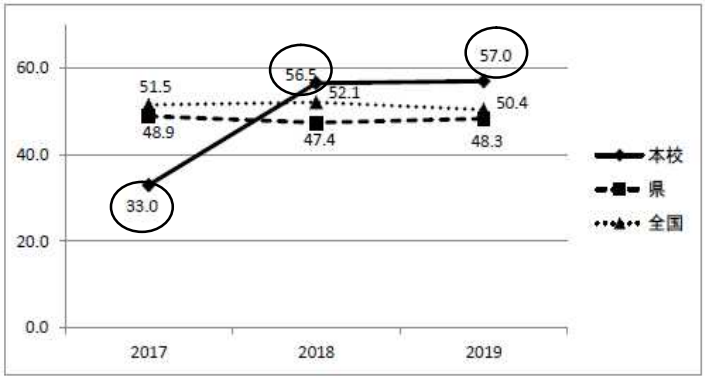
⑤　学習に対する関心・意欲・時間等の質問紙において、「数学の勉強は大切」、「数学の授業で学習したことは、将来、役に立つ」の項目で「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合が県平均、全国平均より高くなっている。

＜2019　学習に対する関心・意欲・時間等（%）（数学）＞




⑥　学習に対する関心・意欲・時間等の質問紙において、「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」の項目で「している」、「どちらかといえば、している」と回答した生徒の割合が 2017 年度から向上しており、昨年度と今年度で県平均、全国平均より高くなっている。

＜学習に対する関心・意欲・時間等（%）（家で自分で計画を立てて勉強をしているか）＞



## (2) 現３年生の学力の伸び率から

現３年生における、１年生時の県学力・学習状況調査（H29）の本校と県平均の較差と３年生時の全国学力・学習状況調査（H31）の本校と県平均との較差を比較してみると、国語の基礎・知識と国語の活用、数学の活用で県平均との較差は縮まってきている。特に、国語の活用での伸びが顕著である。

【H29 県学力・学習状況調査とH31 全国学力・学習状況調査の県平均との較差の比較】

| | 平成29年度奈良県(1年生時) | | | 平成31年度全国(3年生時) | | | 伸び率 | 平成29年度奈良県(1年生時) | | | 平成31年度全国(3年生時) | | | 伸び率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 国語・基礎 | | | 国語・知識 | | | | 国語・活用 | | | 国語・活用 | | | |
| | 県平均 | 学校平均 | 較差 | 県平均 | 学校平均 | 較差 | | 県平均 | 学校平均 | 較差 | 県平均 | 学校平均 | 較差 | |
| 御所中 | 75.7 | 72.4 | −3.3 | 70.4 | 67.7 | −2.7 | 0.6 | 73.8 | 65.6 | −8.2 | 72.0 | 68.0 | −4.0 | 4.2 |
| | 平成29年度奈良県(1年生時) | | | 平成31年度全国(3年生時) | | | 伸び率 | 平成29年度奈良県(1年生時) | | | 平成31年度全国(3年生時) | | | 伸び率 |
| | 数学・基礎 | | | 数学・知識 | | | | 数学・活用 | | | 数学・活用 | | | |
| | 県平均 | 学校平均 | 較差 | 県平均 | 学校平均 | 較差 | | 県平均 | 学校平均 | 較差 | 県平均 | 学校平均 | 較差 | |
| | 73.9 | 66.8 | −7.1 | 68.2 | 59.0 | −9.2 | −2.1 | 61.1 | 52.5 | −8.6 | 59.0 | 51.0 | −8.0 | 0.6 |

## (3) 学力向上校内アンケートの結果から

今年度の１、２年生の校内アンケートにおいて、１年生では「自分の考えを発表する機会があたえられていると思いますか」の項目で肯定的に回答した生徒の割合は、６月より 12 月が高くなっている。また、２年生では、全ての項目で９月より 12 月が高くなっている。

特に、１、２年生の約７割の生徒が課題の解決に向けて自ら考え、自分から取り組んでいると回答しており、様々な取組が生徒達の主体的な学びにつながりつつあるのではないかと考える。

【2019　生徒アンケート（１年生）】

| 項 目 | 「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合(%) | | 差 |
|---|---|---|---|
| | 6月 | 12月 | |
| ①授業のはじめに目標(めあて、ねらい)が示されていると思いますか。 | 93.8 | 83.5 | −10.3 |
| ②授業の最後に学習内容をふり返る活動をよく行っていると思いますか。 | 61.7 | 51.9 | −9.8 |
| ③自分の考えを発表する機会があたえられていると思いますか。 | 75.3 | 79.8 | +4.5 |
| ④課題の解決に向けて自ら考え、自分から取り組んでいると思いますか。 | 71.6 | 70.9 | −0.7 |
| ⑤学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。 | 75.3 | 68.3 | −7.0 |

【2019　生徒アンケート（２年生）】

| 項 目 | 「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した生徒の割合(%) | | 差 |
|---|---|---|---|
| | 9月 | 12月 | |
| ①授業のはじめに目標(めあて、ねらい)が示されていると思いますか。 | 86.4 | 96.0 | +9.6 |
| ②授業の最後に学習内容をふり返る活動をよく行っていると思いますか。 | 42.5 | 46.7 | +4.2 |
| ③自分の考えを発表する機会があたえられていると思いますか。 | 82.2 | 85.4 | +3.2 |
| ④課題の解決に向けて自ら考え、自分から取り組んでいると思いますか。 | 61.7 | 68.0 | +6.3 |
| ⑤学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか。 | 61.7 | 72.0 | +10.3 |

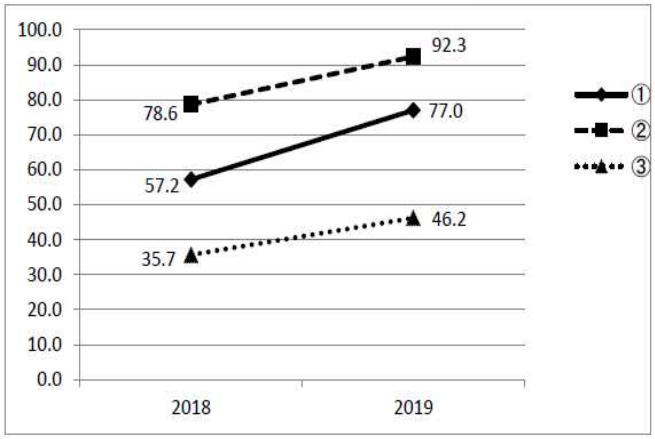
また、教職員の校内アンケートにおいて、次の①～③の各項目で肯定的に回答した教職員の割合が昨年度より高くなっている。特に②では、９割を超えており、まさに主体的な学びを引き出すための工夫が個々の教職員の意識の中に定着してきていると考える。

① 授業の中で、生徒に目標（めあて・ねらい）を示している

② 生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導を行っている

③ 授業の中で、生徒同士で話し合う活動をよく行わせている

教職員アンケート




## ４．今後の課題

(1) 「主体性と多様性」を育てていくために、生徒たちから様々な発想が出てくるような授業の展開や工夫がさらに必要であると考える。

(2) 生徒のアンケート結果において、１年生では、数値が下がっている項目があり、学年として共通理解しながら、取組を継続していくことが大切であると考える。２年生では、特に、授業の最後に学習したことをふり返る活動が比較的低い数値であるため、今後も「ふり返り」を意識した授業づくりが必要であると考える。

(3) アンケート項目については、さらに検討し、項目を増やしながら、その結果を授業に反映させていきたい。

(4) 学校全体として取組を始めたばかりであるため、全国学力・学習状況調査や校内の職員アンケート、生徒アンケート等の検証をこれからも続けていくことが必要である。

(5) 「御所中授業モデル」の構築に向けて、全教職員が授業の「めあて」や「見通し」、「振り返り」を意識した授業づくりを継続して取り組んでいくことが大切であると考える。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 奈良県宇陀市立榛原小学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

本校では、過去３年間、算数科を通じて基礎・基本となる力の充実と主体的・対話的な学びに至る授業づくりを研究してきた。

具体的には、「問題把握」「考えの明確化」「共有・練り上げ」「まとめと活用」という一連の流れに沿った授業展開を大事にしてきた。その結果、意欲的に学習課題の解決に取り組む児童が増え、考えを交流しながら比較することで、より深い学びにつながったと考える。同時に、ユニバーサルデザインの視点を根底に据え、全ての児童にとって分かりやすい授業づくりや教室環境整備を進めることもできた。

一方で、課題も明らかになった。意欲的に算数の学習に取り組む児童は増えたものの、学力向上にまでつなげることができなかったことが、学力テスト等の結果から分かった。算数に限らず、問題を読み解く力や自分で解決する力、それを支える意欲や根気といったものを十分に身に付けさせられなかったためだと考える。また、「主体的・対話的な学び」を充実させるべく取り組んできたが、学校生活のさまざまな場面に目を向けると、相手の思いや考えを落ち着いて聞こうとする態度や、違いを尊重しようとする態度に欠けることが多い。

つまり、算数の授業形態の研究に関しては、一定の成果があったといえるが、児童が本当に「分かった」「できた」と実感できる取組や、学び合いながら児童同士のつながりを深められるような取組が一層必要であると考える。これまで私たちが大事にしてきた「考えを伝え合う学習」「互いに学び合う学習」をより充実させ、児童のものの見方や考え方を広げ、深めることはもちろん、他者への理解を深め、尊重する態度を高められるようにしたい。

そこで、研究主題は、「全ての子どもが主体的に学び合う授業の創造～分かる楽しさ・できる喜びが実感できる授業づくり～」とした。

《研究の仮説》

| |
|---|
| 基礎・基本の力を身に付け、自ら考え学ぶ学習活動を習慣化することで、全ての児童が、学習目標の達成を目指して意欲的に取り組み、読解力や思考力、表現力を着実に伸ばすことができるのではないか。<br>さらに、それぞれの児童の見方や考え方を学び合うことで、コミュニケーションに必要な力を伸ばしながら、たがいのよさを実感したり、違いを認めたりできるのではないか。その結果、児童同士がつながり合い、ともに高め合う集団へと成長するのではないか。 |

## ２．協力校としての取組状況

### (1) 授業研究

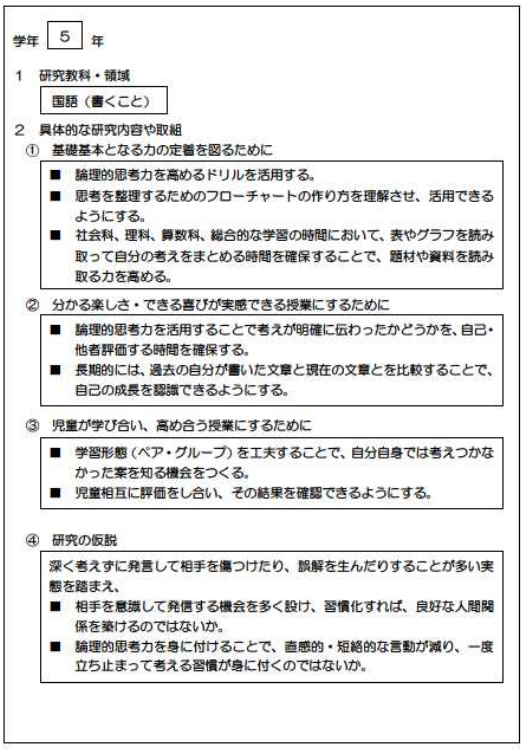
年度の初めに、各学年での具体的な研究内容や取組を次のような観点でシートにまとめ、全体で共有した。（資料①）

| |
|---|
| ①基礎・基本となる力の定着を図るために |
| ②分かる楽しさ・できる喜びが実感できる授業にするために |
| ③児童が学び合い、高め合う授業にするために |
| ④研究の仮説 |

授業を行う際には、ユニバーサルデザインの視点を重視しながら、次のような観点で「授業デザインプラン」を作成した。児童の傾向や課題を踏まえて、タイプＡ、タイプＢ、タイプＣに分類し、それぞれのタイプに応じた手立てを考え、授業の中で検証した。（資料②）

《取組の柱》

| |
|---|
| ①教科・領域②単元③付けたい力（本時の目標） |
| ⇩《ユニバーサルデザインの視点から》 |
| ④児童の傾向と手立て |
| ⑤主体的・対話的な学びを創造するための手法や目的 |
| ⑥目指す子ども像 |



学年 5 年

1　研究教科・領域

国語（書くこと）

2　具体的な研究内容や取組

① 基礎基本となる力の定着を図るために

- ■ 論理的思考力を高めるドリルを活用する。
- ■ 思考を整理するためのフローチャートの作り方を理解させ、活用できるようにする。
- ■ 社会科、理科、算数科、総合的な学習の時間において、表やグラフを読み取って自分の考えをまとめる時間を確保することで、題材や資料を読み取る力を高める。

② 分かる楽しさ・できる喜びが実感できる授業にするために

- ■ 論理的思考力を活用することで考えが明確に伝わったかどうかを、自己・他者評価する時間を確保する。
- ■ 長期的には、過去の自分が書いた文章と現在の文章とを比較することで、自己の成長を認識できるようにする。

③ 児童が学び合い、高め合う授業にするために

- ■ 学習形態（ペア・グループ）を工夫することで、自分自身では考えつかなかった案を知る機会をつくる。
- ■ 児童相互に評価をし合い、その結果を確認できるようにする。

④ 研究の仮説

深く考えずに発言して相手を傷つけたり、誤解を生んだりすることが多い実態を踏まえ、

- ■ 相手を意識して発信する機会を多く設け、習慣化すれば、良好な人間関係を築けるのではないか。
- ■ 論理的思考力を身に付けることで、直感的・短絡的な言動が減り、一度立ち止まって考える習慣が身に付くのではないか。

資料①　学年の具体的取組シート

（資料２　「榛原小学校　デザインプラン」）

榛原小学校　授業デザインプラン　　○年○組

取組の柱　　例

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 教科・領域 | 算数 |
| 2 | 単元 | 比例と反比例 |
| 3 | 付けたい力（本時の目標） | 日常の課題に対し、比例を利用して解決するとともに、比例を利用することのよさを理解する。 |

UDの視点

| | | タイプA | タイプB | タイプC |
|---|---|---|---|---|
| 4 | 児童の傾向 | 問題場面や問われている内容についての理解が十分でなく、取りかかるのに時間がかかる。 | どのような既習内容が活用できるのかが分からず、課題を解決するための方法が思い付かない。 | 自分の考えに自信がもてず、進んで発言することができない。 |
| | 手立て | ○具体物を掲示して、量感をつかませ、問題場面を理解しやすいようにする。 | ○既習内容を壁面に掲示し、方法を選択できるようにする。 | ○ペアで互いの考えを発表し検討する場を設定することで、伝えることに慣れさせ、自信につなげる。 |

| | | |
|---|---|---|
| 5 | 主体的・対話的な学びを創造するための手法や目的 | ○問題場面の設定を工夫し、解決への意欲を高める。<br>○ペア学習の時間を設定することで、相手を意識しながら自分の考えを伝える活動を全員ができるようにする。<br>○全体で考え方を発表し合うことで、自分の考えと比べながら聞き、共通点や解法のよさについて考えられるようにする。 |

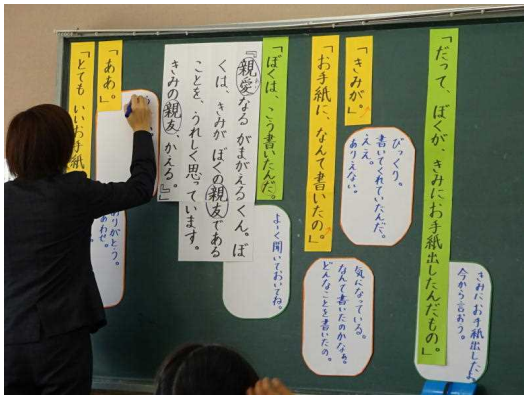
| | | |
|---|---|---|
| 6 | 目指す子ども像（この授業で、どんな力が付いたかなど） | ○具体物を通して数量をイメージし、解決の見通しを立てることができる。<br>○既習の学習内容をもとに、自分の考えを図、式、文で表現することができる。<br>○模倣を示しながら説明することができる。<br>○いろいろな解決法を見比べ、共通点に目を向けると、比例の性質が利用されていることが分かる。 |

資料②　授業デザインプラン

実際の授業では、「問題把握」「考えの明確化」「共有・練り上げ」「まとめと活用」という一連の流れに沿った授業展開を大事にした。

まず、「問題把握」では、１時間の授業の流れやめあてを確認した。「考えの明確化」では、課題を適切に把握し、まず、自力解決を目指した。そして、「共有・練り上げ」では、ペア学習やグループ学習等の学習形態を工夫し、その後、全体交流する時間を確保した。最後の「まとめと活用」では、１時間の授業を振り返り、振り返りシート等を活用しながら自分の学びについて検証する時間を確保するようにした。

どの授業においても、ユニバーサルデザインの視点を根底に据え、全ての児童にとって分かりやすい授業づくりや教室環境整備に努めた。




色や形を工夫した板書

ペア学習での学び合い

## (2) 家庭学習の充実

家庭学習の意義を「習慣化」「定着」「自律」とした。前年度末には、本校独自の「家庭学習の手引き」を作成した。保護者の理解と協力を得るために、４月の家庭訪問の際に、担任からの説明を加えて「家庭学習の手引き」を保護者に手渡した。また、自主学習ノートを学級内で紹介したり、掲示したりした。

家庭学習の手引き

## (3) 読書活動の推進

ユニバーサルデザインやアクティブ・ラーニングの視点を大切にした授業づくりを進めていく中で、改めて基礎的・基本的な内容や技能の重要性を再認識した。これまでの取組から、グループ学習やペア学習等の協働学習を行うには、まずは自己解決が必要であり、そのための基礎・基本の力は、やはり「読む力」であると捉えた。文章を読んで内容を理解する力は、全ての教科・領域で必要となる。内容をきちんと読み取っていないため、的を射た答えにならなかったり、どう答えたらよいか悩んでしまったりする児童が多いように思われる。また、全国学力・学習状況調査等の長い問題文を読みこなすためには、文字への抵抗感を取り除く必要があり、文字に慣れ親しむことが大事である。そのためには、日々の読書が有効であると考えた。そこで、本年度の課題を、「読書を習慣化し、児童一人一人の読書量を増やすこ

と」に設定した。具体的には、1 日の読書時間 30 分以上の児童を、10%～15%増やすことと、全く読書をしない児童を現状よりも 10%減らすことを目標とした。

① 環境整備

・図書室の環境を整備し、児童が自然と足を運んでくれるような読書環境を整備した。図書ボランティアの方々の協力を得ながら、掲示物を工夫したり、新着図書や新刊図書の紹介を工夫したりした。

・読書タイム（「お話会」のない金曜日の朝）の徹底、学級図書の整理と充実に努めた。

② 読書の機会の確保

・従来から実施している「お話会（隔週金曜日、NPO）」や「お話祭り（年２回、教員）」を継続するとともに、その内容や方法の改善を図り、児童に読書意欲を喚起する取組を進めた。

・家庭学習でも音読や読書の課題を与え、家庭においても読書の時間を確保した。

お話会

お話祭り

③ 読書のすすめと賞賛

・個々の児童に「目標（冊数）」の設定をさせるとともに学校全体で目標を設定し、達成に向けて取り組んだ。

・学校だよりや全校朝会等で、保護者や児童に「読書の推進」を呼びかけ、学校全体で雰囲気づくりをした。

・児童の読書記録をとり、機会あるごとに紹介したり賞賛したりしながら児童の読書意欲を高めた。

図書委員による賞状づくり

新刊図書の紹介

### (4) 職員研修

夏の職員研修で奈良教育大学教職大学院教授の小柳和喜雄先生にお願いして、本校の研究テーマに沿った講演をしていただいた。日頃の授業実践の中で、小柳先生に聞きたいことを事前にお知らせし、当日、一つ一つ懇切丁寧に分かりやすく教えていただいた。「なるほど」と思える回答に、明日からの授業実践意欲が湧いた。限られた時間ではあったが、実のある有意義な研修であった。

## ３．取組の成果の把握・検証

### (1) 授業研究

各学年や学級において、児童の学習理解や定着を図るために、日々の教材研究や教材教具の工夫を行うことができた。また、教師間の情報共有や連携もできていた。授業では、友達の意見を聞いて自分の考えと比べ、深めようとする児童の姿が多く見受けられるようになってきた。綴り方の授業では、学級通信での作品紹介を積み重ねたことで、友達に助けられたことや悔しかったこと、粘り強く頑張ったことなど、書く内容も変化してきた。書くことへの抵抗感も少なくなった。

### (2) 家庭学習

自主学習では、工夫された自主学習ノートを教室内に掲示したり、紹介したり、頑張りカードや賞状等で意欲を喚起したりすることで、毎日こつこつ努力を重ねる児童が増えた。

また、内容面でも紹介された友達のノートを参考にすることで自分のノートを工夫する児童が増えてきた。

**《1日の家庭学習時間30分以上の子どもの割合》**

| | 令和元年４月の結果 | 令和元年12月の結果 |
|---|---|---|
| ４年 | 64% | ◎　73% |
| ５年 | 71% | ○　76% |
| ６年 | 74% | △　63% |

### (3) 読書活動

児童各自が読書冊数の目標を決め、読書カード（読書の記録）を作成した。隔週の金曜日に読書タイムを設定し、読書の時間を確保した。また、図書室の環境整備や本の紹介等をする中で、図書室に足を運ぶ児童が増えた。アンケートの結果を見てみると、30分以上読書をする児童の割合が、４年生と６年生で４月当初より高くなった。全く読書をしない児童の割合も、４年生と５年生で低くなった。

**「１日の読書時間が 30 分以上である」と回答した児童の割合**

| | 令和元年<br>４月結果 | 令和元年<br>12月結果 |
|---|---|---|
| **４年** | 29% | 40% |
| **５年** | 36% | 24% |
| **６年** | 28% | 34% |

**「全く読書をしない」と回答した児童の割合**

| | 令和元年<br>４月結果 | 令和元年<br>12月結果 |
|---|---|---|
| **４年** | 14% | ７% |
| **５年** | 37% | 32% |
| **６年** | 27% | 31% |

### (4) 職員研修

本校の教育信条に「学ぶ者のみが人の師となる事ができる」というフレーズがある。年間研修計画で授業研や研修を計画し、実施してきた。また、長期休業中には、自発的な講習会への参加を促し、授業力・指導力向上に向けて自己研鑽する機会を確保した。若手教員が多くなる中、研修は必須と考える。このことは、確実に個人の授業力向上につながっていると思う。

## ４．今後の課題

### (1) 授業研究

① 榛小デザインプランの改善やペア学習、振り返りの時間の設定などの学習方法や学習形態が定着してきた。この流れを継承しつつ、問題文の意図を正確に読み取り、適切な解答を導く「読む力」を育てていかなければならないと考える。

② 若手教員が増える中、いろいろな教科・領域についての研修や実践が必要であると考える。ベテラン教員や中堅教員が自分の経験や実践をもとに若手教員への指導助言が授業力・指導力の向上につながるので、研修の機会を確保していきたい。

③ １時間の授業の中で、反復学習の時間を確保することが基礎・基本の定着に影響してくると考える。授業の後半に、課題練習を組み入れ、その時間の個々の学びの確認をしていきたい。

④ これまでも、各学年で作った自作教材や使用した資料等を資料室に保管してきた。今後も、新たな教材教具の開発と教材管理を行い、誰でもいつでも使用できる環境を整備していきたい。

### (2) 家庭学習

① 宿題等、同一課題の内容検討とともに、自主学習をさらに促していく必要がある。個人差があるので、休み時間や放課後等を使っての個別指導も必要である。

② 家庭学習は、家庭の協力も必要になってくる。保護者に対しても、何を、どのように学習すればいいか、懇談会や学年通信等で知らせていく必要がある。

③ 自主学習の定着を図るためには、児童への意欲喚起が必要である。自主学習ノートの紹介や情報提供を今後も継続して行っていきたい。

### (3) 読書活動

高学年になるほどスマートフォンの所持率が高い。６年生では、クラスの約半数の児童が自分のスマートフォンを所持している現状がある。そのため、本よりもスマートフォンやパソコン等を使って情報収集や記事閲覧をしていることが多いと思われる。そのことが、読書離れや活字離れの一因になっている。読書の機会を確保しながら、あらゆる手法を使って読書の効果や読書のよさを引き続き伝えていきたい。

### (4) 職員研修

研修計画を年間計画の中にきちんと位置付け、課題やテーマに沿った効果的な研修を取り入れていきたい。研修については、自発的に講習会や研究大会等への参加を促し、授業力・指導力の向上に向けて自己研鑽する機会を確保していきたい。

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 奈良県宇陀市立菟田野小学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

昨年度より、本校では「自分の考えを明確に表現する児童の育成」～書く力を育てる学習活動の創造～を研究主題に掲げ、国語科の書く力の育成に取り組んできた。

その背景として、平成 29 年度全国学力・学習調査の結果が、国語では「読むこと」「書くこと」が全国平均を下回っていたことが挙げられる。さらにその結果を分析し、文章の意味を正しく読み取る力や、自分の考えを明確にして書く力に課題があり、それは国語のみならず、算数においても根本的な学力上の課題になっていると考えた。

平成 30 年度の研究・取組によって、本校の「国語が好き、まあまあ好き」と答えた児童の割合は 68%から 78%、「書くことが好き、まあまあ好き」と答えた児童の割合は 60%から 68%と増加した。その理由として、「書き方が分かるようになったから」「友達や先生に読んでもらえるから」などが挙げられた。（いずれも校内児童アンケートより）

しかし、書く学習への意欲は高まったものの、奈良県国語教育研究会の学力診断の結果を見ると、学校全体としては上がっておらず、確かな学力として定着するまでには至っていない。

また、国語科を通した「自分の考えを明確に表現する児童の育成」の取組とともに、家庭学習の指導・奨励にも取り組んできた。その理由として、平成 29 年度宇陀市生活行動・学習活動調査で、学校の授業時間以外に普段ほとんど学習しない児童が、宇陀市で最も多い結果であったことが挙げられる。これは、学習意欲や家庭での自主的な学習習慣に課題があり、児童の学力につながる課題であると考えた。そこで、平成 30 年度は、各学年に応じた自主学習の指導とともに、「家庭学習の進め方」を作成して保護者に啓発するなど、学校と家庭が協力して取組を進めた。その結果、平成 30 年度市生活行動・学習活動調査では、学校の授業時間以外に普段ほとんど学習しない児童の割合が、４・５年生は０％、６年生は６％と、大幅に減少した。

しかし、児童の自主学習の取組状況について見てみると、積極的に取り組む児童とそうでない児童の差が大きく、低学年と高学年の間でも差があった。また、中学校との連携という視点からも、その取組にギャップが残る状態であった（菟田野中学校では、全員毎日１ページの自主学習が課せられており、家庭学習の習慣がスムーズに連携されていない状態）。

## ２．協力校としての取組状況

今年度は、昨年度に引き続き、「自分の考えを明確に表現する児童の育成」を目指し、国語科を通して「書くこと」の力の育成に取り組んだ。昨年度の県の学力テストの「書くこと」で県平均を下回ったという結果を踏まえ、国語科の「書くこと」の授業研究に加え、「学びタイム」を活用して条件付き作文にも取り組んだ。また、自主学習に関しては限られた児童が行うという実態があったため、今年度は、全児童１日１ページを目標に取り組むことにした。

### (1) 基礎学力の定着を図るための「学びタイム（始業前 10 分間）」の活用

① 全校読書（火曜日・水曜日の朝 10 分間／毎日、５時間目までの５分間）

② 語彙力の育成（隔週月曜日）：言葉集め・短文づくり

③ 「書くこと」（木曜日）

・100 マス作文：提示された題材について、限られた時間内に限られた字数で書いた。

・俳句・川柳：奈良新聞に投稿したり、年に１回各学年の作品を昇降口に掲示したりした。

・条件付き作文：過去の学力テスト等に取り組み、事後指導を行った。

④ 算数の反復練習や補習（金曜日）

### (2) 教師の指導力の向上

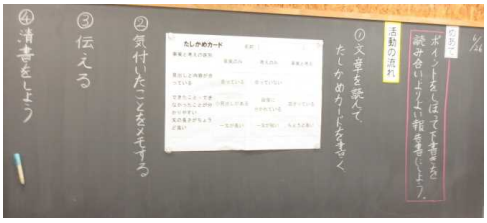
国語科を通して「書くこと」の力の育成を図るため、全学年研究授業を行い、指導力の向上を目指した。低中高学年部会で指導案を検討し、県教育委員会 川西 聡弘 係長を講師に迎えて研究授業を公開し、全職員で研究協議を行った。

＜各学年の研究授業＞

| | | |
|---|---|---|
| 第１学年 | よく見て書こう「しらせたいな、見せたいな」 | 11 月 27 日 |
| 第２学年 | まとまりに分けてお話を書こう「お話のさくしゃになろう」 | 9 月 25 日 |
| 第３学年 | れいをあげてせつめいしよう「食べ物のひみつを教えます」 | 9 月 25 日 |
| 第４学年 | 組立を考えて書こう「自分の考えを伝えるには」 | 6 月 26 日 |
| 第５学年 | 事実と考えを区別して報告文を書こう「次への一歩 活動報告書」 | 6 月 26 日 |
| 第６学年 | 読み取ったことや感じたことを表現しよう「この絵、私はこう見る」 | 11 月 27 日 |

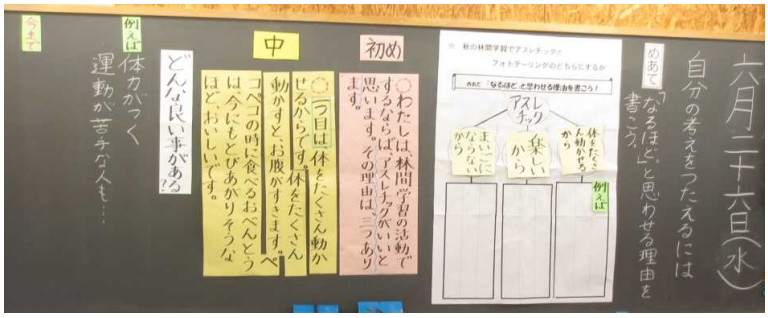
① 学習目標の提示（ＵＤＡスタンダード）

子どもが「この１時間で何をするか」がはっきりと分かるようにめあてや活動の流れを提示した。




② 自分で考える活動（ＵＤＡスタンダード）

「何を」「どのように」書いていくのかを明確にしてから、個の活動を進めた。そして、課題に向き合い、じっくり考えて活動する時間を確保した。



③　交流する活動（ＵＤＡスタンダード）

ペアやグループで読み合ったり、話し合ったりした後、全体で発表した。

④　振り返り（ＵＤＡスタンダード）

授業の最後には、めあてに戻り、「何を学習したのか」「どのように学習したのか」などについて振り返らせた。

⑤　授業のユニバーサルデザイン化（ＵＤＡスタンダード）

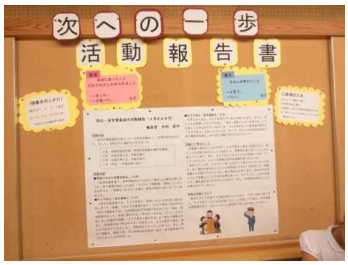
・大型テレビに資料や教材等を映したりデジタル教材など使ったりして、視覚的に示した。
・ワークシートの工夫や付箋の活用により、分かりやすい授業を目指した。
・学習の流れを明示しモデル文や作品を紹介して、学習の見通しをもたせた。
・文章を書く際に必要な表現方法や手掛かりになる語彙を掲示した。

ＩＣＴ機器の活用

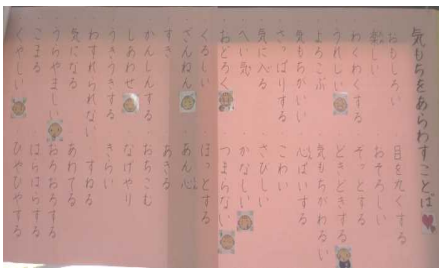
ワークシートの工夫・付箋の活用

単元の流れの明示

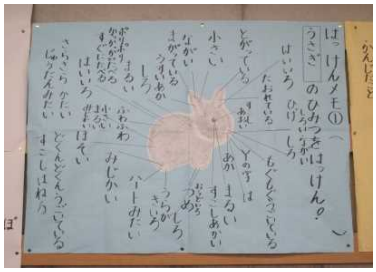
モデル文の掲示




語句や表現方法の掲示



書き方の掲示



## (3) 家庭学習の充実

昨年度に引き続き、年２回家庭生活や学習に関するアンケートを実施して、学力向上に向けた家庭教育の啓発を行った。さらに今年度は、家庭学習の習慣化を目標として、家庭学習の進め方やそれぞれの学年に合った学習内容を配付し、全校児童１日１ページを目標に自主学習に取り組んできた。とりわけ、平成 30 年度宇陀市生活行動・学習活動調査で、学校の授業時間以外に普段ほとんど学習しない児童の割合が大幅に減少したことを踏まえ、家庭での自主学習の内容を自分で計画して取り組んでいくことに重点を置いて、１年間指導した。

### (4) 中学校との連携

昨年度から行われている小中連携会議では、人権部、生活部、学力向上部に分かれて、小・中学校の取組を交流し、これから小中連携してどのように取り組んでいくのかについて話し合ってきている。学力向上部では、小学校と中学校が連携して学力を向上させるためにできることとして、自主学習について話し合った。モチベーションを持続させるための工夫、自主学習が学力向上につながる手立てなどについて意見を出し合った。

(5) 放課後学習の実施

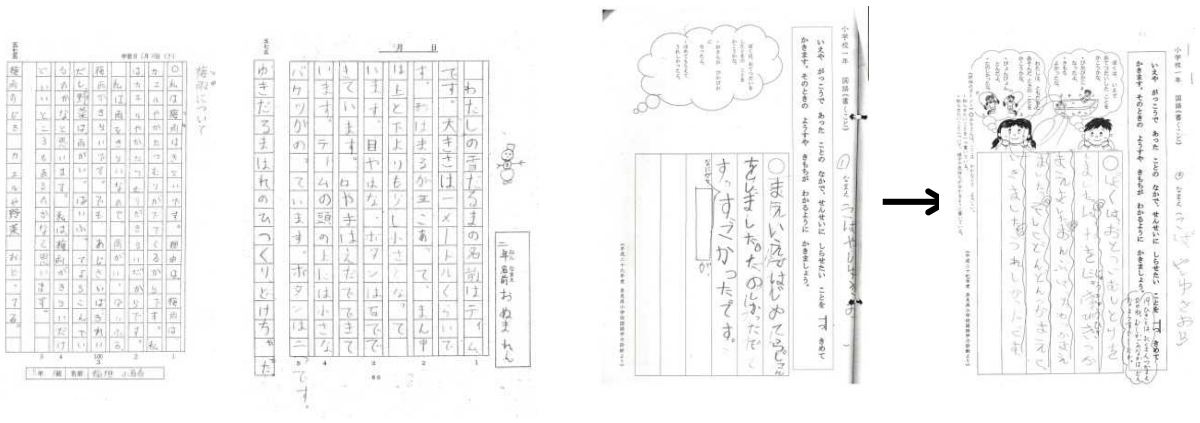
低学力傾向の児童（各学年２名程度）に対して、放課後指導の先生２名による個別指導を実施している。（火曜・木曜の放課後、宿題の補助や児童の実態に応じた補習・反復練習など）

## ３．取組の成果の把握・検証

毎朝 10 分間の学びタイムを活用して、読書、書くこと、算数に取り組んできた。今年始めた俳句・川柳は、書いた作品を奈良新聞に投稿すると掲載されたこともあり、意欲的に取り組めた。俳句を通して書くことに自信をもつようになった子もいる。条件に基づいて書く作文の力を付けるために、100 マス作文や過去の学力テストを活用した。はじめは条件に合わせた書き方ができない児童も多かったが、回を重ねるにつれ書けるようになってきた。100 マス作文は、書き直しをしなくてよいというルールで実施することで、書くことに抵抗なくのびのびと自由に書いていた。また、普段書かないような題材も多く、楽しんで書くことができた。このように 10 分間という短い時間ではあるが、年間通して行うことで取組が習慣化し、児童は、抵抗なく取り組むことができた。そして、「書くこと」に慣れ、認められることで書く意欲につながり、この２年間で書く量も増えてきた。書くことを苦手としていた児童も書けるようになってきた。【資料１】

【資料１】100 マス作文や条件付き作文（過去の学力テスト活用）

＜100 マス作文＞　　＜条件作文（過去の学力テスト活用）＞



昨年度に引き続き今年度も、国語科の「書くこと」の授業研究をしてきたが、どの児童も書けるようにするには「どんな手立てが必要か」を学年部で常に話し合い、全学年で授業を公開して研究協議してきた。授業の展開についても、学習目標や学習の流れを提示することで、児童は「何を学習するのか」見通しをもつことができ、意欲的に学習に取り組むことができた。また、自分で考えて書く活動をするときには、全体でモデルを共有してから個の活動に取り組むようにする

ことで、何をどうすればよいのかが明確になり、スムーズに活動に取り組むことができた。その他、ワークシートを工夫したり、付箋を活用したり、モデル文や語句や表現の仕方を掲示したりすることで、書くことが苦手な児童も書き進めることができるようになった。学習中においては、ペアやグループで読み合ったり、話し合ったり、全体で発表したりすることで、友達のよい表現方法を学べたり、多様な文章に触れたりすることができ、友達の助言から書く内容を膨らませることができたり、よりよい文章にしたりすることもでるなど、児童が対話を通して学びを深めることができた。

これらに取り組んだ結果、本年度 11 月に実施した県の学力テストの「書くこと」では、昨年度よりも全体的に条件に合わせて書けるようになった児童が増えたという結果が出た。【資料２】また、12 月に行った校内の国語アンケートでも、「学んだことを生かして、自分の思いや考えを書くことができるようになりましたか。」という質問項目に対し、「書けた・まあまあ書けた」と 85%の児童が回答している。これは、児童自身も書けるようになってきたことを実感していると考えられる。

【資料２】県国語学力テスト条件作文の結果

国語・書くこと

2018年度

| | 1年 | | | 2年 | | | 3年 | | | 4年 | | | 5年 | | | 6年 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 |
| ① | 題材の選定 | | | 文章全体の構成 | | | 段落の構成 | | | 段落の構成 | | | 段落の構成 | | | 段落の構成 | | |
| | 78.9 | 87.1 | −8.2 | 69.6 | 66.2 | 3.4 | 15.8 | 38.3 | −22.5 | 63.3 | 45.8 | 17.5 | 70 | 68.5 | 1.5 | 47.6 | 57.7 | −10.1 |
| ② | 題材に即した記述 | | | 内容に応じた記述 | | | 情報の再構築 | | | 情報の再構築 | | | 必要な情報の収集 | | | 必要な情報の収集 | | |
| | 36.8 | 77.9 | −41.1 | 43.5 | 57.1 | −13.6 | 63.2 | 74.5 | −11.3 | 90 | 79.7 | 10.3 | 55 | 64.9 | −9.9 | 38.1 | 82.4 | −44.3 |
| ③ | | | | | | | 内容に応じた記述 | | | 内容に応じた記述 | | | 内容に応じた記述 | | | 内容に応じた記述 | | |
| | | | | | | | 73.7 | 41.3 | 32.4 | 70 | 50.2 | 19.8 | 45 | 40.9 | 4.1 | 0 | 77.8 | −77.8 |
| 全A | 21 | 75.2 | −54.2 | 34.8 | 50.3 | −15.5 | 15.8 | 25.5 | −9.7 | 50 | 32.7 | 17.3 | 35 | 32.7 | 2.3 | 0 | 58.2 | −58.2 |
| 無記入 | 4 | | | 0 | | | 0 | | | 1 | | | 0 | | | 6 | | |

2019年度

| | 1年 | | | 2年 | | | 3年 | | | 4年 | | | 5年 | | | 6年 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 | 学年 | 県 | 差 |
| ① | 伝えたいことの明確化 | | | 文章全体の構成 | | | 事柄の収集 | | | 事柄の収集 | | | 段落の構成 | | | 段落の構成 | | |
| | 83.3 | 82.1 | 1.2 | 77.8 | 64.6 | 13.2 | 83.3 | 92.6 | −9.3 | 95 | 94.2 | 0.8 | 90 | 65.6 | 24.4 | 94.7 | 80.8 | 13.9 |
| ② | 内容に応じた記述 | | | 内容に応じた記述 | | | 意図の明確化 | | | 意図の明確化 | | | 事柄の関係付け | | | 事柄の関係付け | | |
| | 93.3 | 69.4 | 23.9 | 88.9 | 59 | 29.9 | 66.7 | 76 | −9.3 | 80 | 81.4 | −1.4 | 76.7 | 55.4 | 21.3 | 84.2 | 67.7 | 16.5 |
| ③ | | | | | | | 伝えたいことの明確化 | | | 伝えたいことの明確化 | | | 内容に応じた記述 | | | 内容に応じた記述 | | |
| | | | | | | | 37.5 | 53.7 | −16.2 | 60 | 63.5 | −3.5 | 46.7 | 43.5 | 3.2 | 52.6 | 57.7 | −5.1 |
| 全A | 83.3 | 64.9 | 18.4 | 77.8 | 51.7 | 26.1 | 29.2 | 43 | −13.8 | 55 | 54.4 | 0.6 | 36.7 | 30.9 | 5.8 | 52.6 | 44.6 | 8 |
| 無記入 | 1 | | | 0 | | | 3 | | | 1 | | | 2 | | | 0 | | |

一方、家庭学習の充実を図るために取り組んだ自主学習は、保護者にも家庭学習の進め方やそれぞれの学年に合った学習内容を配布した後、４月から始めた（１年生は 10 月から開始）。今年度は、全校児童１日１ページを目標に自主学習に取り組んだが、はじめは慣れなかった児童も、日が経つにつれ、宿題以外に自主学習を１ページは取り組むことが当たり前になり、習慣化してきた。また、スタンプやシールを貼ったり、学級で紹介したりして、その子自身の頑張りやよさ

を褒めるようにしてきたことで、意欲的に取り組む児童も多くなった。また、児童自身もページ数が増えていくことが目に見えて分かり、努力や知識の積み重ねが実感できている様子であった。そして、今年度の宇陀市生活行動・学習活動調査（４～６年対象）では、家で自分で計画して学習している児童の割合が 20～40％増え、80～90％となったという結果が出た。【資料３】

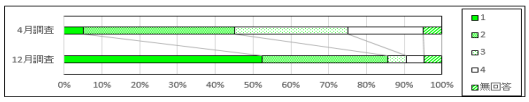
これは、多くの児童が、家庭で自分なりに内容を決めて自主学習に取り組めるようになったと考えられる。自主学習に関する保護者アンケートにおいても、「するのが当たり前になって、習慣化している。」「早めに学習に取り組めるようになってきた。」「自主的に学習できるようになった。」「時間を考えて学習できるようになった。」「自分で工夫して要点をまとめている。」「テストの点数が上がってきて、喜んでいる。」「部屋で落ち着いて学習するようになった。」などの意見をいただき、この１年で児童が変化したことが見て取れた。

【資料３】令和元年度　宇陀市生活行動・学習活動調査より

第４学年

(6) 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか

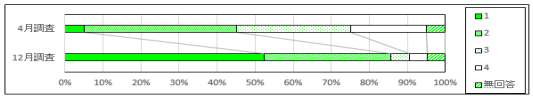
| | 1 している | 2 どちらかといえばしている | 3 あまりしていない | 4 全くしていない | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4月調査 | 5% | 40% | 30% | 20% | 5% |
| 12月調査 | 52% | 33% | 5% | 5% | 5% |




第５学年

(6) 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか

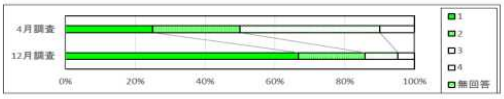
| | 1 している | 2 どちらかといえばしている | 3 あまりしていない | 4 全くしていない | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4月調査 | 5% | 40% | 30% | 20% | 5% |
| 12月調査 | 52% | 33% | 5% | 5% | 5% |




第６学年

(6) 家で自分で計画を立てて勉強をしていますか

| | 1 している | 2 どちらかといえばしている | 3 あまりしていない | 4 全くしていない | 無回答 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4月調査 | 25% | 25% | 40% | 10% | 0% |
| 12月調査 | 67% | 19% | 10% | 5% | 0% |




## ４．今後の課題

「書くこと」以外の国語の学力テストや算数の学力テストの結果を見てみると、全体的に県平均との差が少し縮まったと言えるが、未だ県平均を下回っている。【資料４】学年ごとに苦手とする所を分析したところ、国語、算数とも、文章の意味を正しく読み取ることができていないということが分かった。今後は、今年度の「書くこと」の取組を継続しつつ、文章の意味を正しく読み取り、その意味を理解し、問いに対しても適切に解答を導引き出せる「読む力」を育てていかなければならないと考える。

また、家庭学習においても、宿題の他に、自主学習を１日１ページ取り組むことを目標として取り組むことが習慣付き、その内容も自主的に決められるようになってきたが、低学力傾向の児童については宿題だけでも負担が大きく、自主学習まで意欲的に取り組めていない現状がある。今後は、意欲的に続けられるような働きかけや、内容の質を高める手立てを考えていきたいと考える。

【資料４】県平均との差

| | 2017 年度 | | | 2019 年度 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 学校平均 | 県平均 | 差 | 学校平均 | 県平均 | 差 |
| 国語 | 65.3 | 71.0 | -5.7 | 73.7 | 78.2 | -4.5 |
| 算数 | 67.1 | 75.1 | -8.0 | 64.7 | 70.3 | -5.6 |

（様式３）

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

令和元年度委託事業完了報告書【協力校】

| 都道府県名 | 奈良県 | 番号 | ２９ |
|---|---|---|---|

| 協力校名 | 奈良県宇陀市立菟田野中学校 |
|---|---|

## ○　協力校として実施した取組内容

### １．当初の課題

本校では、長年「基礎、基本的な学力が定着していない」「家庭学習の習慣が身に付いていない」といった低学力傾向の生徒が多く、学習規律の点でも授業への集中力がなく、落ち着いて授業を受けることができない、居眠りをする生徒が多い、など、学力・生活両面で、大きな課題を抱え、そういった課題への対応も、なかなか全校挙げて組織的に対応する体制が整わない学校であった。

そこで平成 28 年度より、学力向上に向けて、全校を挙げて取り組む体制づくりを整え、段階的にではあるが、以下のような点に重点を絞り、学力向上に向けた取組を行ってきた。

①授業のユニバーサルデザイン化

②授業での言語活動の重視

③家庭学習を身に付ける取組

そうした、全校を挙げて取り組む体制が次第にできてくる中、生徒が落ち着いて授業を受ける態度や、基礎学力面での向上といった点で、変化が形として見えてきた。

そこで、本研究に際し、これまでの取組を踏まえながら、より確かな学校変革・学力向上を目指して、実感できる変革を作りだして行こうと、研究の柱として次の二点に重点を置き取組を行った。

①「自主学習ノート」を通した家庭学習の充実

②「学び合い」（少人数での話し合いやグループ活動を行うことで、つまずき立ち止まる生徒が参加でき、互いを高め合う授業を目指す）を大切にした授業研究

### ２．協力校としての取組状況

#### (1)「自主学習ノート」を通した家庭学習の充実

生徒の実態として、一昨年度の調査で、「普段の家庭学習の時間、30 分未満の生徒」が、現在の３年生で 71%といった、学習習慣が作れていない厳しい状況であった。そこで、昨年度より家庭学習の習慣化を目指して、「自主学習ノート」の取組を全校で実施（毎日１ページ、自主学習を行ってくる）している。学力向上部（学級担任の集まり）で定期的に点検と指導方法の交流を図りながら取り組んだ。

その結果、家庭学習の習慣化は、一年目で大きく向上（【資料１】30 分未満：23%）、二年目の本年は、いかに生徒のモチベーションを上げ、内容をより主体的な深まりのある取組

にするか、様々な理由で継続できない生徒への対応等を課題として取り組んだ。

① 取組の主な工夫

・生徒へのモデルノートの提示（最初によい学習のまとめ方や方法を例として示す）

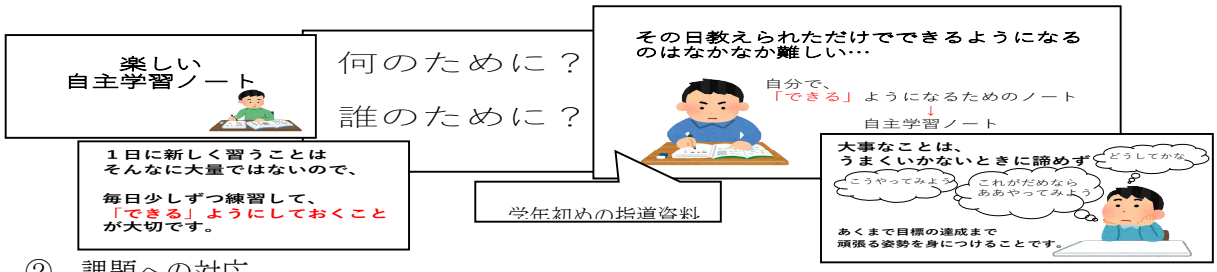
・よいノートを取り上げ、終わりの会で紹介、学級掲示を行う。紹介するものは、真似してほしい勉強法や分かりやすい単語の覚え方、その時期に関係する豆知識など多岐に渡り、様々な分野に関心を持てるようにした。

・「今日のベストノート」の表彰

・スタンプや「できたシール」を貼る

・教員からのコメントは、学年担当全員で行う。より深い学びに向けたコメント力が必要。

などがあるが、副次的な効果として教師と生徒とのコミュニケーションツールとして、信頼関係を深めるのに役立ったとの意見も多かった。また、上手く自主ノートを活用できている生徒は、定期テストの勉強としてもうまく活用できている様子も見られた。




② 課題への対応

課題として出てきたことには、生徒の実態に合わせ、以下のような対応を行った。

・忘れてくる生徒への対応

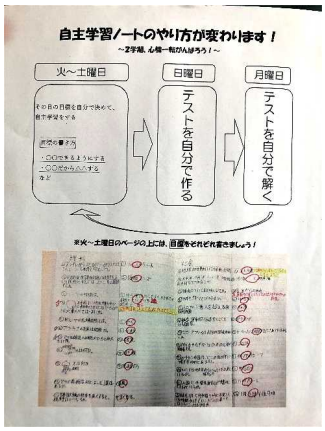
→放課後学習を行う。

・自分で学習する方法が分からない生徒への対応

→個人にあった学習内容のプリントを教員が与える。

・マンネリ化の打開

→２学期より週１回自分でテストを作る日を設ける、毎回「めあて」を書く等を行った。




また、昨年度より、地域の菟田野小学校との連携を深め、小中教員での小中教育部会を立ち上げ、そこでもこの「自主学習ノート」を小中共通のテーマとし、互いに交流しながら、小中９学年で同じ目標の下、取り組んだ。小中が共に一貫した取組を行うことによって、子どもたちを継続して伸ばすことができる体制ができてきた。

### (2) 「学び合い」（少人数での話し合いやグループ活動を行うことで、つまずき立ち止まる生徒が参加でき、互いを高め合う授業を目指す）と「振り返り」を大切にした授業研究

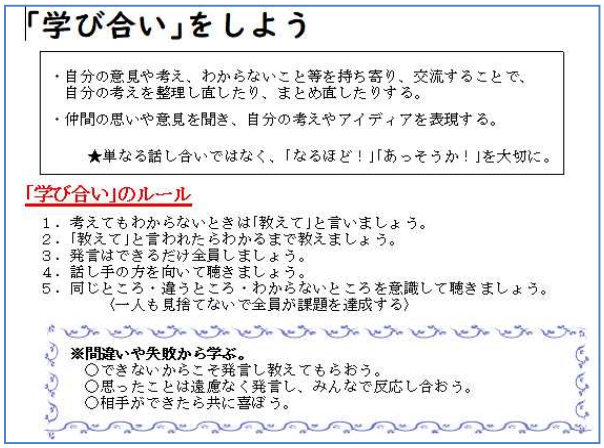
昨年度当初の実態として、落ち着いて話を聞けるようになってきたとはいえ、２、３年生の中には、授業への集中力がすぐとぎれ、話を聞いていない、他の話をする、居眠りをするといった生徒が見受けられた。その背景には、基礎基本の力の不足、「内容が分からない」や、学習習慣、学習経験の少なさからくる学習への集中力の不足、「勉強の方法が分からない」がある。

本校生徒は、部活動が熱心で、厳しいトレーニング、練習にも耐える集中力をもっているこ

とから、その学習方法さえ分かれば、授業への集中力はついてくると考え、学ぶ「内容や方法が分かる」授業を目指し、まず「学び合い」の方法を取り入れた。

ここでいう「学び合い」は、少人数、２～４人のグループで、互いの交流を通して、以下のような「ねらい」をもって授業に取り入れる。

※特に、④、⑤を重視する。


「学び合い」をしよう

・自分の意見や考え、わからないこと等を持ち寄り、交流することで、自分の考えを整理し直したり、まとめ直したりする。
・仲間の思いや意見を聞き、自分の考えやアイディアを表現する。
★単なる話し合いではなく、「なるほど！」「あっそうか！」を大切に。

「学び合い」のルール
1．考えてもわからないときは「教えて」と言いましょう。
2．「教えて」と言われたらわかるまで教えましょう。
3．発言はできるだけ全員しましょう。
4．話し手の方を向いて聴きましょう。
5．同じところ・違うところ・わからないところを意識して聴きましょう。
〈一人も見捨てないで全員が課題を達成する〉

※間違いや失敗から学ぶ。
○できないからこそ発言し教えてもらおう。
○思ったことは遠慮なく発言し、みんなで反応し合おう。
○相手ができたら共に喜ぼう。

① 習得した知識の再構成のための学び合いをする。
② 自分で考え、発言する、人の意見を聴くといった活動を通して、学びを深め、主体性を育てる。
③ 一人一人が活動していない時間を減らす。そのため、人数を少なくし、2～4人とする。
④ 分かっていない生徒が、何もしない時間、思考を止めている時間を減らし、理解を助ける活動を目指す。何よりも「学び」をあきらめさせない活動とする。
⑤ 教え合うことを通して、分かっている生徒は、人に話し伝えることで、より確かな理解へとつなげる。
⑥ なかまとして、支え合い、人と協力できる集団づくりをする。
⑦ 意見のすり合わせや発表といった活動を通して、コミュニケーション力、問題解決能力を育てる。

まず学級では、生徒に「学び合い」を大切にする意義を伝え、そのための活動のルールとして、教室に「『学び合い』のルール」を掲示し、「学習班」を特に作り、各教科の授業の中で積極的に「学び合い」活動を活用するようにした。

２年間の継続した取組から、日常的に各教科で、少人数での活動を取り入れられるようになった。その結果、班活動での話し合いが、時間的にもスムーズに、交流も活発に行えるようになり、「学び合い」活動が定着してきた。

各教科での主な取組例としては、次のようなものがある。

・数学：課題解決（「平面図形」「図形の性質と合同」「携帯電話の料金プラン」等）、練習問題等･･･生徒が互いの考えを述べ、学び合う、自らの考えと異なる考えに触れ考えが深まるよう指導。自分から分からない問題を聞きに行く姿が見られた。

・国語：プレゼン「日本の商品を海外に売る」をペアで行う・漢字、語句のゲーム（「漢字しりとり」「四字熟語トランプ」等）・「竹取物語悲しみの深い人物ランキング」等･･･ゲームを取り入れることで意欲的に活動。漢字ゲームは漢字小テストにも効果が表れた。

・英語：「話す」「読む」活動ではグループ、ペア活動、分からない内容について「学び合い」活動で教え合いを行う。英語が得意な生徒が苦手な生徒に教える場面が増えた。授業に取り組む姿勢も前向きになった。

・社会：資料活用でのバズ学習・前半に知識を得た後、後半にディベートを行う形式・難問ワークシート等･･･興味をもって話し合う姿があり、随時ヒントとなる資料を提示することで、どの班もこちらの意図した答えにたどり着いている。資料の活用を繰り返すことで、初めて見る資料においても特徴等を指摘し、他者と議論できるようになってきた。

### (3) 学力向上に向けた、個別の支援体制の充実を目指す取組

個別の支援体制の充実という点で、全学年、以下のような学習支援の取組を行っている。

① 授業のユニバーサルデザイン化･･･「UDAｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞ」の実践。特別支援学級生だけでなく、全ての生徒に「わかりやすい授業」を目指すため、授業のユニバーサル化に取り組む。

② 朝の学習の時間(10 分)･･･１、２年は読書、３年は自主学習講座を行う。チャイム着席で自分たちだけでも静かに読書したりすることで、落ち着いた状態での一日の始まりが身に付いている。

③ 夏休み(６日)･冬休み(２日)質問教室･･･各自が学習したい教科に取り組む、日頃の「分からない」をなくす取組。日頃一人で学習できない生徒への支援、働きかけができる。

④ 定期テスト前１週間の放課後･･･希望者が教室に残り、自主学習をする。分からないところや質問があれば教師に聞く。つまずきのある生徒への支援、働きかけができる。

⑤ 日頃の放課後、学習･･･質問がある時、自習したい時、放課後残って教室で学習、教師に聞くことができる。

⑥ 学校・地域パートナーシップ事業の一環として「うたの土曜塾」を行う。対象は３年生の希望者で、地域住民の方（今年度は６名の方の応募があった）による学習支援の活動で、本校を卒業した大学生や教職を退職された方などが、ボランティアで３年生の学習支援を行う。既に８年前から実施しているもので、地域のボランティアの方の支えが生徒たちにも大切なものとして伝わり、学習意欲の喚起につながっている。この取組からも自分の進路選択に向けた学習習慣の確立につなげたい。

土曜塾　指導には、教員も入る

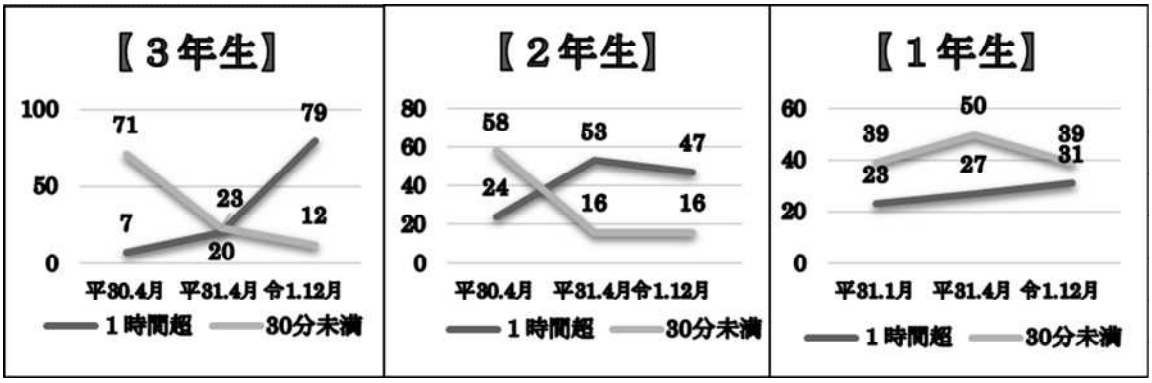
目的　本校３年生の自主学習習慣及び基礎学力の定着

日時　２学期から３月までの土曜日　午前 9:00～11:00

## ３．取組の成果の把握・検証

### (1) 「自主学習ノート」について

【資料１】「普段の学校以外での学習時間」推移（１年生は小学校６年１月からの比較）




① 「普段の学校以外での学習時間」がこの取組を初めて２年間で大きく変化した。学習時間が「30 分未満」と回答した生徒の割合は、3 年生で 71%から 12%へ、２年生で 58%から 16%になり、「1 時間超」と回答した生徒の割合は、3 年生で７%から 79%に伸び、残りの学年も数値を上げている。毎日ほとんどの生徒がノートを提出しており、確実に家庭学習が定

着してきたと考えられる。学校からの働きかけにより、生徒が家庭で机に向かう時間が確実に増え、習慣となってきた。

② 様々な勉強のパターンを身に付けられるようになってきた。学級に紹介したよいノートを参考に、勉強してくる生徒も多い。また取組を始めた昨年度前半は、授業で書いたノートをそのまま「自主学習ノート」に写すだけの生徒も多かったが、今では問題演習をすることも増え、間違えた問題はすぐやり直す癖がついてきた者もいる。これは、日曜に問題作りをしていることや教員のアドバイスや声かけが要因になっていると考えられる。

③ 課題は、学力につながるノートになっているかという点である。丁寧さやきれいさに時間を費やし、内容の間違いに気付いていない場合がある。今後、勉強に対する意欲を今以上に高め、学習の資質の向上が求められる。

④ 小中連携の活動を進めることができた。実際に教員が動き、互いに意見交流をする機会ができたことで、指導者である教員それぞれに義務教育９年間としての、教育の視野が広がり、全体で方向性を合わせ、何を大切にするかの意識が出てきた。

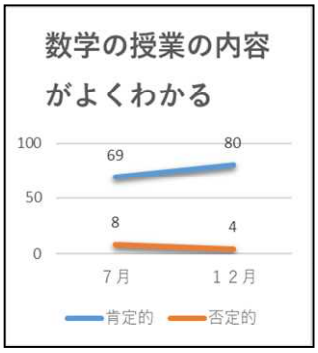
## (2) 「学び合い」活動について

① 授業での規律が保たれ、落ち着いた環境で授業を行えるようになった。（【資料３】）そんな中で「学び合い」活動も、定着して、数年前までは「分からない」ために授業へ参加できていない生徒が目立っていたが、それがクラス全体で「学び合い」活動を行い、その中で、互いに意見を交流し、それを全体へ発表する活動がきちんとできるようになった。それと共に、生徒の「分かる」と答える割合が増えてきて、授業が「楽しい」といった言葉がよく聞けるようになった。ここからも、授業の分かりやすさと、学ぶ意欲が強く連動していることが分かる。右の【資料２】のように特に３年生は、この「学び合い」活動が、うまく作用し、「授業の内容がよく分かる」が増加し、学習への参加の様子も、とても積極的になった。「学び合い」の効果として、本校は学力面ではまだまだ低学力傾向である状態にもかかわらず、「授業の内容が分かる」と答えた生徒が数学、国語共に全国平均を上回った。ただし、本校調査には、「どちらでもない」の選択肢があるが、それを考慮しても、特に「分からない」生徒が、全国平均より大幅に少ない。「学び合い」活動が、教科での「分からない」つまずきの解消や、授業への参加の度合いの向上に効果が表れていると考えられる。

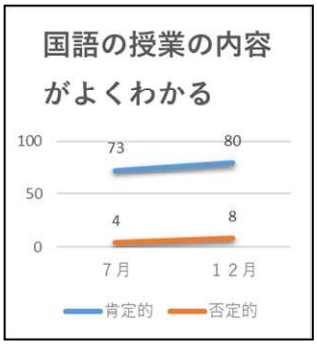
② １月のアンケートで「自分の学力向上に、とても役にたったと思うもの」として生徒が挙げたものは、昨年より始めた「自主学習ノート」が 38%（昨年 51%）、「学び合い」が 25%（昨年 27%）であった。共に生徒自身もその効果を実感として感じていると思われる。

③ 「学び合い」の活動がスムーズにできるようになり、分からないこともすぐに聞いたり、教えたりする姿がある。人にわからないと言うことは、大きな抵抗があるものだが、それが活発に行えている。この活動は、信頼できる学級のなかま集団があって、初めて成立するもので、これまで本校で伝統的に重視し取り組んでいる人権学習の取組が、人を大切にし、なかまで支え合う姿勢を積極的に行う活動として、学習態度の中でも生きてきている。

【資料２】




全国平均（肯定的 73.9・否定的 25.9）




全国平均（肯定的 77.6・否定的 22.2）

【資料３】平 31 年度全国学力・学習状況調査　生徒質問紙調査において、肯定的に回答した生徒の割合

| | 学校に行くのは楽しいと思う | 学校の規則を守っている | 人が困っているときは進んで助ける | いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う |
|---|---|---|---|---|
| 本校（H29 年度） | 92.4 | 100（90.7） | 88.5（81.2） | 100（90.7） |
| 全国平均 | 81.9 | 98.2 | 85.9 | 95.1 |

逆に、クラスで「なかまづくり」で課題が生じると、とたんに、この活動に表れ、効果が消えてしまう状況があった。まさに人権意識を高め、互いを認め合える関係、自分の思いを抵抗なく発信できるクラスづくりが、この活動、教育そのものの土台となっていることを、教員全員で実感しており、そのためにも、改めて、人権を大切にする学習を、何よりも重要な学校の柱として、教育を進めたい。

④　【資料４】から、「学び合い」活動をする中で社会科の１年集団の一学期末と２学期中間テスト得点の変化をみると、学習集団（グループ）の成績に変化が見られた。なお、グループは好きな者で集まり、一定同じメンバーだった。

・元の得点の高い低いに関わらず、同じグループで得点の変動に共通点が見られた。

・上がったグループは、交流が活発で、常に交流しながら課題に向き合っていた。逆に、下がったところは、交流が非常に低調だった。

・上がったグループでは、ほとんど一人で問題を解くことがなく、自分ができたら他に教える姿が多く見られた。

・積極的に教える生徒は、高得点であった。

【資料４】

グループ別１年社会定期テスト偏差値の変化

| | | 一学期偏差 | 二学期偏差 | |
|---|---|---|---|---|
| A1 | | 32.78 | 28.63 | ↓ |
| A2 | | 54.57 | 47.55 | ↓ |
| B1 | ◎ | 56.79 | 59.87 | ↑ |
| B2 | | 41.23 | 44.47 | ↑ |
| C1 | ◎ | 58.57 | 62.95 | ↑ |
| C2 | ○ | 55.01 | 53.71 | → |
| C3 | ○ | 45.23 | 47.55 | ↑ |
| D1 | ◎ | 59.46 | 59.43 | → |
| D2 | | 33.67 | 35.23 | ↑ |
| D3 | | 32.33 | 45.79 | ↑ |

※○◎は積極的に教える生徒

以上の点から、「学び合い」に積極的に取り組んでいた生徒は、学力も向上しており、それは、グループ内で、互いに引っ張られる形で、影響が表れている傾向がある。ここに「学び合い」活動の特徴、効果が表れていることが分かる。

## ４．今後の課題

(1) 規律ある授業、生徒の興味・関心を高める授業は、「分かる」授業からであることを改めて学校全体で共通認識し、更なる授業実践の研究を進める必要がある。「学び合い」は、あくまでも活動方法であるので、それを通したより「分かる」授業、より「おもしろい」授業を目指し、授業力を付けるための研修や研究を進めたい。特に、主体的で深い学びのためには、生徒にいかに考えさせるかを大切にする必要があり、そのための方法として、話合い後の、「書く」活動を重視し、「書く振り返り」も併せて今後も研修を深めたい。

(2) 学習への取組は、大きく二極化しており、そのため、学習をしていない、できない生徒への対応が大きな課題である。「自主学習ノート」を続けつつ、基礎基本のつまずきをできる限りなくす取組を進めたい。同時に、自分で計画を立てて進めることができるよう、生徒の学習に向けた主体性を伸ばし、より確かな学力向上へつなげたい。

(3) よりよい学びの環境のためには、やはり人権が尊重される環境であることが何より重要であることを再認識し、今後も、なかまを大切にする人権学習の深化に努めたい。